

特集◆思い出の地・再訪

座談会●方言自慢

●鎮魂〈ラ・ソビア〉

わい ふい

投 稿 誌

読んで書いて、みんなでつくる

281

逐次刊行物

平 11. 12. 13 成

国立婦人教育会館
婦人教育情報センター

農文協

〒107-8668 ☎03(3585)1141
東京都港区赤坂7-6-1
【税込定価】
http://www.ruralnet.or.jp/

自力整体法
―足腰、ひざの痛みを治す―
矢上裕著 腰痛・ひざ痛の原因である身体の「ちぢみ」「ゆがみ」「ゆるみ」を治し、基礎体力をつけるのに効果的な「自力整体法」について、写真を多用しながら分かりやすく説明する。自力整体法の相談員リストも掲載。
●1400円



庭にきた鳥 いのちのドラマを家族でみる
佐藤信治著 庭で観察した鳥や虫との関わり、植物10余種をまとめる。豊富なカラー写真と孫たちとのほのぼのとしたエピソードで綴る異色の観察記。
「庭にきた虫」(97年刊)の姉妹編。
●1950円



ビデオ 遺伝子組み換え食品って何?
生協総代会企画 知らぬ間に食卓に上がる遺伝子組み換え食品。その安全性や不安に正面から応えるビデオ。
VHS 40分 ●14700円
ビデオ 私たちの体は日本の大地が育てる
善本知孝監修 日本人の食生活の変化による大腸がんの急増。O157の流行、「大地離れ」の日本人の食を問う。
VHS 25分 ●14700円

遺伝子組み換え食品を考える事典 光と影を
藤原邦達(山形大学農学部講師)著
評価の定まらないいま、国民的合意のないままに、短期間で急速に私たちの生活に入りつつある遺伝子組み換え食品。「安全である権利」「知る権利」「選ぶ権利」のために、私たちに求められるものを考える。
最新刊
●17000円



おちんちんの話

- やまもとあひで・文
- ありたのぶ・絵
- A4判/本体価格1400円

「おちんちん」の全情報を親子の会話を中心にやさしくわかりやすく語る絵本。小学校中学年から中学生向き。幼・保・小・中・養護学校教諭、親必携の絵本。

家庭でぐんと力をつける

小学生の勉強法

家庭教育に必要なことは、勉強ができる条件をつくること、学校での勉強内容を知ること、家庭で学力を耕す「土台」をつくることです。本書はそのノウハウをたっぷり紹介します。



佐々木勝男著 四六判/本体価格1200円

〒112-0003 東京都文京区春日2-17-3

●定期購読受付中!
心とからだの主人に ●85判 隔月刊 ◆定価1260円(税込)

性と生の教育

Human Sexuality ◆偶数月1日発売

編集◎「人間と性」教育研究協議会 編集長◎山本直英

明日を拓く子どもと時代のニーズに添えて〈性〉と性教育をとあし、今日の学校や家庭や社会のあり方、さらに社会・文化を考察します。

No.26〔特集〕性教育の検討課題ー結婚・シングル・離婚

No.25〔特集〕ジェンダーフリー教育のすすめ

不登校・登校拒否・いじめの情報ネットワーク誌

こみゆんと
●A5判 隔月刊
◆定価800円(税込)
◆奇数月1日発売

子どもたち、親たちの手記を取りあげ、本音で語りあえる雑誌。「情報アクトスコーナー」では各地の団体の催しを紹介。「文通コーナー」も好評。

第49号

〔特集〕生きいきしだした中学生

あゆみ出版 ☎03(3815)5511 FAX03(3815)3777



「わいふ」を読む

「わいふ」に書く

あなたの人生が開ける

わいふ

読んで書いて
みんなでつくる

281号

目次

デザイン／宮塚真由美
題 字／石渡希和子
表紙イラスト／眞輪絵衣子

イラスト／荒井知恵 小沢恵子
カステラネンコ 弘法堂建二
小林正子 小牧あい 佐藤瑞江子
Jasmine 田沼千恵 田村幹代
西宮さき 橋本美智子
長谷川てるみ 藤井恵子

4

妻・夫婦・家族の現実を見据えて

◆石川結貴

写真提供・文／石川結貴

特集 思い出の地・再訪

樫ぐねが教えてくれたもの 佐藤信子

行けなかった理由 匿名

マイ・センチメンタル・ジャーニー 田中喜美子

一筆両断 ⑬ 西田淑子

82

ワーキングライフ

石井しのぶ

あなたへスマツシユ

十河温子・新井純子・林 直美・菊池裕子・古田由記子

おすすめの一冊

木村澄子

92

座談会 私も言いたい

方言自慢

辻浦知津代・高梨陽子・後藤 晶

105

ズバリ一言

小栗明子

108

出会いと別れー私の場合⑥

田沢未実

119

おすすめの一冊

佐藤ゆかり

120

コミック これが子供の生きる道 ⑬

栗田 笑

124

子育てフォーラム ●NMSのページ●

宮本康子・グリーンアスバラ・小山佳世子
杉田みほ

鎮魂 へら・ノビア 早乙女光子

家族のスケッチ

大沢陽子・隅田美幸・サト ウタ

おすすめの二冊 和田好子

連載 変わりゆく中国⑥

封建的な家庭と学校 法村香音子

今これに夢中

米田けいこ

エッセイスト・クニコ

匿名・中松ミナ子・寺田真佐

フリートーク

家守恭子・高梨陽子・田中優子・原 昭宏・山田登志恵
太田啓子・三枝きよみ

笑える！

松本とみよ・宮崎貴子

グループホームがいい！

福田幸子

私の意見・あなたの意見
山田仁美・鈴木紀美枝・安村豊子

コミック 毎日が平日 海砂

ブック情報

パソコンワールド

犬伏裕子

私もひとこと

柳本綸子・新井純子・藤池弘子・山内志保
安村豊子・高松恭子・伊藤琴子
田窪孝子・後藤 晶・柳澤幾美・島村君子

スタッフから 147 わいふインフォメーション 148

募集します 149 投稿のきまり 150

編集だより 152

文章講座のおすすめ 13 バックナンバー 24
お友達にわいふを 73 自費出版はわいふへ 104



妻・夫婦・家族の 現実を見据えて

千葉市中央区 石川結貴

写真提供・文／石川結貴

文章を書くことを仕事にする、つまりプロのライターになつてちょうど三年になりました。

今、妻たちが抱える危うさ、夫婦の現実、といったテーマのレポートを週刊誌「SPA!」と月刊誌「ペンチャークラブ」に連載しています。

これだけでも取材や執筆などかなり多忙なのですが、今年はつづきざまに三冊の単行本『ブレイク・ワイフ』（扶桑社）、『誰にも言えない夫の暴力』（本の時遊社）、『ここに、あなたの妻はいる』（毎日新聞社）を出しました。

テレビや新聞社からのインタビューの申し込みもありますし、講演会や女性学級の講師など、スケジュール帳はすぐに埋まってしまいます。

と、仕事のことだけを説明すると、まるでバリバリのキャリアウーマンのようですが、現実の私は妻役、母役、それに主婦役もしていて、自分の中ではそういったプライベートも大切にしています。



今年刊行した三冊の単行本



読者の方から求められ、「照れながら」サインを書く。

(右頁) 新宿のロフト・プラスワンでのトークショー「トークバトル ブレイク・ワイフ」で、「平成の論客」と評される宮台真司氏(都立大学助教授・社会学者 写真左端)と。1998年12月



多摩市女性センター新設記念講演・フォーラム「自分のこと自分で決められますか?」にパネリストとして出席。若い人に人気バツグンのドリアン助川さん(写真左端)、毎日新聞論説委員の重川治樹さん(写真中央)と一緒に。1999年10月

原稿執筆の合間に洗濯物を畳んだり、取材から帰ってくると急いで子どもを歯医者に連れていったり、当然のように目まぐるしい毎日ですが、「生活」「暮らし」「主婦の現実」といったことを忘れたら、私のテーマである「妻」「夫婦」「家族」は書けない、というのが私のポリシーです。

私の書くものには、「涙が止まらなかった」「リアルですばらしい」などといった評価も多数いただく反面、「妻がどうしたこうしたなんてくだらない」といったご批判も寄せられます。「主婦の問題なんから、今の日本は経済がいちばんの問題でしょう」と面と向かって言われたこともあります。

でも私はこの国が抱える、経済や教育、少子高齢化などの問題と比較して、「妻の問題が軽い」などということは、これっぽっちも考えていません。なぜならばそれらの問題は、根底ではすべて家庭、夫婦、妻や母親の問題につながっていると思うからです。

すでに「年半のロングランをつづける『SPA!』の連載『ブレイク・ワイフ』は、社会現象として取り上げられたり、NHKのドラマになったりしました。「すごいね」と言われますが、私自身はまったくすごいとは思っていません。

むしろ「ブレイク・ワイフ」などという苦悩を抱えた妻が一日も早くいなくなり、妻たちがひとりの人間としていきいきできる社会が作れたら、と願っています。



『試行錯誤からはじめよう』（1999年10月発行「Net One」企画・編集）は、10人の女性が仕事、結婚、出産、育児、離婚など様々な自分を語ったもの。



20代、30代の女性の生き方を考えるグループ「Net One」を結成。メンバーと私（写真左端）。1999年9月



子ども達とシンガポールの街で。年に一回くらい家族旅行をしていたけれど、週刊誌の仕事をはじめてからは長期の休みが取れず、海外へは行けなくなった。1996年8月



女性学級や女性問題を考える集会などにはなるべく顔を出している。地道な勉強、情報収集は原稿を書く上で欠かせない。

メールやインターネットではもちろんパソコンを使うが、フリーズすると怖いので、原稿だけはワープロで打っている。メール入稿の時は、テキストファイルにして送信すればOK！



投稿誌 わいふ から
生まれた

ニュー・マザリングシステム (NMS)

ゼロ歳から満3歳までの子どもを持つお母さんを対象とする通信教育です

「生きる力」のある子を育てましょう!!



- ・実践と理論の両方を学べます
- ・子育ての悩みから解放されます
- ・徹底した個人指導で安心できます

お問い合わせ先 NMS研究会 〒162 東京都新宿区市谷加賀町2-5-26
(株)グループわいふ分室内 ☎03-3260-2509 FAX03-3260-9398

教育史料出版会

〒101 千代田区西神田 2-4-6
☎03(5211)7175

ハイスクールレポート

自分にあった学校をえらぶ私立高校ガイド

入学してからでは遅すぎる!
服装・頭髪規定は? 生活指導の中身は?
どんな行事があるのか? 力を入れてい
る教育内容は? 進学への取り組みは?
学校生活がこの一冊で見えてくる!

関東版 わいふ編集部編 4月末刊 ★1,900円+税
関西版 公立校も収録 / 5月末刊 ★1,800円+税

子どもはなぜ
★1,500円+税

渡辺 学校に行くのか

自分にあった
★1,602円+税

早川裕子 高校のえらび方

●生徒・父母・教師が綴る私の北星余市物語

やりなさいか
君らしいままで

北星学園余市高校編
中退生を受け入れる北の学園!
★1,500円+税

特集

思い出の地・再訪



榎ぐねが教えてくれたもの

埼玉県坂戸市 佐藤信子

上信越自動車道ができてからは郷里まで一時間。なのに、いまだに前のめりの生活をしているから、帰省するのは法事のときぐらいである。

まして、その道筋にありながら、私が二歳から女学校の四年、それは敗戦の年（昭和二十年）までだが、住んでいた農村を訪れたことは二、三べんぐらいしかない。

この八月、法事のため帰省の途中、思い立って夫と訪れた。村は合併して町になり、道に迷うほど変わっていた。昔は小高い山の上に小さな小学校が

あり、桜の木が学校を取りまいていた。父がここの教師だったから、校庭に面した一軒家の教員住宅に私たちは住んでいたが、その校舎も山の下に移った。跡地は食品工場になったことまでは知っている。

当然、あの家はない、と思いながら車で坂道をのぼり、すぐに山の上。家はなかった。そのかわりモダンな平家と芝生の庭。その家の西側に、張りつくように立っている不釣り合いなものがあった。

「これ、昔のまま！ 昔の榎ぐねだ

わ！」

私は叫んで榎の木に手を当てた。上州のからっ風を避けるために、どこの家にもあった榎ぐね（何本かの榎を並べ植えて、壁のような形に刈り込んだ防風林）。手を離せば、古色蒼然として、すでに一本は枯れはじめているが、他の四本が支えるようにして並び立つ。七十年の歴史を見つめてきた風格で。

家の廻りのかつての風景を私は夫に説明する。桑畑や生徒の農業実習地があったことなど。向こうの畑で小さな体の老人が何かしていた。もしかしたら知っている人？

小走りで畑にいくと、老人は日除けの帽子をかぶり、足元に集めたミニトマトを袋に入れていた。

私が昔、学校の前に住んでいたと言うと、懐かしそうにすぐ、旧い人だか

ら自分の名は言わず、息子さんらしい戸主の名を名のった。ご主人は役場に勤めていたそうで、亡き両親とも親しくしており、越したあとも母とつき合いがあったらしい。

「わたしも八十八になりました。こうして毎日、気の向くままに働いていま

す」

と、語る顔はしわもなく、背中はずつとのびて腰も曲がっていない。働くつていいな、と思わせるさっぱりした顔。夫は、土手に腰を下ろしている老人を写させてもらう。

私もそばにしゃがむと、昔の家並み



とはがらつと変わっているのに、昔にかえった感じ。思いつくまま消息を尋ねると、すぐに返事がくる。嫁入り先のことまで。でも余分のことは言わないけじめの良さ。あの頃の年中行事も話題に出て、時間を忘れた。

だが話している最中、私は目の前の老人がだれだかわからないのだ。記憶の窓に心覚えの顔をはめたり出したりするのだが、名前を思い出せない忘れ方とは違うのだ。まるで記憶喪失のよう。こんなことである？

老人も「校長先生んちの子供さん達」と、まとめて呼ぶのを聞けば、私たちは土地つ子になりきれなかったのだらうと、少し淋しい気もした。

別れぎわに、写真を送るので本人の名前を聞くと、Sだと答えた。

「えっ！ そのお名前なら、知ってます」

私は興奮した。わが家に一番近い家のお嫁さんなのなもの、知ってる、知っている。

そして、Sさんの花嫁姿は、それは



それは美しく、子供たちはうっとりして眺めていたのだから。絵のように美しかったあの姿は、近所の大人、子供の語り草になり、いまもあの姿が焼きついていて、と話すと、Sさんははさかしそうにほほ笑んだ。

別れたあと、さらに思い出したのは、新婚間もなく役場勤務の夫は出征して戦死。たしかSさんは義弟さんと

再婚させられたという話。

美しかった、そしておだやかなSさんの人生は、平坦ではなかったのかもしれない。

戦争は理由は何であれ、人が人を殺す。しあわせな生活も夢も、こわしてしまふ。

戦争がいちばん激しい頃、私は町の女学校へ通っていた。授業はない。教

室は学校工場になった。都会からの疎開者で生徒はふくれ上がった。私達は工業用ミシンでうなりを上げながら、戦地へ送る天幕を縫う毎日だった。勝つことを信じ、ここから通っていたのだ、と思いながら櫛ぐねの所に戻った……。

櫛ぐねのはしから、ひっそりした庭をのぞくと、すぐ前、小さな池のあったあたりに水道栓が立っていた。陽は高く上り、蟬しぐれが頭に突きささってくるほど、激しい。

そのとき、水道栓の脇に家族と並んで立っている私の姿が一瞬、見えたと思っただ。

そうだった。二十年八月十五日、正午。

この場所に、父母と子供たちは、気を付けの姿勢で並び、天皇のお言葉をラジオで聞いた。終わってもきょとんとしている、

「いいか、日本は負けたんだぞ！」と、しほり出すような声で言った父。

私達の後に櫛ぐねは立っていた。

櫛の木に手を触れて、車に乗る。

あつという間に坂道を下り、県道に出た。目をつぶると回想はつづいた。

あの家で父を思い出すのは、黒い布をかけた電灯の下で、机に向かい筆を動かしていた姿。青年学級の教え子が戦死し、家族に墓碑銘を頼まれることが多かったのだ。

母も昔の教え子が軍服を着て訪ねてきたあと、激しく泣いたことがある。

そして長男の私たちの兄は、沖縄で玉碎したのだ。父が終の住みかと決めていたこの地を離れる決心をしたのは、その年の暮れのこと。心に深い傷みを抱え、新しい赴任先の町へ越した父母の気持ちを想像してみる。

車が実家に近づく、商店街はお盆の売出しで賑わい、盆踊りのちょうちんの飾りつけもされている。世間の不況も生活の不安もどこ吹く風と、まちは「平和」の風景。

法事を終えて私達は埼玉へ帰った。

あれから一カ月。日常の生活は続く。

帰省の折りは、櫛ぐねに導かれる感じでSさんと再会し、感動した。だがあのとき、よく知っているはずなのに、その人が全く思い出せない——あのショック。

かつて本で読んだことがある。

日常生活のあれこれの場面で、しっかり見て意識に止めないまま、過去のものとしてしまった事物は再現が不可能ではないか。過ぎ去ってしまったものは、じつは無かったも同然である、といった言葉に、はっとした。

いま、平和で幸せだろうか。核の恐怖が無いといえるだろうか。しっかりと見て意識に止めないと過去に吞みこまれてしまう。戦中派の私たちが、見たり聞いたりしたことも、過去に吞みこまれ、無かったと同然——にしてはならない。

百歳でなお、平和運動を引っ張っている、榎田ふきさんの言葉を私もつぶやいてみる。沈黙は共犯だ、と。

わいふ文章講座のすすめ

公民館 女性センター、社会教育課などのご依頼で、しばしば「わいふ文章講座」を開いています。

編集長田中、副編集長和田、「わいふ」から果立ったライター達を講師とし、五回から十回までのコースがあります。

その他に、「子育て」「教育」「女性」「高齢者」「社会参加」など、各種の問題について講演をいたします。老人ホーム情報センター主任研究員の水落も担当します。

お住まいの地域で開きたい方は、お電話をください。資料をさし上げます。それを持って公民館、教育委員会の社会教育課などに開講を頼んでみてくだされば、引き受けてくれるところも多いと思います。

●PTA主催の成人教育、家庭教育学級での講師としてもご依頼ください。

行けなかった理由

匿名

卒業以来十八年ぶりに自分の通った大学を訪れたのは、去年の十二月はじめ、小春日和の穏やかな日だった。

結婚してからは東京に来ることもないと思っていたが、夫の転勤で都内に住むようになってもう八年。いつでも母校を訪ねることはできたのに、なぜかずっと行くことがなかった。ホームカミングデーは毎年あるし、友達との話の中では「そのうち行こうね」と何度とも言いつつあった。けれど、なかなか実現しなかった。

しかし、いつまた東京を離れるとも知れない。急に思いついた私は、だれも誘わず、だれにも言わず、その日の朝、家事をすませると電車に乗った。

今ならまだ、あのたくさんの銀杏が、金色に輝いていることだろう。大学の方面へ向かう慣れない路線の電車の中で私は考えていた。本当は、今まで大学に行くのを避けていたことを。

大学は東京の郊外にあり、わざわざ訪れるには確かに遠い。だけどそれだけではなく、私は自分が過ごしたあの時代を直視するのを避けていたように思うのだ。今もつきあう大切な友達とは大学で出会ったのだし、母校は私の誇りでもある。いやな思い出があるわけでもないのに、あの四年間の自分のことは、遠くの霞の中にいるようにぼんやりとしか思い出せないのはなぜだろう。

何回か乗り換えをして、とうとうなつかしい私鉄の小さな駅で降りた。大学へと続く玉川上水に沿った雑木林と土の道は、昔とまったく同じだ。銀杏の太木が何本もあった広い野原は面影がなく、整備された公園になっている。体育館と野球グラウンドの横に、それでも銀杏は残っていて、あたりを明るくいろどっていた。公園の横に舗装された道路ができて、戸建ての家が何列もある。左右をきよろきよろ見ながら歩いて行くと、もう大学の正門に着いた。

正門の外からながめる。バス停も、守衛さんの詰め所も、校舎も、何も変わっていない。卒業のとき記念に買ったキャンパスの絵はがきと同じだ。私が四年間を過ごした場所。

時間帯のせいかな、正門に人の出入りはない。私は守衛さんに見とがめられるのも面倒なので、中に入らずに敷地の外側を歩いた。

図書館と学生寮が見える。入学してから二年間は、キャンパス内にある寮

に住んでいた。当時すでにかなり古くて格調が高かったが、今もそこには幾通りもの大学生の生活があるのだろう。

信じられないほど狭い部屋だった。

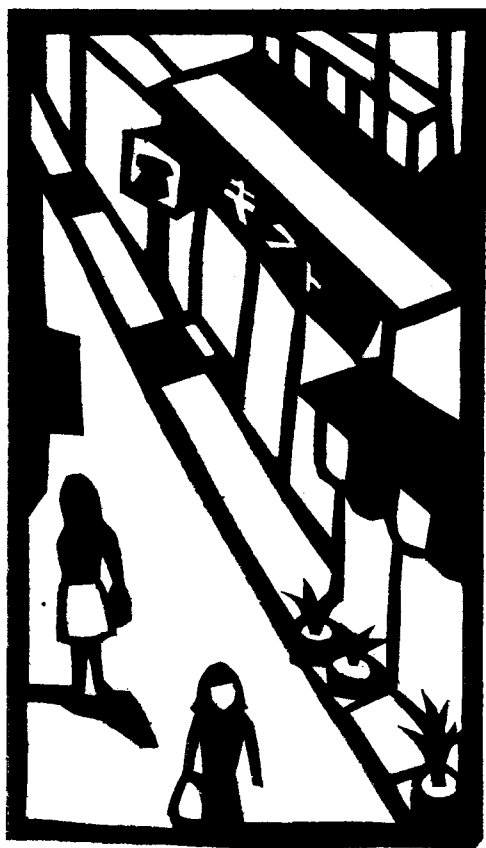
それでもたいして不自由も感じずに暮らしていた私たち。親もとを離れた共同生活での、不満や苦労はもう覚えてなくて、友達との楽しかった交流ばかり思い出す。

そのまま歩いていくと、大学後半の二年間借りていたアパートがあるはずだ。あたりはずいぶんにぎやかに変わっているが、大家さんの家とその二階の私が借りていた部屋はあった。こんなところだったわけ、二年もいたのに外からしみじみ眺めたことはなかったかも。大家さんの表札は変わっていないが、もうとつくに年賀状のやりとりもない。

一回りして、また駅にもどってきた。あのころ初めてできたコンビニ、毎月八の日は二割引きのケーキ屋、駅前マーケットなど、見覚えのあるものばかり。じつさい十八年なんてあっという間だ。それなのに、ここにいたころの自分が、もう何十年も前のことのように思えてならないのはなぜだろう。それが帰ってからはずっと、はつきりとはわからなかった。今回これを書きながらまた考えてみて、やっと気がついたことがある。

私は自ら望んで大学教育を受けた。けれどそのころの私は、職業や生活のことがほとんどわかっていなかった。それで勉強も仕事も中途半端なまま、今はただの主婦（以下かも）。両親には一生職業を続けるようにと言われて育てられたのに、自分でこの道を選んでしまった。

それで家庭が完璧かと言えば、問題は山積み。家にいるのに子供すら満足に育てられていない。私の大学時代は何の意味があったのだろう、なんのた



めに四年間も過ごして、何の役に立つ教育を受けたというのだろうか。

学歴と自分とのギャップ。社会で有意義な活躍をしている同窓生と自分との落差。私が大学に足向けられな

かったのはそのせいなのか。

実は私は高校のときの知り合いが苦手だ。優等生だったはずの私が今は無職の主婦で、私から見れば平凡だった人が、しっかりと社会的に認知されて

自信満々であるように見える。それがだれのせいでもなく、自分の能力不足だと十分すぎるほどわかっているのが苦しい。

大学は昔と同じだった。もっと勉強すればよかったと、あとで気づく馬鹿な私。久々に訪れてみて、見つめたくなかった惨めな今の自分を確認してしまった。だけど、そこでの四年間の学問の経験は二度とできないし、貴重な友人を得られただけでも、私の大学はまったく無駄というわけでもなかったのだろうか。

これでもう、大学近辺に行く機会もないだろうと思っていた。ところが先日、アメリカにいる姉からあのあたりを見てきてと頼まれた。年末に帰国することが決まり、杜宅や学校を調べてほしいというのだ。姉の夫の杜宅が私の大学の近くにあるらしい。おかげで今度こそ友人も誘って、青春の思い出の地をぶらつくことになった。気持ちを切り替えて、また行ってきます。

(え・小林正子)



マイ・センチメンタル・ジャーニー

東京都新宿区 田中喜美子

今年のはじめ、一通の招待状がアメリカから夫のもとに舞い込んだ。夫が昔働いていたパデュー大学（インディアナ州）が、名誉博士号をくれるという。ただし授賞式には絶対に本人がこないければいけないというのだった。「あんたも行かないわけにはいかないよ」と夫はいった。

私たちがアメリカに住んでいたのは一九五九年、実に四十年前のことである。貧乏な私たちは飛行機に乗れず、横浜から貨客船で太平洋を横断し、パナマ運河をまわって（いまこんなことをしたら頭がおかしいと思われる）、ニューヨークまで行ったのだが、出航

のその日は、親兄弟はもうろんのこと、従兄弟・はとこまでが港に送りしてきた。アメリカに行く人は、当時それほどになかったのである。

パデューにはまだ知人もかなり残っている。こんなとき、カップル社会のアメリカに、夫ひとりが出かけるわけにはいかない。

五月十一日、私は夫とともに成田から飛び立った。

私のアメリカ

アメリカは私に、いい思い出ばかりを与えてくれた国である。

何よりも私はそこで、心から愛する

ことのできるアメリカ人にめぐりあった。

家主のヤング老夫妻である。

若い者が老いた人々を愛する幸福を与えられることはめつたにない。

ヤング老夫妻は、私にその幸福を与えてくれた。いまでも彼らのことを思い出すと涙が出そうになる。

慎重で少し心配性なミスター・ヤング。「気がついた？ ダディは運転しているときには絶対に笑わないよ」と彼の娘が私にいったことがある。

私が彼を乗せて運転しているとき、「交差点で車をとめるときは少し車間距離あけたほうがいいよ。追突されたとき前の車にぶつかって二重にダメージを受けるから」と「If you don't mind」と前置きしてから教えてくれたっけ……（ヤングさんはリタイアした自動車修理工である）。

二階のシンクから水もれを引き起こして、階下の天井にシミを作ってしまった、謝りながらしよげかえっている私を「そんなに落ちこみなさんな」と背

中をたたいて励ましてくれたつけ……。

細やかな性質のミスターとちがい、カラカラ笑う豪快なミセス・ヤング。

ほんとに心の暖かい、エネルギーに満ちた人だった。

教会でも一目おかれていて、牧師さんもミセス・ヤングにかかると子ども扱い。ついた翌日、教会に引っ張っていかれたのには少し参ったけれど。

勇気と実行力のある、働きもののミセス・ヤングのよさは、アメリカ人に共通したよさのように思う。

単純ではあるけれど、あの時代のアメリカ人はほんとうにフランクで親切だった。

町を歩いていると、一面識もないよそのおばさんに呼び止められ、

「あなたは学生のワイフじゃない？」

今度うちでパーティーするからいらっしやいよ」ときそわれたこともある。

弱い者に手を差し伸べようとする善意と、行動力と、心の広さ。

それはベトナム戦争以前の「古きよ

きアメリカ」の姿に過ぎないという人もあるけれど、アメリカ人には確実に、ヨーロッパ人とは違う善良さとおらかさがある。

私が滞在していた五九年から六〇年、あの国はおそらく全盛時代だったのだ。当時私たちの住んでいたラファイエットには泥棒も殺人もなく、人々はドアに鍵もかけず、家を開けっ放しのまま二カ月も旅行に出でしまう。

同じ時期にパデューに来ていた日本の学者が「ほんとうに天国のような国ですわね」としみじみ語っていた言葉も素直に頷けるのであった。

しかし夫は「アメリカはもう、あんたの思っているような国じゃないよ」という。テレビや新聞もアメリカの荒廃を伝えている。アメリカはほんとうに、どんな国になっているのだろうか。

空港で

飛行機はシカゴまで直行し、そこでパデュー大学のあるラファイエットゆき

の小型機に乗りかえる。その間十時間も待たねばならない。

その待ち時間に私はたちまち、昔とは違うアメリカに出会った。

まず驚いたのは、何ひとつ目新しいものがない、ということであった。

シカゴ空港の壁には「北米人気投票第一位の空港」というパネルがかけられている。

この空港が「第一位」？

規模は大きいけれど何だか雑で薄汚れている。乗り継ぎのための無人操縦の電車が走っているが、これも日本の「ゆりかもめ」みたいで感激がない。

空港の駐車場には数百台の車が並び、星条旗をはじめさまざまな旗が高いポールに翻っている。これまたどうという景色ではない。

しかし四十年前、こんな光景を見る度に私たちは感激していたのだ。ホテルに泊まってトイレのドアをあけると換気装置が動きただけで驚いていた私だった。

あのころ日本の街は暗く、道幅はせ



パデュー大学の卒業式が行なわれる大ホールの前に集まった人々。

まく、道路はでこぼこして、自家用車はまだほとんどなかった。高速道路さえ、一本もありはしなかった。

いま、アメリカにあるものはほとんどすべて日本にもある。しかも何を見ても、日本のほうがきれいで進んでいるように見える。

四十年はやはり、それほど長い歲月だった。そしてその間に、アメリカが変わったというより、私たち日本人の目が変わってしまったのだ。

しかしやっぱり、アメリカサイドで変わったものもある。

それはアメリカ人だ。

シカゴの空港で目についたのは、太っている人がやたら多いということである。四十年前のアメリカには、日本にはまだいなかった「肥満児」がいて私を驚かせたけれど、あのころはたしかに、これほど多くの大人がこれほど太ってはいなかった。

もちろんロシアでもドイツでも中年になると人々は太ってしまう。

しかしアメリカには中年ぶとりの域

を越えて、異常なほど巨大に太った人がある。白人にも黒人にもいる。男にも女にも、いる。

彼らの食欲を満たすためか、空港の食堂にはすさまじいポリウームの食べ物売っている。コカコーラやオレングジュースの紙コップは日本の紙コップの三倍は入りそうだし、サンドイッチやマフィンやパイやケーキも、私の目には馬の食ベそうなポリウーム、しかも汚らしくまずそうで買う気が起らない。四十年前に売っていた食物もこんなに大きかったろうか……。

もうひとつ目についたのは、働いている人がつまらなそうだということだ。アメリカ人はどんな仕事にもきびきび働いていたと思うのに、空港で荷物を運ぶ若者も、空港会社のカウンター前にラグを敷きのべるおじさんも、つまらなそうにタラタラ動いている。一度だけ、すごい速足で荷物のカートを押していく若いボーターを見かけたが、それっきり。

老いも若きも、中産階級も庶民階級

も、石けんのにおいのするような清潔さできびきび働いていたと見えたかつてのアメリカ人は、どこに行ってしまったのか……。ものを買うときにも、素朴で親切な売り手は一人もいなかった。

みなりの粗末な人が多いのも目につく。どこにでも売っている大量生産のジーンズやTシャツ、日本の庶民ももちろん似たような服装はしているのだが、とことん安物という感じで、シツクな人もオシャレな人も目につかない。日本人のほうがよほどみなりに凝っているという感じである。

どこか投げやりでつまらなさそうなアメリカ人。何が彼らを変えてしまったのか。

消えた「ヤングさんち」

うんざりするほどの待ち時間の後、ほんとにこれで飛べるの？という感じのプロペラ機で一時間、とうとうラフイエットについた。

空港にはインド人のラムダス教授



シカゴで30人乗りの小型機に乗り換え、ラフイエットに。



ヤングさんちはアパートになっていた。

と、ペルー人のロドリゲス教授が迎えに来てくれていた。おなかが出っぱってしまった以外は、一人とも全然変わってない！

大学のホテルにつくと私は真つ先に、自分たちの住んでいた「ヤングさんち」を見に行った。

六七年にこの国を再訪したとき、ヤングさん夫妻はまだ健在だった。私が「ハニー、キミコですよ」と家に飛びこんだとき、ミスター・ヤングがぶるぶるふるえて抱きしめてくれた感触は、まだ私の体に残っている。私はこれまで、誰からもあんなふうに抱きしめられたことはない。

その彼らが二人とも世を去って、夫が七五年に一人でラファイエットを訪れたとき「ヤングさんち」へ行ってみたら、長女のフィリスが住んでいて、剣もほろろの応対をされたという。

フィリスはまだあの家に住んでいるだろうか……。

「ヤングさんち」のあるピアースストリートは私たちの宿舎からほんの五

分。道の両側のメープルの樹は昔ながらに亭々と生い茂っているが、ところどころ切り倒されたり、枝を大きく切られているのが目につく。

道路幅はもちろん変わらないが、舗装はがれて穴ぼこになっていたり、雑草が顔を出したりしていてなんだか荒れた感じである。

「ヤングさんち」はなくなっていた。白塗の木造の家のあったところには、この辺ではあまり見かけないうす茶色の木目の二階家が立っていた。通路が真ん中にあって、家全体が左右に分かれ、アパート風のつくりである。

裏にまわってみる。裏の壁に日本のとほとんど同じかたちの電気メーターが六個並んでいて、完全にアパートであることがわかった。

フィリスは死んでしまったのか、どこかに行ってしまったのか、それともこの中のひとつに住んでいるのか。アメリカの家は表札に名を出してはいないから、知るよしもない……。

黒人はどこに

ところでこの街で驚いたのは、シカゴで終みかけた黒人の姿がほとんどないということだった。

四十年前と、その点ではほとんど変わっていない。

夫の学位授与の行われた大学の卒業式でも、黒人の卒業生は一人しか出てこなかった。

逆に東洋人学生はかなり多い。中国人、韓国人、そして日本の名を持つ卒業生も二人いた。

マンモス大学のパデュー（学生数二万人）では、四回にわけて卒業式を行うという。卒業生は関係者のために一人四枚まで入場券がもらえるのだが、それにプレミアムがつくというほど、卒業式の人気は高い。

壇上にはグリークラブ（男性）のメンバーが居並び、合唱でもりあげながら、総長の祝辞のあと、卒業生ひとりひとりが名を呼ばれると舞台の袖から

早速で登場し、学部長と握手して証書もらう。観客席の親戚一同？は自分の息子が出てくると拍手したり声援を送ったりするから、これは賑やかなお祭りなのである。

お祭りには体力がいる。夫など、壇上に三時間以上座っているだけでヒーヒーなのだが、数百人の卒業生ひとりひとりに証書を渡す学部長たちはたいへんな肉体労働だ。

しかしアメリカの大学生は、なんと生き生きと希望に満ちてみえることか。四十年前もいまも、学生が元気でいるという点でこの国は変わっていないように思われる。日本では逆に、働いている若者より、学生の無気力さが目立つというのに……。

シカゴの空港で見かけたような異常に太った人々が、この街では目につかないのも不思議だった。

深いところで、この国は二極分解しているのに違いない。ちょうどどれほど都会の人々が変わっても、東京から三十キロも離れると、びっくりするよ

うな古い日本が残っているように……。旅人には、所詮わかり得ないことである。

再会

しかしラファイエットにはまだ、私たちが会いたい人々が残っていた。夫の恩師であるプロフェッサー・ファン夫妻である。

プロフェッサー・ファンは、パデュー大学の物理学部のシンボルともいえるべき超有名な物理学者であった。

おそろしく怖い先生だった。大学の学生など、彼の前に出ると震えがとまらないとまでいわれていて、彼の名を慕ってパデューにきたのはよいが、こんな怖い先生とは知らなんだ、と夫もほぞを噛むことがあったらしい。

ともかくあいまいさと論理矛盾を絶対に許さない人なのだ。

例えばファン教授に「日本人はなぜあんなに、夜遅くまで働くのか」と聞かれるとしよう。「貧しいからだ」な



大学の卒業式、国旗などはどこにもない。あるのは大学の旗とシンボルマーク。

なんて答えようものなら大変だ（うれしそうにこう答える日本人は当時たくさんいた——私もその一人であったが）。ではもし貧しくなかったら日本人は働かないのか、もっと豊かになったら働かなくなると思うか、と質問は延々と続く。こっちはだんだんしどろもどろになってくる。おまけに答えのなかにちよつとでも矛盾があろうものなら大変だ。パイプを噛みながら目をギラギラさせて、とことん追及してくる。適当にやめておくことを絶対にしないところ、まるで絵に描いたような「意地悪いさん」なのだ。

しかし夫も私も、不思議なことにこの人が好きだった。

彼の妻のマンヤがまた、すばらしい人だった。笑うと子どものように無邪気な顔になる。有名な教授の妻なのに、まったくえらぶらず、いつも親切な人だった。

聡明で善良なこの人は、教授の怖さをカバーして、みなに心から好かれていた。かつての中国にいたら大家族を

とりしきるよき太々（大奥様）になっていたに違いない。

悲しいことに私たちのラファイエット訪問の前年、ファン教授は脑梗塞で倒れていた。危機は脱したが、家では看とりきれないので、老人ホームに入っているという。「ラファイエットを去って子どもの一人のいる土地へ行きたい。でもあなたたちが来るまでは、ここにいろつもりだ」とマンヤからのたよりにあった。

そして実際、マンヤは私たちの到着後、中華料理屋での昼食に招いてくれた。その日はファン教授もホームから出てきてパーティーに加わるという。

しかしその日が近づいてくるにしたがい、私はだんだん不安になってきた。教授は果たして私たちのことをわかるのだろうか。彼はどんな人になっているだろうか……。

そしてとうとう、その日がやってきた。

「ファン先生、またお会いできてうれ

しいです！」

椅子にすわったまま手を差し出したファン教授の目の光は、昔ながらの鋭さに見えた。でもかすかに微笑んだだけで、言葉は一言も発しない。

マンヤを見て、私は胸をつかれた。

あの明るかった人が、なんと悲しそうな顔になっていることか……。

二カ月ほど前、家のなかでころんで、くるぶしをねんざしたという。サポーターをつけて歩けばもうなんでもないが、夫の面倒を見るのは難しくなったという。ここにも日本と同じ老介護の問題があるのだ。

食事の間中、ファン教授は一言も発しなかった。ときどき皆の話に頷いたりもしているが、わかっているのかどうか……。

「キミコ、あなたはいくつになったの」となりにすわったマンヤは私を正面から見て、小さな声で聞いた。四十年の付き合いのなかで、年齢を聞かれたのは初めてだ。

「六十九！ あなたは？」

「七十五。ショージ（夫のこと）はいくつなの？」

「七十二よ」

私はファン教授の年齢を聞く気持ちにはなれなかった。どうにもならないことである。

座っているときはわからなかったが、食事が終わって人々に支えられて立ち上がったファン教授の体は折れ曲がって、以前の半分ぐらいにちぢんでいた。マンヤと他の人々が、長い時間をかけて教授を車に乗せた。

もう彼に会うときはないであろう。

さようなら、さようなら、ファン教授……。

なつかしい人々がいなくなったとき、私は二度とアメリカに行きたいとは思わないだろう。あの国の自然も文化も、もはや私をひきつけない。

しかしそれでも、アメリカが私に与えてくれたものは限りなく大きい。私という人間の一部分は確実に、あの国に残っている。

★わいふバックナンバー

259号 夫の過労死は他人ごとか？

260号 トラブル旅行記

261号 嫌われる姑・好かれる姑

263号 わが家の親子ゲンカ

264号 ふるさとの伝統行事

265号 私の初体験

269号 再就職で得た仕事・得られなかった仕事

272号 カウンセリング体験

273号 子どもとテレビ

274号 引越騒動

275号 料理と私

277号 不妊治療・私の場合

278号 ☆おけいここととの格闘

279号 あなたの夫は何番目の男？

280号 老化現象との闘い

自分にあった読書とびの決定版 私立高校ガイド
ハイスクールレポート（関東版）

年度版

一九〇〇円＋税

シリーズ最後の暮らし

お年寄りが安全に暮らすために

一五〇〇円

変わる主婦 変わらない主婦

一五〇〇円

お申し込みは ☎〇三―三二六〇―四七七―

「要介護認定」スタート ⑬

一筆両断



鎮魂ヘラ・ノビア

東京都中野区 早乙女光子

Kが死んでしまった！ 朝刊で彼の訃を知った。死んだのは八月十日、もう二週間以上も前の事ではないか。近親者だけで葬儀を済ませたとある。

お互いが還暦を迎えた頃から、私は「その時」が来るのを案じていた。私自身が体調をくずして体力の衰えを知った時、思い出したのはKの事である。これから先、Kが病むとしたら誰がいるのだろうか。

相手が男であれ女であれ身近に頼める誰かがいるのなら、それでいい。けれどもたった独りで病むのであったら……それを想像するのはつらかった。

その頃彼の著書の新聞広告を見た。

『オペラ・アリアの名曲名演奏』。私はすぐに手紙を書いた。

「あなたはいつかこれを書くと思ってたわ」と。そして彼の健康状態を尋ねた。

「これからはもし誰かの手助けが必要になった時、他に誰もいなかった時は何時でも電話をください。すぐに私がヘルパーさんになりますから。若かった頃のあなたへの感謝を込めて……但し、私が健康で生きてたらね」と。

折り返しその著書と共に、

「僕のこと気遣ってくれてありがとう」と返事があった。そして健康状態の数値を示し、「あの頃、重たい



音響機器なんかをかついで宣伝に歩き回ったから、筋肉がついて今はすこぶる健康」だと言っていたのが三年前である。

たかが六十三歳で急性肺炎で死ぬなんて、健康管理に拔かりがあつた証拠じゃないの。喪失感と共に裏切られた気がした。

毎年の年賀状にはこの一年健康に過ごした等と報告し、徹夜で原稿を仕上げては一人旅に出る、旅先で死ねたら最高だねとか、年ごとに能天気にも自堕落になつて生きてるよとか、冗談とも本音とも取れるギクリとした事を書いていたのは、係累も家族も持たない気軽さとの背中合わせに、深い孤独と虚しさを背負いこんでいたからではないのか。

Kを知ったのは昭和二十五年、中学三年の時である。私は疎開児童であり、彼は地元の老舗の一人息子だという事であつた。

他の男子生徒に比べてひどく変わつていて目についた。授業中やたら手をあげるのだが、その仕種が女っぽいのだ。Kが答えるたびに男子生徒がどつと笑う。

しかしKは博識だつた。Kの生い立ちは父親が若死にし叔父夫婦が店を継いだ。昭和十年代、封建制度の強い地方都市の事、居場所を失つた母親は、本来の跡取りである幼いKを、婚家に残して他所に嫁ぐしかな

かったのであろう。

それでも祖母やまだ嫁入り前の若い叔母たちに十分可愛がられて育ったKだが、祖母が逝き叔母たちが嫁いでは、叔父の家族の中で孤立感を深めていったのだ。

教室では結構賑やかなKだったが、一人で蔵の中に住み食事以外では家族と親しもうとしなかったらしい。しかし弁当も持って来られない家庭の子に比べれば、洋楽のレコードに小遣いを費やせる彼はかなり恵まれている子だと、私の目には映った。

Kと行き来をするようになったのは、彼が東京の予備校に入るので上京すると言ってきた時からだった。

私たち一家はすでに東京に戻ってきていた。

「ねえ、なにかおみやげ持ってってあげるからさ、何がいい?」

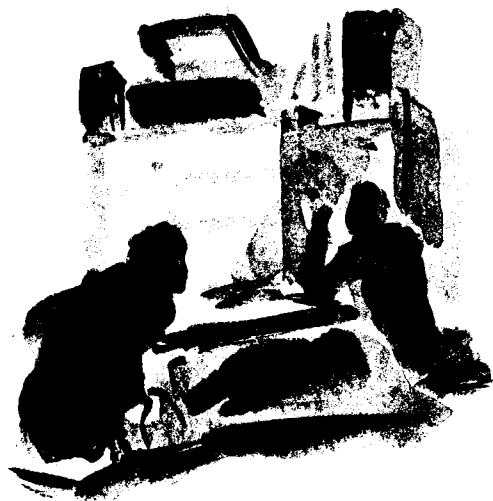
突然の電話でそう言われたって何も思い浮かばない。すると、

「僕の高校で使ってた教科書なんてのはどう?」

家庭の事情で、高校に進学せず銀行に就職した私は、もう未来が閉ざされたかのような暗い気持ちの日々であった。

「でも、私にわかるかなあ……」

自信のない返事をする、



「何言ってるんだよ。日本語で書いてあるんだよ。理解できない訳ないだろう。とにかく持つて行くから」
こうしてKとの付き合いは始まった。

その時もらったKの教科書はあちこちに赤ペンで書き込みがしてあって、中にはインクの色鮮やかなものまであった。多分、私に分かりやすくするためにKがわざわざペンを入れたのに違いなかった。

Kは慣れない東京での浪人生活に参りかけていたことがある。

mi.

「寂しくて寂しくてたまらないよ。会いにきてよ」

たった二行の電文みたいな手紙がきて下宿が変わる度、私は訪ねていった。

一年後、私は或る美術学校の夜間部に通うようになっていた。Kのプレゼントの教科書が私の自信をやや回復させてくれたのである。

その学院で私は良き師と仲間に恵まれ、昼間の銀行勤めとは打って変わっていきいきしてくる自分に出会った。



しかし、此処の授業料はかなり高く、家に食費を入れ、画材費と来年の授業料の為に、積み立て預金をする手元には殆ど残らない。銀行での友達付き合いに費やす小遣いはゼロで、衣服は手作り、化粧品も買えない生活だった。支店長からは、

「お願いだから今度の賞与でパーマをかけて口紅をつけてくれないかね。窓口に座っているのにそれじゃあ格好がつかんのだよ」と、注意をされたほどだ。

Kもまた或る大学の教育学部に入り、それぞれの学校で自分の居場所ができて、年賀状が行き交う程度の付き合いになっていった。

Kと再び付き合うようになったのは彼が社会人になった春である。Kはレコード会社の洋楽部のディレクターになっていた。

「とっても惚れ込んだ曲があるんだよ、聞きにおいでよ」

レコード会社にも私の家にも近いそのアパートは四畳半ひと間、畳一枚分のキッチンがついてトイレは共同、それが叔父から独立したKの天下晴れての城なのだった。

「これから発売するんだけど、いまに流行るよ、声がいいんだよ」

それはトニー・ダララの「ラ・ノビア」だった。私

たちはちやぶ台代わりのコタツの台に頬を乗せて、その曲にしつとりと聞き入った。美声ではない、けれども魅力ある声だった。どういう歌詞で何を歌っているのか、その時の私にはまったく分からなかったが、旋律や歌い回しからいってやるせなく物悲しい感じだけは伝わってきた。

中学の頃からオペラや歌曲の、今風に言えばオタクだったKは、イタリアのポピュラーソングに目をつけて、それをカンツォーネという呼称で日本に流行らせることに夢中になっていた。

「これから流行らせるんだから聞いてみてよ」

と、クラウディオ・ビルラやミルバの曲を何曲も聞かされたのもこの四畳半だった。

しかし相手が普通の男ならこの小さな部屋で、男の用意した料理を食べ何時間かを何事もなく過ごすことはなかっただろう。

オペラや映画に行っても普通の男がするように、帰りに食事をし、

「こんな僕でも送らないよりは安全だよ」

と自分の華奢な体を自嘲するような言い訳をしひと通りのナイト役はしてくるのである。

結婚を心配する周囲のすすめで見合いは何度もしたけれど、学歴もなく貧しく平凡な娘に来る縁談の相手はやはりさえないで、話の面白さでKをしのぐ男性は

いなかった。

会話がピンポン玉のように行き来するのは楽しかったし、Kの知識量には圧倒されて素直に聞けるのだった。

中学時代、銀行に就職が決まった頃から私は仲良しだった女友達とは付き合わなくなった。高校の制服姿に出会うのも嫌だった。

そんな時、毎朝宇都宮駅の日光線で通学するKが、ホームから「クルミ！ いま行くんか！」と声をかけた。その頃はホームに沿った抜け道があつて、私の通る通勤時間と合っていたからなのだけれど、不思議にKには「おはよう！」と素直になれたのだ。

日本に初めてイタリアオペラがやって来た時のことだ。今度のボリーナスを全部はたいてすべての出し物を見ると熱に浮かされたようなKだった。

「女は家庭に入っちゃったらかなかイタリアオペラなんか見るチャンスが無いから、ミッコちゃんも見ておいたほうがいいよ」

と勧める。クルミと自分のつけた仇名で呼び捨てにしていたのが、社会人になった頃からKは私をそう呼ぶように変わっていた。

しかしこのイタリアオペラが私をKから引き離す

きつかけとなった。新築されたばかりの東京文化会館で、「アンドレア・シェニエ」。日本初演のオペラだった。マリオ・デル・モナコとレナータ・テバルディの注目のキャストだった。

Kの席は同じ社の連中と一緒に、真ん中の前の方に揃っていて、私は離れていた。何かはぐらかされた気がした。

もはや私にはオペラを堪能するゆとりはなかった。私とはただの同級生だよと宣告しておこうとしたの

か。或いは仕事がらみで見るKには傍らに私がいては邪魔だったのか。

私とて美術展は気楽に見るものではなくなっていたから、その気持ちは分からないでもなかったけれど、やはり場違いだったかという気後れを感じた。

休憩時間になると、もともと几帳面なKは私をロビーに誘い、たった今見た舞台の感想や説明をしてくれる。でももう私の心は晴れない。惨めさだけが渦を巻いている。Kの頭の中には生きた女は存在しなく



て、歌い手たちしか住んでいないのだ。

いつものように食事をして帰ろうというのに、もう遅いからこのまま帰りたいわ、と我が儘を言つて家の前まで送つてくれたKと別れてしまった。

自分の部屋に入つた時、はつと気が付いた。Kにはアパートに戻つても食べるものがない筈であつた。空き腹のままKは一夜をどうしたのだろうか。私の方こそ自己中心的だつたのだと……。

それから程なくKは引越して行つた。あそこは会社に近すぎて風邪を引いてもおちおち休めないから、と言ひ訳しながら、「今度のアパートは窓の下を西武線が走つていて、飛び込み自殺には持つてこいなんだよ。ミツコちゃんも死になつたらいつでもおいだよ」と彼流の挨拶の電話があつた。

これは私たちの一つの区切りなのだと悟つた。私たちはもう二十六歳になつていた。

秋の展覧会がやつてきて学院時代の師から招待状が届いた。日曜日会場に行つてから事務所に寄るようにと添え書きがあつた。当時の上野公園の都美術館は、建て替える前のコロネード様式の建物である。事務所といつても会場の隅に衝立で囲つただけだつた。

学院時代、私に目をかけてくれた先生は、

「女が絵を描いて生きて行くのは容易なことじゃない

よ。お嫁に行つて花とか静物とかを描いたらどうかね」と、私の年齢を気にしての縁談の勧めだつた。吹き抜けになつた明るい彫刻展示室で、私の写真をパチパチ撮りながら身上調査の質問である。

私は慌てた。

私には人に誇れる何物もない。私は絵が描きたいからあの学校に入つたけれど、先生が考えるような「お嬢さん」じゃない。住む世界が違ふのだ。私は正直に自分の事を書き送つて丁寧に辞退した。

いつもそうなのだ。何かのチャンスがやつてきても劣等感が先にたつて其処から逃げ出す癖がついていた。

今の夫との結婚を決めようかと迷つていた時、もう行くまいと決めていた筈の杉並のアパートを、住所を頼りに探しに行つたのは残暑の厳しい日曜日のことである。昼少し前ならまだKがいるかも知れないと思つた。

畑の中の小さな駅に降り立つて、踏切を渡り雑草の生い茂る乾いた農道を、白いパラソルをさして歩いて行くと、人通りのない一本道をKがこちらに向かつて歩いてくるではないか。初めて私の家に重たい教科書の束をぶらさげて来たときのように。

「あれ、どうしたの？」

「あら、出掛けるんだつたの？」



Kの新しいアパートを見ることもなく、私はこれまで道をKと引き返し同じ電車で新宿に向かった。

ガラ空きの電車の中で並んで座りながら私はまっすぐ前を向いたまま言った。

「私、結婚しようかと思うの」

「良かったじゃない。やっぱそれがいいよ」

Kは体を折り曲げて下から私をのぞき込むようにして軽く言う。

「Kさんはしないの？」

「僕みたいな人間がこの世にもう一人出現しちゃったら悲惨じゃない」

そんなふうに自分を見つめていたのか。

最近でこそそういうタイプの人間が生きやすくなったけれど、あの頃は肩身狭く男社会を生きていたのだ。けれどその個性ゆえに彼のその感性が育ったのだろうにと思う。

子供もセックスも伴わない共同生活があったといいじゃないと思ったけれど、伴走者となるにはもはや私では力不足と判っていた。私にだってプライドがある。重荷になるのは耐え難かった。

私もKもそれぞれの持つ性に未発達なところがあって、それでバランスがとれていたのかも知れない。

Kと最後の食事をしたのは私の結婚式の数日前のこと

とである。銀座の三笠会館に予約席が取ってあった。それは彼からの祝いのつもりだったのだろう。

考えてみれば私は、Kに何を与えることができたのだろうか。Kの使った書き込みでびっしり埋められた教科書以来、私はいつも何かを与えてもらってきたのだった。クラシック音楽もただ聞くだけの私に、様々な知識を吹き込んだのも彼である。

Kの浪人時代、寂しくて寂しくてたまらない、といってきた時会いに行った。でもそれは私もそうだったから出掛けて行つたのだ。

Kは何を私に求めたのか。子供が学校での出来事をよく母親に喋るように、Kは楽しそうによく喋った。彼の興味の世界はますます広く深くなって、私はそれらを貪欲に、時には上の空でニコニコと聞いていたものだ。

もしかして私はKの母親代わりだったのか？

Kの努力がようやく実り始めて、テレビやFM放送でカンツォーネが流れるようになったのは、私の結婚生活が始まった頃である。

Kの部屋で初めて「ラ・ノビア」を聞いてから四年が経っていた。日本の歌手の歌う訳詩を聞いて私ははじめてその皮肉な内容を知った。FM放送のDJでKの声が流れてきたり、サンレモ音楽祭に参加する岸洋

子との対談番組がテレビに写り、夫にはただの同級生だからと言って一緒に見たが、それがKを見た最後になった。

二十年余の時間が流れ五十歳になった頃Kから会社を辞めたという手紙をもらった。「やることはやったからもういいでしょう」とあった。

カンツォーネも一時ブームを呼んで、日本にそれを広めたという功績でイタリア政府から何かの章を贈られたそうだが、日本では一部に愛好者はいるけれど、一つの時代は終わったのだった。

フリーの身になって音楽を主とした評論に傾き、人間関係の煩わしさから解放されて気楽になったという一方で、「この原稿を仕上げなければめしの食い上げだ」と保証のない生活を書いてきた。

本当に今でも独り暮らしなのか、という密かな疑問に答えるように、Kの方から、「僕なんか同じ部屋に誰かがずっと一緒だったら気が変になっちゃうだろう」ともいった。年を増すごとに人嫌いも増していたのか。

新聞でその訃報を見た日から十日が過ぎた。郷里の叔父の元に帰ったKの遺骨に私は焼香に行った。Kには原稿の整理などに毎週通って来る女性がいたとい

う。

七月下旬旅先で体調が悪くなり、途中で切り上げて帰宅した。呼吸困難になつてゐるKを見て女性は救急車を呼んだが、彼は乗車を拒否したという。次に女性が訪れたのは二日後、既に意識は混濁状態だった。

意識のある二日間を、Kは独りぼっちで耐えていたのだ。

「医者に早くかかればよいものを……。小さいころに長く入院してたものだからすっかり医者嫌いな子になつてしまつて……」

叔母の言葉に、あ！と思つた。

私たちは物心ついた頃に同じ状況にいたわけだ。

私の幼い日の記憶も病院のベッドから始まつてゐる。退院してからの私は毎日見舞いに来てくれた父にしか心を開かない子供になつてゐた。それでも実の母親だからいつの間にか心はほどけた筈だけれど、独りを好む傾向や嗜好は結局この頃に出来上がつてゐたのだ。

深い孤独を知つてゐるKの嗅覚が、私を嗅ぎわけていたのか。

医者も保証する健康状態と書いてきたのは嘘だったのだ。そしてこれはKの選り取った自死なのではないか、放置すれば死ぬかもしれない、それを分かつていて医者に行かなかつたのではないか。そんな気がして

きた。

「やることはやつたからもういいでしょう」

と書いてきたように、もういい、と自ら迎えた死だ。旅先で死ねたらいい、そう書いてきたではないか。理解するしかない。Kの人生はKのものなのだから。

独り暮らしが増えてくるこれからはこういう死に方も増えるだろう。

Kのオペラ・アリアのレコードに関する文章はどれもマニアックで、昔の口調そのままに皮肉や毒舌もちらばめられている。

（私は浮気性だから）と本の中で言つてゐるが結局若い頃と好みは変わらず、タリアビーニを押しているから思わずクスリと笑いたくなる。

Kを知つてゐる男たちは必ずと言つていいほど「でも彼つてコレでしょ」と手のひらを顔の前に立てて見せたものだ。

男らしさとか女々しさとは一体何の尺度で言うのだろうか。仕種が女性的なのは幼児期の環境にもよるのだろうが、Kの仕事ぶりや生き方はやはり男そのものだったと思う。

寂寥感は繭のように日増しに私を包んでくる。河合秀朋からの手紙は、もう永遠に來ないのだ。

（え・佐藤端江子）

家族の スケッチ

私の点数

東京都武蔵村山市 大沢陽子

「君に点数をつけてみたんだ」。行く先のない犬のことやら、デパートでのパネル展のことやらで忙しく過ごしていた日、突然夫（元教員）が言った。

「主婦としては三十点、妻七十点、母親九十五点、性格百二十点」と。

主婦が落第点。片づけるののろいし、料理は手を抜く。だから当然。三十点というのもあやしくて、夕飯のおかずが汚えなかったりすると「二十点にしちゃうぞー」と夫は言い、「これじゃすぐ零点になっちゃう」と私は笑う。だけど零点にはならない。おいしい味噌と梅干しを一年分、毎年欠かさず作っているから。

「いい母親だと思うよ。怒らないし、規制しないし」と夫は言う。たしかに、勉強しなさいとは言わなかった。物ごとに一生懸命取り組む娘で、とりわけよく本を読んだ。料理が上手で、

お弁当の必要な高校生の時は自分で作って持っていくてくれた。世界のいろいろな料理も作ってくれた。いてくれるだけで嬉しいのに、そのうえおいしい料理を作ってくれるのだから、祖父父母も私たち親も、それは喜んでごちそうになった。それで、娘は自信を持ち、意欲的になったのかもしれない。どこの国へもどんどん出かけて行った。片コトの英語と、絵や数字を書くことで話は通じるそうだ。もしも、私が親として高得点をもらえたとしたら、この娘が幸せに生涯を終えた時だと思う。今は未知数。

性格、百二十点というのは、いつも、のんびりにこにこしているからか、と一瞬ほくほくしたけど。これはちょっと点が甘すぎる。

夫は、三十年勤めた教員の仕事をやめてから、毎日家にいる。するとますます主婦としての私の姿がはつきりしてくるわけで、よほどひいき目に見えないと、一生の不作と自分の不運を嘆かなければならなくなる。だから、

主婦としては三十点だけど、ま、いいか、性格まあまあだから、なんて自分を慰めているんだ、きつと。

もしかしたら、ますます良くなることを願って、良い点をくれたのかも知れない。平均点以下の部分についてはもう少し身を入れて欲しいのだろう。

これからは、もっと食べることを大切にしたい。そろそろ身辺の整理もしたい。捨てられなくて、つぎつぎ取り込んでしまったから、少しずつ捨

てて、すっきりしたい。捨てられない物はバザーに出せばいいのだ。頑張ろう。

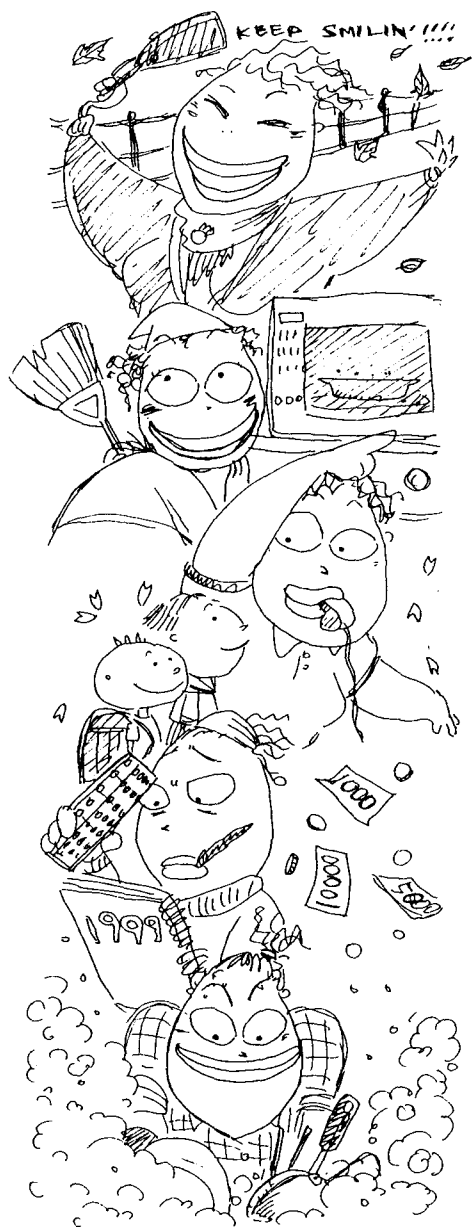
蟬しぐれ

横浜市旭区 隅田美幸(40歳)

夕方になると子供がシクシク泣く。小学三年生の息子である。私の目の前で、ホロホロ涙を流して。それが一週間以上も続いたので、私も泣きたく

なった。

夏休み、子供三人を連れて長崎に帰省した。昨年、義母が亡くなり新盆をすませ、あつという間に最終日。飛行機が夜の便だったので長崎原爆資料館で四時間ほど展示品や写真、ビデオや本を見てすごした。何度か「怖い」と言う彼の言葉に、あまり耳を傾けなかった。こんなチャンスはめったにないのだから、しっかり見せなければ……という思いばかりが先立っていた。



横浜の自宅に戻ってすぐのこと。

「戦争のこと考えると眠れない」

夜中に、私のところへ来て二、三回頭痛や腹痛を訴えた。しばらくすれば忘れるだろう、と軽い気持ちでいた。

ところが、忘れるどころか今度は、泣き出したのである。久しぶりにサッカーの練習が二日続いたので、ちよつとした夏バテか、練習中に何かあったかくらいに最初は考えた。

が、一日だけでなく次の日も、夕方泣くのだからどうもおかしい。食欲もずつとない。

「又、戦争のこと考えてるの？」

「何も考えてない」

首をきつぱり横に振るが、目には涙が。本当は考えているのに、それを認めたくないかのよう。

「頭、痛くない？ おなかは？」

「痛くないけど、ここが変な感じ」

と胃のあたりをさする。心配になつて熱を計ると三十七度少々。盲腸だと困るな。

「大丈夫？」

こちらの不安が彼に伝わったせいか、泣きながら呼吸が荒くなった。

「なんか手がしびれてきた」

どこが悪いのだろうか？ あまりハアハア言うので、あわてて時計を見た。もう五時半を回っている。診療時間外かもしれないが一番近い小児科に問い合わせる。「すぐいらして下さい」という言葉に感謝し、病院へ急ぐ。

「あまり興奮すると過呼吸になって、体の二酸化炭素が減り、手がしびれます。何かあったんですか？」

「実は先週、長崎の原爆資料館で、怖いものをたくさん見たんです」

「よほどショックだったんですね。盲腸の心配はまずありません。熱は夏風邪でしょう」

当然のことだが、小児科では心の病まで治療してくれない。なぜか夕方五時ごろになると、ぐずぐず始まる。ぐずぐずで終わらず、オイオイ泣くしまつ。

「飛行機が飛んでくると怖い」

空から爆弾が落ち、巨大なきのこ雲がモクモクたちのぼる光景を、何度もビデオで見た。タイミング悪く、その日は厚木基地の米軍機が、ゴーゴ音をたてて、何機も頭上を飛んだ。なんだか私まで、気味が悪い。

「死ぬのが嫌だ」

丸こげになった子供の遺体。どこの誰だかわからない死体がゴロゴロしている焼野。自分もいつ死ぬかわからない恐怖が、彼の身と心を襲う。

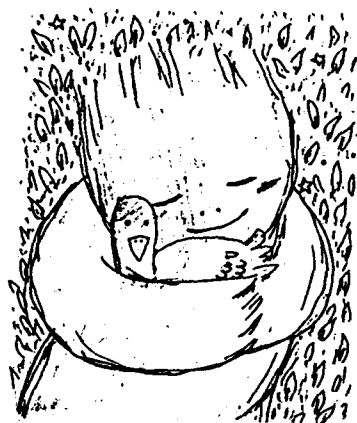
「長崎ばあちゃんは、どこへ行ったの？」

昨年、ガンで亡くなった義母は、爆者だった。

うるさいほど蟬がジージー鳴いている。蟬は地上に出てたつた一、二週間で死んでしまうと聞いたことがある。

だからこんなに、これでもかこれでもかというように、ジージー鳴いている、いや泣いているのかもしれない。

「蟬の命は二週間。人間の命は長い方だよ。今から死ぬこと考えて泣いたって、しょうがないじゃない」



などと言ってみても、人間だっていつ死ぬかわからない。

「忘れたいのに忘れられない」

また涙が頬を伝う。

「忘れたいかもしれないけれど、忘れちゃいけないことなんだ。トモクンだって、今は覚えているけど、そのうち忘れちゃうよ、きっと。だから時々思い出して、みんなで二度と戦争が起きないようにしないと……」

今の彼には少し酷かもしれないが、私の思いを伝えたかった。

「どうして戦争なんかするの？」

「人の痛みがわからない人達が、戦争

をするんだ。みんながトモクンみたいに、やさしい心の持主だったら、戦争なんか起きないのにね……」

声が震え、頬がヒクヒクしたのを子供は気づいただろうか。

外では相変わらず、すさまじいほどの蟬しぐれ。

わが家のオキテ

サト ウタ(43歳)

事のおこりは、食器洗いを交替で担当していた長男が就職及び夜遊びの為にパスする事が多くなり、もう一人の担当者である二男から不満の声が上がったことである。

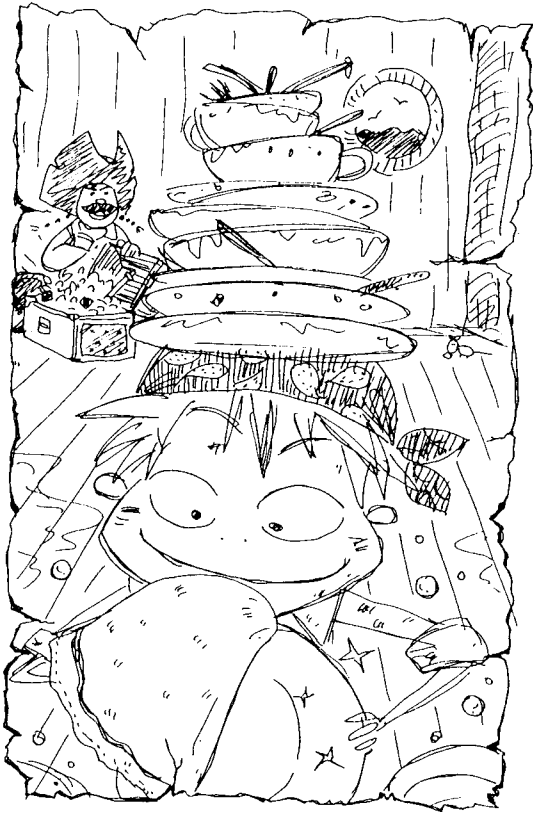
わが家は六人家族。夕食後は、自分のゆとりの時間にあてている主婦の私は、食器洗いは子供達にやってもらうことにしていた。自分の洗濯ものを洗うことも含めて、お小遣いはその分多めにするということで、長男中一、二男が小五のあたりから実行してきた。完璧にできるはずはないので、私がか

きる時には洗っていたし、子供ができてそんな時に、長男と二男に交替で「お茶わん洗い、お願いね」と、声をかけていた訳である。主人との意見が合ったので、二人の高校受験の時にも、変わらずやってもらっていた。

ところが、初めに書いたように、長男が物理的にやる回数が減ってきて、二男からクレームが出た。そして、二男ばかりにやらせるのもかわいそうと、ある朝、山のような食器、フライパン、なべ類を洗っていたら、たつぷり三十分もかかってしまった。わが家には、あと三人の家族がいるのだが、まだ、山のような洗い物を頼める状態ではない。そこで、ひらめいたのは、三男が気に入って見ているテレビ番組「これができたら百万円」というのに、家族が三十日間連続でひとつの事をできたら百万円というのがあり、「あれだ、あれでいこう!」と思っていた。

主人は、もともと自分の事は自分でやってくれる人だし、三男も末娘も、

自分の食器ぐらいいは洗える年齢になった。そこで、二つあった二段式の食器カゴを撤去し、流しの所に「使った食器は洗ってふいて、元場所へ戻して下さい。ヨロシク!」と書いたカードを貼り、さらに「三十日間、連続でできたら、全員に金一封」という紙もつけ足して貼りつけた。



家族の反応は、長男と二男は「これで山のような食器洗いから解放される」。主人は、「いいんじゃない? みんな守れよ!」。三男と末娘は「お金がもらえるならやつてもいいよ」というところ。

さて、三十日間の途中経過としては、その間、長男が独立して家を出る

という大きなできごとがあった。一人暮らしを始めた彼は、ご飯だけは炊いているそうで、「一日三合は食べてるよ」と、職場の定休日には、元氣な顔を見せてくれる。そして、家で食事をした時は、当然の様に自分で使った食器を洗っていく。心配していた三男と末娘も、「金一封」につられ、なんとか達成することができた。

三十日間達成した夜、約束通りに、皆に「金一封」が配られた。主人だけは、もっと多額を期待していたらしく「エッ、これだけ?」とがっかりしていたが、他の三人は満足そうだった。

今は、「三十日連続で……」の方の紙ははずしたが、「洗ってふいて元の場所へ戻して……」の紙は貼ったままにしてある。茶わんカゴの方も撤去したままにして、茶わんふき用のふきをたっぷりと用意してある。

そろそろ三男にも自分の物の洗濯をさせねば、と、自立へ向けての「わが家のオキテ」は、まだまだ続く。

草を編む

谷川栄子の野山を編む



谷川 栄子著
農文協
定価2700円

東京都八王子市 和田好子

昔、日本人は自然と共存するリサイクル社会を作っていた。幕末や明治の初めに来朝した外国人たちは、あらゆるものを生活に利用し、それを徹底して使い切り、自然に還元する日本という国の清潔さ、美しさに驚いている。彼らの一人は江戸という百万人の都市を「庭園をモザイクした緑の都」と呼んだほどだ。当時ロンドンのテムズ河は汚物に

濁り、空はスモッグに曇っていたのである。

現在ひとくくりに「雑草」と呼ばれている植物も、昔はさまざまに利用されていた。スゲ笠、という言葉は知っている人も多いだろう。時代物の小説や歌舞伎によく出てくる。あれはカヤツリグサ科のスゲという草で作られているのだ。

著者の谷川栄子さんは「カゴ・かご・籠研究所」を主宰し、自然環境問題の講師を勤め、さまざまな植物を使った工芸を普及させようとしている。

本書では身近な「草」を用い、円座（編みざぶとん）、プレゼント・ボックス、巾着袋、さまざまな形のかご、多様な花かごなどの作り方を詳しく解説している。

谷川 栄子 著

ヨシ、ジュズダマ、スゲ、ホタルイ、サンカクイ、ガマ、ゼンマイ、マコモ、チガヤ、カヤツリグサ、カゼクサ、などなど、ふつうは雑草として刈られ捨てられる草々を集めて乾燥させ、「素敵なインテリア」に作り上げるまでが、写真と図を多用して指導され、誰でも試みられると思う。

こうした野草の採集のしかた、乾燥の方法も、自然に慣れない都会人むきに、服装や道具まで教えてくれる。稲ワラやトウモロコシなど、田畑の作物も材料になる。昔の女性はこのように草を編み、樹木の皮を剥いて繊維を取って織った。当時は必要に迫られた営みだったが、今は「もったもせいたくでおしゃれな」楽しみだと著者は言っている。

封建的な家庭と学校

山梨県南都留郡 法村香音子

◇法村香音子略歴

一九三五年、旧満州新京市で生まれる。旧安東市兜在満国民学校四年のときに終戦。敗戦後も父の仕事の関係で一家は中国に留め置かれ、国内戦争開始と同時に八路軍とともに各地を転戦。朝鮮戦争を目のあたりにして思春期を送り、中国人民大学を終えて一九五八年七月に帰国。一九六四年十一月より一九六六年三月まで、東京大学原子核研究所に勤務。定年退官直後の五月より、中国遼寧省の「日本語専」に赴任。同年十二月末に帰国。中国での体験が「八路軍とともに」という題で一九八六年二月より「わいふ」に連載された。これをまとめて「小さな長征（副題 子供が見た中国の内戦）」として八九年九月に社会思想社から出版されている。

責任意識の欠如した「教育者」

九月二十四日の火曜日。その日は朝から停電であった。そのまま夜になり、電気がなけりやテレビも観られないから、宇夫人はとうのむかしに奥の部屋で寝入っているらしかった。ところが、十時を過ぎてても男子の寝室が静まる様子がないのである。

徐主任が自宅にいるときは、時間になると見回りに

降りてきていた。そして、喚いたり激しくドアを蹴ったり叩いたりの、彼のひとり騒ぎが建物中に響き渡る。大声で怒鳴ったり戸が壊れそうなほど蹴りまくったりすることが、*「強制教育」*の基本のように思っているフシが彼にはあったし、それはひとつには自分があることを母親にアッピールする目的もあるようだった。

男子の寝室が下に移って以来の、不満のはけ口になっているとも思えるほどの彼のこうした乱暴ぶりが、わ



大連も建設ラッシュ。ビルの谷間をマナ板売りが行く。

たしは不愉快でならなかったのだ。ところがこの夜に限って、徐主任も丁先生までがいつまでたっても隣りの部屋から出てくる気配がなく、十時半を過ぎても騒ぎはいつこうに収まらないのである。

そのうちに、(これはひょっとしたら、徐主任は留守なんじゃないのか。丁先生も暗闇に乗じて雲隠れしているのかもしれない。生徒たちがそれを知ってて騒いでいるんじゃないか)と気がついたのだ。

懐中電灯で足元を照らしながら、三階の黄香の住まいに上がって行くと、パジャマ姿で暗がりから出てきた黄香、口を尖らせておおむくれだ。

「友達から電話がきて、四時ごろ出て行った」

「停電だというのに、いったいどこで遊んでいるんだろうねえ」

そう言いながら、わたしは彼女の寝室の窓辺に近づいた。すると右のほうの東港の街の夜空を、ネオンが赤く染めていた。彼は明るいうちに学校を出たため、ここだけがまだ停電しているということに気づかず、遊び惚けているらしい。

「彼が帰ってきたら、あんたたち親子は、生徒の安全や学校の管理をどう考えているのかって、わたしが猛烈に腹を立てているって伝えてちょうだい。明日から徐とはいっさい口をきかないし、もう食事を一緒にしないから、って！」

黄香はわたしについて降りて来て、男子の寝室に顔を突っ込むと、

「早く寝なさい。法村先生が怒っているよ」

そう言っただけで静かになった。

そうではなくて、あれだけ忠告したにもかかわらず、ウィークデーのしかもこんなときに彼が学校を抜け出したことを、わたしは問題にしているのだ。それを、まるで「こわいおばさんに叱られるよ」みたいな言い方をされて心外だったが、物事の見方捕らえ方の異なる人に、説明したり理解してもらおうと努力したりする気には、いまだならなかった。

王さんの努力の甲斐があつてやつと電灯がともり、その日最後のNHK短波がなんとか聞けることになった。受信状態の悪いそれを聞きながら作文に目を通していたら、ますます腹が立つてきた。

（生徒たちはなんのために、こんな惨めな思いをさせられなければならないの！）

中国時間は日本時間より一時間遅い。放送も終わりに近くなつたとき、玄関の重いガラス戸が軋んだ。

翌朝案の定、主任の遠慮気味な声がドアの外でした。

「先生……、食事です」

いつもなら授業ぎりぎりに食堂に駆け込んで来て、立ったままで万頭をぱくつき、もう一方の手で親指を掛けた茶碗のお粥をすすり込むほど寝坊な人である。

一時間目の予鈴が鳴つたので、わたしは黙ってドアを開け、彼を押しのけて出て行つた。

そして、お手伝いさんが朝もつてきてくれた万頭を昼に食べ、夕食は学生食堂に行つて、ホウロウのマグカップを抱えて生徒たちに交じつて立つたまま食べた。生徒たちは大喜びでわたしの回りに集まつて来た。わたしも思いがけなく望みが叶つたわけだった。

恐れをなして声をかけることもできない徐主任が、青い顔でこつちを窺いながら校庭をうろうろしているのがガラス越しに見えた。

翌日もわたしは朝食を抜き、昼どきは郵便局に出掛けて親子とは顔を合わせなかった。

そして夕方。また学生食堂に入つて行こうとしたとき、黄香がやつてきてわたしの腕に腕をからめて甘え声で、

「せんせい……、徐は昨日からご飯を一度も食べないよ」

「人間二日や三日ご飯を食べなくなつて死にやしないわよ。好きなようにさせればいいじゃないの」

近づいてこれない徐主任を視野に入れて、わたしはじゃけんに彼女の手を払いのけ、厨房の窓口でお菜をもらうために生徒の列の後についた。するとそこへ宇夫人がツカツカと入ってきた。そして大女の彼女に二の腕を掴まされると、外へ引きずり出されてしまつ

た。事の次第を彼女がどう報告したのか知らないが、無理にでもわたしに食事をさせろと山東の校長が命じたという。

悲愴な顔つきの徐主任が、及び腰で寄って来た。

「……先生」

「なにが、せんせい、よ！ わたしはもうあなたがなにをやっても、人のすることだと思ってほっておくから、あなたもわたしにかまわないでちょうだい。あなたとは、金輪際口もききたくないわ！ 学生のことを考えなけりや、こんな学校いますぐにでも辞めてしまいたいわよ！」

「せんせい、怒らないでわたしの話も聞いてくださ

い」

「言い訳なら結構よ！ 言い訳以外になにを話すことがあるの！」

手を取ろうとする黄香を振り切って、宇夫人をも一瞥もせずに、わたしは足早に自室に向かった。

主任が後を追ってきて、ドアの外で「せんせい……、せんせい……」と呼び続けた。

事情を父親に知られては困る彼は、このままでは立ち退かないつもりらしかった。これ以上やると宇夫人を怒らせかねないし、校長が乗り出してきては厄介だ。それに、さつき校庭の彼を見て生徒たちは気味良さそうに笑っていたから、主任としての彼のメンツも



カーテン生地の手作り和服。春の祭典に生徒たちに「さくら さくら」を踊らせようと準備中。

考えてやらねばならなかった。

わたしは勢いよくドアを開けて、彼を睨みつけた。

「なんなの、帰ってよ！ あんたとはこれまでさんざん話してきたから、話すことなんかもう何もないわよ」
彼に対して腹を立てていることが、ほかにもまだあった。

営口にある日本企業が人を採る計画があるという情報が入ったので、責任者で工場長である藤田氏に直接電話して交渉したのは、ついせんだったのことであった。

良い感触を得たことを宇夫人に話すと、さすがに彼女はわたしと一緒に営口へ「工作（お願い）」に行くと言ってくれた。それなのに未来の校長であるこの男は、まったく関心すら示さなかったのだ。学校は卒業生の将来を考えてやる義務があるのに、その努力を怠っているから、このあいだ卒業して行った子どもたちだって、まだ誰一人として就職できていないではないか。今後の見通しもまるで立っていないから、苛立った女子生徒が、裕福な同級生にカッターナイフで切り付けるという「事件」が起きたりするのだ（ちなみに、このうちこの合併企業で新卒者七人が試験を受けたが、結局この年はうちから採用されたのは二人だけであった）。

「——たしかに、昨夜は遊びにいきました。先生が

怒っていらつしやる理由もよく分かっています。だけどわたしの話を聞いてください」

「もうたくさん。どうせまた、親父に頭を押さえ付けられているあいだは我慢するしかないんだ、こうして憂さ晴らしするしかないんだって言うんでしょ。学生のことよりヤクザな友達との付き合いのほうが大事だっていうんだから、それならそれでいいじゃないの！」

ドアを閉めようとしたら、彼は急いでドアに指をかけて力を込めた。

実を言えば、この学校の人たちのうちでわたしの心が最も接近しているのは、わたしに心酔している黄香と、目鼻が小さくてずんぐりむっくりで見栄えはしないが、ひとに馬鹿にされるぐらいにお人よしのこの人だけであった。

両親の彼に対する扱いを可哀想で気の毒に思い、気が強くて我儘な黄香との夫婦関係にも同情していた。それでいて、わたしは彼の気弱さや遊ぶことしか念頭にないだらしないさが、なんとも歯痒くてならなかったのである。

誠意をもって事にあたれば通じないわけがないと信じこんでいるわたしは、「遊んでる場合ではないですよ」とまた言うために、彼を弁務室に請じ入れた。

「生かすも殺すも俺次第」

わたしはここにきてすぐに、校長は名譽欲の權化、副校長の宇夫人はただの金勘定屋、そしてこの兩人の長男はただの遊び人と見抜いたように、この学校が、家父長の絶対性が確立し、断固とした専制君主制の独裁政治が敷かれた、一片の民主主義のかけらもない小社会だと知るのに、さほどの時間はかからなかった。

徐主任は確かに、日本語の授業以外には何もせず、管理能力がまったくない、遊びぐせだけが身についてしまったどうしようもない男であった。しかし、もう四十過ぎた成人男子である。それを校長は、数人の客人やわたしが食卓を囲んでいるときでも平気で罵倒した。母親はその間相変わらず無表情で、ただ俯いて黙々と箸を運んでいるだけである。ヘタに口出しすると、矛先が自分に向くことが分かっているからだ。

黄香たち若いものと同じように、肩を入れ墨で濃くして髪を黒々と染めた彼女は、金に糸目をつけず買いまくり、わたしが靴を買ったと知ったらさっそく自分も丹東へ出掛けるような女性であった。わたしが彼女と市場へ行つたいつぞやは、どこへ行つても、奥さんと、奥さんとあちこちのカウンターから愛想笑いが投げかけられ、「今日は何を買いに来られましたか」「う

ちへも、ちょっと寄ってくださいな」などと媚びを売る声が飛んできた。

大柄な大奥様は衆目のなかを、本当にその真ん真ん中を、臆することなく堂々と歩いた。

それ以来わたしは彼女のことを、うちのイメルダ夫人と呼ぶことにした。

ところが、夫が遼寧省に戻っているあいだは、我がイメルダ夫人はまるで人が変わったようにどこへも出掛けず、毎日同じ洋服を着て慎ましくしているのである。彼がいるときは、あきらかに萎縮しているのだ。

ある日のこと、イワシの丸干しを頭から食べることを質素だと勘違いする政治家と同じで、好物の生姜を丸かじりしていた校長が、またもや夫人に文句を言った。

「いま着ているセーターは、いつ買ったのか。わたしがここへ戻ってくるたびに、お前は服が変わっているようだが、年寄りがおしゃればかりに金を使うな」

すると夫人は、わたしとお揃いの赤い手編みのセーターの襟に顎を埋めてぶつぶつひとり言を言った。

「——だったら、どうして月に五千元もくれるのよ」

わたしはびっくりして、思わず黄香の顔を見た。ほとんど一日を拘束されている先生たちの実に十倍だ。

宇夫人は校長を恐れて怯えており、彼女の唯一の憂さ晴らしは買い物だと黄香は言う。

その窮屈な気持ちはわたしにも分からないではなかったが、毎日ただひたすら食券を数え、「そんなに良い野菜を使うな」と厨房にいちいちチェックを入れ、万頭の「目方を減らせ」などとせこく指示したり、寝室で生徒を怒鳴りまくったり、何かといえば罰金を課したりすることが学校管理だと思っているような女性に、わたしは同情する気にはなれないのだった。父親がいるあいだは極力遊びに出ないで、テレビで我慢している徐主任とて同じことだ。

「小さいときから親父に罵られ殴られながらただ働かされて、まったく遊んだこともなかった。我々がなにを言ってもあの父には通じないから、いまは我慢するしかないのだ」と彼は言う。しかし誰の目にも、それは遊ぶ責任を無理解な親父や気の強い妻のせいに行っているとしか写らないのだ。

ヘビースモーカーの徐主任は、吸い殻をいつでも窓から投げ捨てられるような体勢で、教員室の一番奥の窓際に陣取っていた。

ついこのあいだのことだというのが、いつものように前触れなしで山東省から校長がやってきて、間の悪いことに主任がタバコを吸っているところへ突然入ってきた。吸い殻を慌てて窓の外に飛ばしたが後の祭り。紫煙が漂い、臭いがこもっていたためにバレてしまい、みなの方で見ている前でメチャメチャに殴りつけられ

たという。

末娘の男問題が持ち上がったときも、殺すの死ぬのと学校中が大騒ぎになったそうだと。

これまで幾度となくこうした校長の暴力沙汰があったが、どんなときも誰も彼に逆らわず、顔を腫らして殴るにまかせるだけだったという。

しかしわたしに言わせれば、それらの事件はいわば家族の問題である。だがこの家族が、生徒に対する思いやりや優しさのかけらもなくして横暴な運営を行っているのは、こんなに進んだ社会になってもまだこのように、親に対する絶対服従を美德とする儒教思想がはばをきかせて、肉親の愛情や信頼さえもどこかへうつちやられていくからなのだ。

わたしがここにきてからも、幾人もの生徒がいつしか顔を見せなくなつた。どうしたのかとまわりに訊ねると、「被開除（ベイカイツウ）退学させられた」という。自主退学でないかぎり、学校側は「不退費（ブトエイフィ）精算しない」と校則に明記しており、「出て行け」と口頭で言い渡されると、持ち物をまとめて即刻立ち去らねばならない。

それはお手伝いさんであろうが先生であろうが、同じであつた。小呉の後任のお手伝いは、「いまクビを言い渡された。今晚一晩寝たら明日朝五時に出て行かねばならない」と、涙を溜めてきよならを言いなき



沿道の墓石屋。改革・開放は迷信復活を促し、カンコン
ソウサイも年を追って派手になってゆく。

た。そんなことがあまりにも多いのである。

のちにわたしがこの学校を去る少し前、山東の学校では韓国語の教師が、数人まとめて辞めさせられたと聞いた。でもそれは、校長と衝突してまとまって辞めたというのが真相らしい。

新学期を目前にした八月二十九日木曜日、夏休みが終わって日本から戻ってきたばかりのことだった。

黄香が半泣きになって、わたしの部屋へ駆け込んできた。

三年に進級する予定の、彼女のクラスの吳満昌、席峰、姜永世、林春喜、韓宇の男ばかりの五人の生徒が、飲酒喫煙がばれて「開除」を言い渡されたという。

生徒といっても彼らはもう十八、九。夏休みも終わりに近づき、いよいよ三年生だというわけで、ついつい羽目を外したらしい。

「いま徐主任が校長に『助命嘆願』しているが、校長はまったく耳もかさない。先生の言うことだったら聞いてくれるから、ぜひお願いして」

せんだつては一年の女子が退学させられそうになったが（いまはまったく覚えがないほどの些細な理由だ）、わたしが頼んで処分を取り消してもらったことがあったからだ。

今回も例によって職員会議も開かれず、学生証に明

記されているような、何回規則を犯したらという警告も経ることなく、校長の独断による突然の断固「開除」である。

処分の理由を校長に聞くと、「いくら注意してもタバコの吸い殻が校内に落ちている。こんどは現場を見つけたから処分を決めた。これは在校生への見せしめであり、新入生を受け入れる前に悪い影響を排除するものだ」の一点張りである。

「校則を犯したことはたしかに良くない。けれどあと一年で卒業なのに、ここで退学させられては、この若者たちの将来に後のちまでも影響しかねない。今後については、わたしたちが厳重に監督するから、今回に限って許してやってくれないか」

徐主任とわたしで代わる代わる説得に努めたが、校長は頑としてそれに耳を傾けようとはしなかった。処分の対象となった生徒のうちの四人は、少々の抵抗をみせたがすぐに学校から去って行った。

けれど、日本語が好きで将来の目標を通訳と定めていた呉満昌だけは、宿舍を追いつてられても近くに宿を取って校長室に日参し、学校から離れずに懇願を続けた。

貧しい身なりの母親も大連からやってきて、「このまま退学させられたのでは、今までの苦勞が水の泡だ」と情にすがったが、校長はまったくとりあわず、

親子を無視し続けた。

「校則にも、留校觀察中に改悛の情著しい者は、とあるのに、校長はどうして許してやらないのか。経済的に非常に困難な母子家庭なのに」と黄香は嘆いた。

彼ら親子は半月以上もねばっていたが、資金が尽きたのかついに諦めたか、やがてふたりのうろつく姿を見なくなった。

そして、呉親子は手ぶらでくるしかなかったからだ、という噂が立った。けれどわたしは、校長はそんな人ではないと信じていた。

彼も夫人も、賄賂という悪習を口を極めて非難していたからだ。

九月六日には新一年生を迎え、新学期が始まつてすぐに生徒会が開かれた。会長副会長など主だった役員は管理者サイドのひそかな指名があつたというが、ともかく生活規律、衛生、文芸、体育など各役員も選出され委員長の決意表明もされて、その活動が始まつた。

わたしはビデオを持ってきたので、この機会に報道班を作つたり「大字報（壁新聞）」にも手をつけようと考えていた。そこでその考えを黄香に話すと、

——数年前に一時期、この学校にも山東省の学校のような、高卒者のクラスができたことがあつた。けれ

ど、なんでも黙って受け入れる未熟な中学卒の生徒と違つて、学校のやり方に不満を抱いたこのクラスが、授業をボイコットするという騒ぎが起きた。そうした

ら校長はその日のうちに、一部の生徒を山東省の学校に追いやり、その他全員を学校から追い出して、このクラスを取り潰してしまつた。それ以来今日まで、山東のような上級クラスは作られず、生徒会の活動もできなかつた。それがなぜいまになつて急に生徒会活動を再開させたのか、わたしには分からない。だけど先生、ここでは言いたいことはあまり言わない方がいいよ。校長は何でもやる恐ろしい人間だから――。

九五年に定められた校則の禁止の項に、酒タバコ、ダンス、髪染めなどと並んで、大小壁新聞、授業のボイコットそしてデモなどが列挙してあるのは、そういう理由だつたのだ。

追ひ出された学生たちは、その後どうなつたのかと訊ねてみたが、今回追ひ出された学生同様、彼らのその後は誰も知らないという。

わたしはそんな校長をみていて、なんだか毛沢東の足跡を踏襲しているように思えてならなかつた。

事実、校長は愛国者であり教育熱心な人である。そしていまだに、質素を旨とした生活を続け、先生生徒はもちろん家人にもそれを強く求めている。だが、事業が拡大するにつれて、人の言葉に一切耳を貸さず、

反対する者は切り捨てるといふ独裁者となつてきたのだ。

どうみても、後年の毛さんと二重写してはいないか。

二つの学校のどの教室のどの黒板の上にも、「愛国、自信、勤勉、礼儀」という四つの文字が大きく掲げられている。

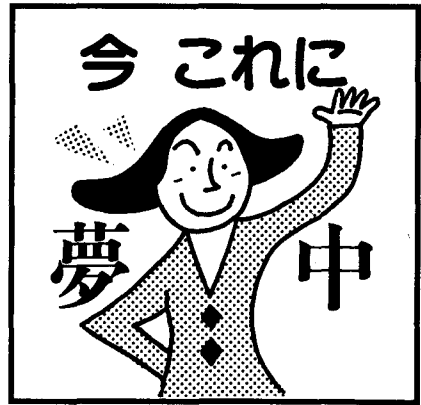
しかし問題は、このスローガンの裏に隠された現実にあるのだ。それを可能にしているのはほかならぬ「改革・開放政策」なのである。

中国人は、個人経営の会社や団体などの組織の主だつた役員を、眷属で占めるというのが慣例だ。日本人のわたしからみればそれも問題だと思ふが、それよりもわたしが言いたいのは、こんなにいつも簡単に学校が始められ、ろくな教師がいなくても学校として認められて経営が成り立つこと。

そして、何をやっても社会性を問われることなく、あたかも治外法権におかれたように教育施設が存在できるというそのことだ。

生徒の進歩を阻害し、苦しみだけを押し付けている責任のすべては、表面しか見ずに決まり文句を鵠呑みにして、こんな横暴経営を許しているこの国のありかたそのものにあるのではなからうか――。

(続く)



点字を学んで

静岡県静岡市 米田けいこ(47歳)

私は六年前点字の講習会に参加し、終了後に点訳グループに入りました。今までに点訳したものは、童話・実用書・小説など。これらは盲人の方からリクエストされたものもありますが、ほとんどは私が好きな本を点訳しました。でも本当は盲人の方が必要とされ

るものが一番良いのはわかっています。ただ私の力量が足らなくて、リクエストに答えられないのです。

何が必要ですかと尋ねると、電気製品の使用説明書と言われました。確かにそうですね。私自身もビデオやラジカセの説明書は必要なのですが、しかしそれを読みこなせないのです。結局は操作出来なくて人まかせにしている有様です。自分が理解出来ないうえに、図も多いあの説明書は非常に点訳しづらいものです。小説などは文字を一字一句、点字に置き換えればよいので、根気よくやれば（これは結構大変な作業ですが……）なんとか訳していけるのですが、図や説明文は、どのように点字で表現すれば解りやすいかは、点訳者の判断に任されるので力量を問われるのです。いつかは希望に添えるようになりたいと思っています。

数年前、盲学校の生徒が大学受験をするにあたって、数名の点訳者がプロジェクトを組み、数学担当や理科担当などと分担してその教科の教科書や参



考書を点訳し、彼の願いをサポートしたという話は感動しました。

また、全盲のピアニストとバイオリニストのお母様が、楽譜をずっと点訳されていたという話にも頭が下がります。

目の見える私達にはたやすく手に入る情報も、見えない人にとっては得ら

れないものが圧倒的に多いと思います。

私が今思っていることは、生協の棚に点字の品名を付けさせてもらいたいということなんです。そうすれば知人の盲人の方（主婦）も喜ばれるでしょう。

最近では公共の建物の所々に点字で表記してあったり、ビール缶や薬の外箱

などにも付いています。それが役に立つ人は少ないと思いますが、必要としている人の存在を意識しているという企業の姿勢を、私は歓迎します。たとえそれがイメージアップの戦略だとしても。長年点字に接していて、点字に美しさを感じます。これからも続けていきたいと思っています。（え・西宮さき）



紙一重の差

匿名

わが家の玄関は昔の田舎家の土間を改造したもので、広さは六畳一間程で天井はなく、吹き抜けになっている。上がりはなほ旧家を取り壊した時に譲り受けた、床の間の檼の一枚板で、黒光りしている尺二角の大黒柱と調和している。

この玄関に面した八畳と三畳間に年代ものの千本格子が四枚と二枚、計六枚建てである。四枚の方は姉の婚家先で蔵造りの店を取り壊し新築する時、夫が貰い受けたものである。この近江屋酒店の柱には「むしろ旗を押し立ててぶち壊しという秩父事件の一揆の時の傷跡」が残っていた。

一枚の格子戸に四枚の小障子が入っているが、上から三枚目の下は横長のガラスが入っている。この小障子を夏の間は外して簾戸のようにして、風通しをよくするのである。今迄は毎年それが出来ていたのに、昨

年、私は体調を崩し、その上例年にない大雨が続いた為、障子が膨張したのか外れない。嫁を呼んで手伝って貰ったが手に負えない。

「お天気が続いて乾燥したら外しましょう」と言う嫁の言葉にそれもそうだと思い留まっているうちに、時期を逸してとうとう秋になってしまった。

今年は早めにと一人で外し、四枚一組を新聞紙で包み間違いないように、墨で表書きをしてしまった。

九月も終わり頃まだ暑かったが、そろそろ入れる支度をしようと思った。今年は張り替えるつもりでいたが、寄る年波には勝てず、しみのついた何枚かだけ張り替えることにした。霧を吹き、湿らした障子紙を巻き取った後、綺麗に拭き取り廊下の小卓の上に載せ二日程置いた。

廊下に日差しが柔らかい日、何枚か張り終え、さて格子戸に小障子をはめ込むのである。まず座敷から見、手前の格子戸の方の記号と小障子一枚一枚に記入



してある記号を読み、順に入れる。手前はすんなりと入った。向こう側の格子戸は外さなければならぬ。これが結構重いので、滑らないように足元に気をつけながら外し、順調に行った。こうして四枚は我ながら「うまく入った」と悦に入った。

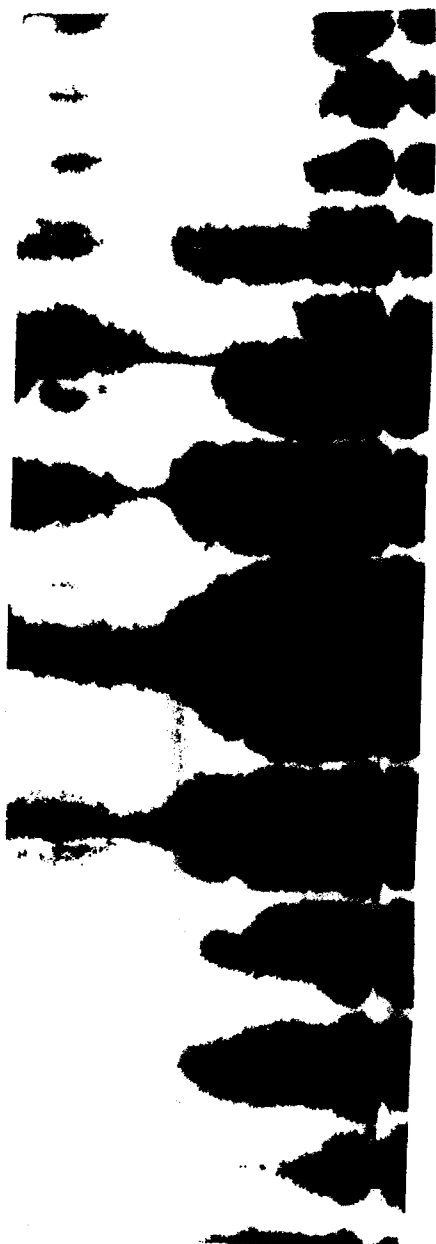
内玄関に面した二枚は、姑の弟で建具職の組子細工まで出来る人が作ったものだが、それがどうしたことか、確かに間違はなく記号が合っているのに、もう少しの所で入らない。しかたなく夫には叱られると思ひながら、小さい金槌を持って来てトントン叩いてみる。普通ならこの位で入る筈なのにどうしても入らない。余りトントンやっているので見かねて夫がいざって

出て来た。

「なにやっているんだ、そんなことしなくても入るだろう」

「間違っていないのにどうしても入らないの、そんなに怒らないでよ、一生懸命やってるんだから。貴方は怒るだけで何もやってくれないんだから」

とうとう本音が出てしまった。夫は脊髓小脳変性症という病気があり、悪気はなくても急に大声が出てしまうのだが、長年連れ添っていても、私は怒鳴られた、叱られたと思つてしゅんとしてしまう。腰が立たないので歩けないが、つかまって立ち、支えていなければ何か出来るのである。



「どれ、どいてみな、やって見るから」

すると、今迄どうにも動かなかったのがすつと入り、カチツと納まった。「餅は餅やだ」。(夫は元材木商)「ありがとう、ああよかった」とほっとした。結局小障子に紙を張る時、内輪に張らなくてはいけないのに、どういう訳かこの一枚、棧に入る部分まで障子紙が張ってあったのだ。「紙一重の差という諺がある」と夫は言った。なるほど、この紙一枚の厚さで素人の私には入れることが出来なかつたのだ。随分緻密に溝が掘ってあるのだと、改めて昔の職人の腕の確かさに頭が下がった。と同時に昔取った杵づか、ちよつとしたコツで、素人の及びもつかないことが出来る夫に敬意をあらわした。

私の歯

大阪府豊中市 中松ミナ子

六月ははじめから歯医者通いをしているが、夏が過ぎ秋も深まったというのに未だに私の歯は戻ってこない。まさか抜いた歯が生えてくる筈などない。そこはソレ予算に応じて不自然でない程度に本来の歯並びに

合わせてくれる。現代の義歯技工もなかなかのモノだ。

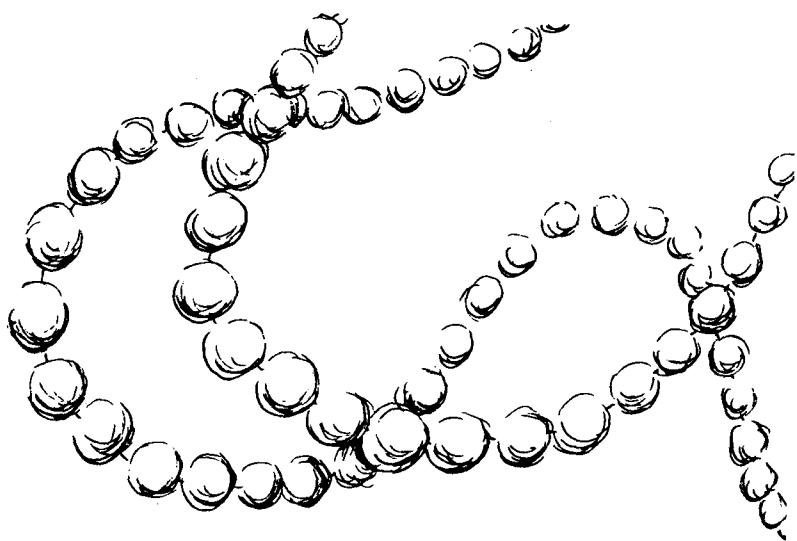
そもそも、私と歯科医との関わりは十代の終わり、井戸水で洗濯中の事故に始まった。

当時でも旧式の手押しポンプは常にギイギイとあえぎ、力まかせに押していた手に石鹸分が残っていたため、ツルツとすべてポンプの柄が跳ね返るや、悪魔の手と化し私の口元を直撃した。辺りに鮮血が飛びパニックになったものだ。

なんと上歯中央二本が根元から内側に曲がり、下唇を噛み込んでいた。翌日から口元を中心に顔は張れ上がり歯科と外科をハシゴし、食事はおろか会話も出来なかつた。幸い歯は折れていなかった、歯並びを元に戻しただけで治療は終了した。「この時適切な治療を施しておれば尾を引くことがなかった」と現歯科医は言ったことがある。

やがて結婚、四年後に出産したが、その頃から肩が凝ったり疲れると「古傷」が張れたり鈍痛に悩まされ、知人の紹介で訪ねたのがこの先生との出会いである。

たちまち上歯二本は抜歯され、両側の歯の神経を抜きブリッジで義歯を止める作業がなされた。数年経つと隣の歯へつけ換える……と四十年の間にだんだん歯は数を少なくしていった。まして今回は数本を残しての大改造(?)である。



毒舌家の先生は口をのぞくなり「もうアカンでエ。中松クンの上の歯は総入歯や……」と繊細な女心に杭を打ち込む。「ええッ、全部あきませんの?」「うーん。それに近いでエ、今日は右側抜く」。そんなこんなで私の上歯は二十年後の老婆の口元……。

しかし、口では憎らしいことを言うが、この先生、小柄で丸まっちく患者思いの温情家である。私たち夫婦が和歌山と大阪を忙しく往復する立場を考慮して、治療日も合わせてくれる。そんな事情で一層長期治療なのだ。

九月のはじめ、夫が「先生、家内の歯は、やや大き目にして心持ち出してやって」と直接注文を付けていたその歯が、私の口に納まった。ところが、あれだけ鏡を見て納得した筈の義歯は別人の口元となり、夫は「なんや、なんや、ウツドベツカーみたいやないか」と言い、嫁は「おかあさんと違う人みたい。歯でそんなに人相が変わるなんてエ」。

家族がそれぞれ辛辣な批評をする。

折も折、夫の伯母が亡くなり葬儀に参列した。久しぶりに出会う夫のいとこや親族と挨拶を交わしたが、一様に（どうしたの?）と視線は私の口元に集まる。

仕出し料理が広間に並び、九十七歳の天寿をまっとうした伯母の思い出話は和やかなものだが、私はそんな中で食欲さえ失っていた。

次の治療日、不平不満を告げると「よっしゃ、よっしゃ。もっと華奢に仕上げよう。オイ、Ｔ君呼んでくれ」と、義歯技工士を呼び寄せ長時間、義歯の大きさ、色、並び方と本来の私の歯の模型と比較したり懸命になってくれた。

あと一週間で今度こそ見目麗わしい(?) 私の歯が戻ってくるのだ。

タロ

千葉県船橋市 寺田真佐(60歳)

朝、ゴミを出し食事の仕度にとりかかった時、北の窓の外側で犬の鳴き声をした。

夫が、新聞を手にトイレから出てきて、

「おい、タロが逃げたんじゃないのか」

と言う。「まさか」と庭をのぞいてみたがタロの姿がない。ドキンとした。見ると枝折戸が五十センチばかり開いている。きのう、散歩から帰って鎖につないだ後、きちんと閉めなかったのだ。

「たいへん、戸が開いている。タロが逃げた!」

いつもは門扉も閉めているのに、ゴミ出しのため開

けっ放しにしたちよつとのすきに、抜け出したに違いない。

「ばかもの! なんてちゃんと閉めておかないんだ」
夫は怖い顔をして外へ飛び出した。

「あの……会社は……。時間ないけど……わたしが捜すから……」

と呼びかけたが、夫はもうそこらに居なかった。

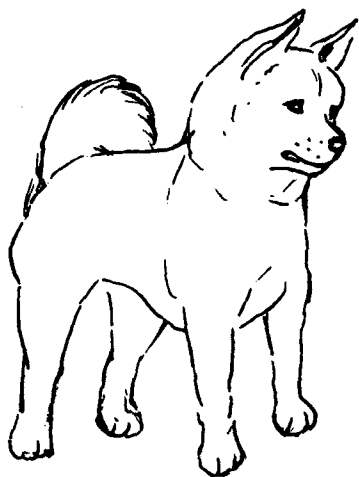
タロは血統書付きの柴犬で、七歳のオスである。血筋がいいだけあってなかなかハンサムな犬である。そのかわりといつてはなんだが、超のつく臆病犬なのだ。「こわい!」となったら逆上して、どこへすっ飛んでいくか分からない。日頃から「この子は綱を離したら一発で交通事故だね」と娘たちも笑っている。

犬のくせに、小さい子どもがこわい。おまわりさんがこわい。大工さんがこわい。サラーマンさんがこわい。バイクがこわい。道端のゴミ袋から、干してある傘までこわい。こわいものに逢うとビクツとして、巻いた尻尾がタラリと下がる。道の端の端に寄って体を平たく平たくし、こそこそそそそそ逃げる。「前世は平目だったんじゃないの、そんなに平らになっちゃって」とからかわれても、ただひたすら逃げまぐるタロである。

「臆病ってかわいそう。タロは世の中ストレスだらけ

だよ。長生きできないね」と家族は同情を惜しまない。馬鹿な子ほどかわいいというのは本当だ。タロは、かわいい。

さて、夫に叱られてしょんぼりしている場合じゃない。二階でまだ寝ている二人の娘（大学生）に「タロが逃げたよ、捜しに行くよ」と声をかけ、引綱とハムの切れはしを手にとって、わたしも外に飛び出した。夫はいつもの散歩の道を辿っているだろう。わたしは反対のバス通りへ向かう。隣りの角を曲がってみたがタロの姿はない。乳母車を押しながらやって来た白



い子犬を連れだしたおばあさんが、「茶色の犬が向こうの通りをひとり歩いていましたよ」と教えてくれた。「ありがとうございます！」と走りに走り、突き当たって右に曲がると、あっけなくそこにタロが居た。そばに寄ると黙ってわたしを見上げている。「タロったら……」とハムをやり、おとなしく食べている間にしっかりと綱をつけた。タロを従え、胸を張って家に戻った。娘たちはパジャマ姿で待っていて「あよかった」と喜んだ。

夫を迎えに出てみると、畑中の道を急ぎ足で歩いている姿がみえた。思わず頭の上に大きなマルを作りながら近づくと、肯ずいている。帰る道々、

「気をつけなけりやいかんよ。タロに何かあったら、わしはいいけどあいつら（娘たちのこと）がかわいいうだからな」

と言う。わたしは、

「うん、気をつける。ごめん」

と謝った。

あとで娘たちは、口を揃えて、

「タロに何かあったら、いちばんかわいいそうなのは、お父さんだよねえ」

と、笑っていた。

FREE TALK

フリートーク

ハリーの二カ月

大阪市鶴見区 家守恭子(69歳)

バーニーズマウンテンドックと言う大型洋犬をご存じだろうか？

体全体からみて頭の部分が大きく、耳は団扇のように垂れ、何処もかも丸まっく、性格はあくまで優しく明るくておとなしい。此の種の犬を雪の山中へウイスキーの瓶を背負わせて、遭難者を探しに行かせる話を聞いたことがある。

娘の華がそのバーニーズ犬を、事後承諾のかたちで購入し、夫と私に見せたときは先ずその大きさに仰天してしまった。生後十カ月で優に三十キロを超すという、深い毛に包まれた子牛ほどもあるハリーという名前の犬は、初対面の二人にやや短めで太い尾をユラユラと振り、手を差し出すとペロンと嘗めた。もしハリーに表情があるなら

ばニコニコとした笑顔に違いない。

南北に細長い敷地の、北端の母屋と築山を隔てた南端の、シングルの華の住む離れとは割に独自性が保たれている。華は既に一週間ほどハリーを飼った時点で、早くも負担になっていたと思う。華は昨年暮れ右腕を複雑骨折して入院手術をしたものの子後が悪く、再手術が必要な時期であった。

一方、血統書付きのハリーは同腹六匹が順に買われて、ハリーのみが売れ残り、店頭から次第に奥へ移されて九カ月も経っていた。動物好きの華は店員のうまい口車に乗せられ、ダンピングもしたので買ったのであろう。従って何の躰けも受けておらず、朝夕の散歩の味を知らず、排泄は居場所で敷取りだったらしい。

既に飼われている以上、とやかく言っても仕方がない。この図体では先ず食べさせることが必要だと、専用鍋で二回分炊き、朝と夕六時にやり、食事後散歩に連れ出して排泄をと考えたが見当外れに終わった。

ドッグフードで育った口はひどい猫舌で、五時に起きて炊いたのを六時にやっても器ごと引っ張りひっくり返したりする。散歩で戸外へ出るのを無闇に怖がる。食事はドッグフードのみに切替えて手間は省けたが、散歩をしないと敷地内に排泄物が散乱して悪臭を放つ。朝夕固形物は取り除いても、片足上げてのポーズをとらず一寸腰を下げてジャージャーの放尿にはお手上げである。体臭がきつく皮膚病もあり、風呂場で洗ってやるのがこれ又一騒動。薬用シャンプーは一回で空にな

り、シャワーで濯ぐ最中に胴震いされると目も開けられない。狭い浴室でハリーの踏ん張る足に踏まれ、私の足の甲骨は折れるかと思った。洗った後、華のグランドピアノの下へ逃げ込むハリーに私も匍匐前進で追っかけて薬を塗る頃にはへとへとに疲れてしまった。

生後、一つずつ声を掛け、人と犬の約束事を築いていけばよいものを、成犬に近い犬に、人は力ずくになって疲れ、諦めてやり過ぎす無責任さ。犬は人の要求が理解出来ぬままひたすら

ジャレつくのが哀れに映る。ハリーの場合「ジャレる」が「飛びつく」よりも「襲いかかる」行為になり、私は押し倒されて庭木の枝振りを台無しにしてしまった。手加減を知らぬ善意を叱るわけにもいかない。

この儘ではいけない。病気になっても獣医に連れていけない。予防接種も受けさせられない。臭気は庭じゅう立ち込める。

夫も腰をバンドでサポートし、軍手にジョギングシューズと万端整えて再三散歩を試みたが無理を悟ったようだ。努力して序々に慣らしたとしても、向後二十年間ハリーの快適環境は守り切れまい。

当の華は自分に都合の良い方へ考えていた。散歩を嫌がるハリーを前引き後押しするさまを、孫の無い老夫婦と犬が戯れていると受取り、早起きの私がハリーにドッグフードを遺るのは楽しいだろうと思い、朝の遅い彼女は、私がウンチを拾い石畳を棒擦りで洗流すのは殆ど見ていない。



夫の「ハリーを飼う人を探さんといかん」と呟くのを私は聞き流していた。反対してまでハリーを飼育する自信はないし、そう簡単に引き取ってくれる人はいまいと思ったのだ。

ハリー満一年の五月のある夕方、華と私は前後して帰宅した。囲いの中にいないのか華のハリーを呼ぶ声が出る。不審に思つて庭へ出ると「散歩に出たんかなあ、鎖も無いワ」と華。そんな筈はない、一度だつて夫が一人でハリーを連れだしたためしはない。ハッとして家の中へ駆け込み夫に「ハリーは……」と尋ねる声がかすれた。後

を追つてきた華と私に向かい夫は「ハリーは確かな人に飼つて貰うことにした」。やにわに飛び出した華は、未だ近くににいると思うのか、ハリーを呼ぶ声は遠くに近くに一しきり続いた。

夫は知人から犬の交換会があると聞かされた。電話で尋ねたところ、日を決めて飼いきれない犬を欲しい人に飼ってもらふシステムがあり、鉄則は一旦連れてきた以上後追いはしない条件とのこと。人間のエゴで不用意に子を産ませ、成長した複数の犬たちを持ち込むケースが多いのでは？ 飼ひ手のない犬の場合は？ 聞くまでもない。

夫は、飼えない事情があるのでお願いしたいが、処分だけは絶対に免れたことを訴えた。誠実そうな係の人はハリーを見て、この犬なら必ず貰われるだろうと言ったが、夫は何度でも交換会に出して欲しいとその間の餌代を添えたと言う。

三日目に「よい飼ひ主がありました

た」とわざわざ電話をしてくれた係の人は、ハリーを交換会に出す前に盲導犬とかセラピードッグ等を養成する訓練所に連絡して、その結果、受入れられたとのことだった。

その夜、私は言いようのない安らぎに包まれて眠ることが出来た。

術後の五年間

東京都台東区 高梨陽子(56歳)

平成六年十月十一日、胸髄腫瘍の手術をしてから無事に五年が経過した。

平成六年の新年早々、両脚の肌触りに違和感を感じてから、夏が過ぎ秋を迎えるころには腰から下の感覚は鈍く、麻痺感が強くなって症状が悪化していた。

階段を下りるときは恐怖心で足がすくんでしまい、手すりを伝いながら下



りていた。もちろん走ることができなかったので、広い横断歩道は途中で信号が変わりはしないか、心配しながら渡っていた。

手術するまでの五カ月間は、内科で二カ月原因不明のまま、電気鍼治療を受けたが症状が回復しないため、整形外科に転院することにした。X線検査の結果、腰椎変形症で神経が圧迫されているという。整形外科へ通院してから三カ月経過したが、まったく回復の兆しがなく、ますます悪くなっていた。

大きな病院で受診したほうがいいと思っていたころ、一泊のクラス会に参加し、その夜にお小水が出なくなる排泄障害の症状が出たのであった。

大学付属病院で受診すると「背中にできがあるので、入院して詳しい検査をしましょう」という医師の言葉があった。翌日の十月一日午後一時に急きょ入院の事態となつてしまい、地に足がついていないような感じで帰宅した。

検査結果は病名が胸髄腫瘍であり、



手術日が十月十一日と決まる。その間に排泄障害などの症状が出れば、即手術の態勢がとられた。だが、予定通りの十月十一日に手術日を迎えた。

腫瘍摘出のために背中を十五センチほど切開し、およそ三時間の手術であったらしい。麻酔から覚めて意識がはっきりとしたのは、翌朝の七時ごろであった。摘出した腫瘍の検査結果は

良性であったので、安堵の胸をなで下ろした。

術後二週間は絶対安静であり、その後リハビリが開始された。順調に回復して、退院は十一月十七日と決まり、およそ五十日振りに帰宅した。術後半年ぐらいいは上半身にコルセットを着用していたので、半病人の生活が続いた。

術後一年間はまめに検診に出かけたが、二年後からは年一回の受診となった。四年後の昨年は休みであったが、今年の五年後検診が最後で「無罪放免」と思いきや、また五年後に受診することになってしまった。「五年後に生きていられるかしら」と冗談半分という、医師は「この五年間異常がなかったのだから、大丈夫だよ」とおっしゃるのであった。

第七胸椎と第八胸椎の間にあった腫瘍を摘出したときに骨を削っているので、経過を診る必要があるとのこと。

術後はアクア・エクササイズ、トレーニング・マシンとウォーキングを続けている。術後三年が経った平成九年の夏には、二泊三日で尾瀬へ出かけ至仏山に登ってきた。同行の友人三人が私の回復力に驚くほどであった。だが、もともと握力が弱かったこともあり、術後はさらに重い物が持てないし、ビンのフタはちよつと固いと開けられなくなっている。これが後遺症かなと思っているが……。

この病気後の生活面には変化があった。掃除機を毎日かけないと嫌だった。二、三日おきに掃除するようにになり、一週間ぐらいまでは我慢できるようになったこと。以前は昼寝することに罪悪感があり、ほとんど横になったことはなかったが、疲れたら無理をしないですぐに寝ることにしている。また、毎晩就寝前は、無事に一日を過ごせたことに感謝してから床に就いている。

この手術体験で、歩けることや走れることなどが、「当たり前」であることの有り難さを身にしみて実感したのである。

買い物は手術前の体調が悪くなったときから、夫が重い物の買い出し担当になり、いまでも続けてもらっている。ウォーキングを兼ねて少し遠い所まで買い物に出かけるので、多くの品物を持って帰らないことにしている。

現在では、体調が以前の健康なときと変わらないほどに回復した。だが、暑い夏の間は忘れているが夏が終

り、秋から冬へと季節が変わる時期になると、天気の変わり目に背中の傷が疼くことがある。

手術前の元氣なときは、夫よりも長生きするものと決めていたが、術後はこちらが先に逝くかもしれないと思っている。でも、「一病息災」と言われるように、健康に気をつけるので長生きできるかも……。

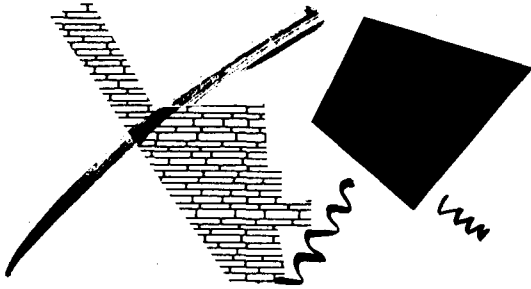
暮らしの中の二〇〇〇年問題

東京都世田谷区 田中優子

この投稿が出るとしたら、もう、一九九九年十二月になっているわけだが、皆さんは「コンピュータ西暦二〇〇〇年問題」に向けて何かしらの備えをしているだろうか？ この問題は、新聞、テレビなど、すでにいろいろなところで、起こり得る災害の可能性が

指摘されているが、まだまだ「コンピュータ」だけの問題で、自分には関係ない、と思っている人が多いようだ（一九九九年十月末現在）。

これは、コンピュータ・システムやマイクロチップの組み込まれた機器が、西暦年号を二桁で処理しているため、西暦二〇〇〇年と一九〇〇年が、同じ〇〇で、区別できなくなってしまう



うことから、誤作動や停止を起こす可能性がある、という問題だが、現代社会においては、コンピュータ・システムだけでなく、IC（集積回路）として、身の回りの家電製品から自動車、信号機、電話などの交通・通信・流通システム、電気・ガス・水道等のライフライン、ほかにも医療機器、金融など、あらゆるところにマイクロチップの組込まれた機器が無数に存在していると言われている。

特に、コンピュータの塊である「原発」については何かが起こったら大変だということで、この時期には「原発」を休ませよう！という「WASH（World Atomic Safety Holiday・世界原子力安全休暇）キャンペーン」というものが全国で繰り広げられている。日本には、世界四百三十三基の内の五十二基もの原発があり、記憶に新しいJCOの「臨界事故」のような皆さんの管理体制が指摘されている中で、この問題は深刻であると思う。

私は、今年の七、八月に「二〇〇〇

年問題」に対処しようと集まった有志市民による「Y2K（Year 2 Kilo 2000）勉強会」なるものに参加する機会を得た。

新聞記者、大手企業のY2K問題担当者、環境問題に取り組む団体の関係者、宗教家、自治体知事などの研修企画担当者、生協関係者、ボランティア活動グループ、地球村、アメリカより臨床心理学博士、その他の人々が集まり、「二〇〇〇年問題最新情報」の共有と「何ができるか？」についての話し合いが重ねられた。市民運動でこの問題を考え情報提供をしている「Y2K市民ネット」もこのメンバーの中からスタートした。

その経験から思うのだが、今の日本の対応状況では、市民に対する情報が圧倒的に不足している。例えば、各家庭で使われている電化製品などにもマイクロチップが使われているため、それらの停止や誤作動で、風呂釜が空焚きをしてしまう可能性もあると言われるが、ご存知だろうか？ もし、

流通システムに支障をきたしたら、食料や石油などが入ってこなくなる可能性もあるのだ。日本の食料自給率は二〇・三〇%しかなく、エネルギーに関してはほぼ一〇〇%海外に頼っているわけだが、専門家によると石油輸出国である中東諸国の「二〇〇〇年問題」対策は非常に遅れている、らしい。

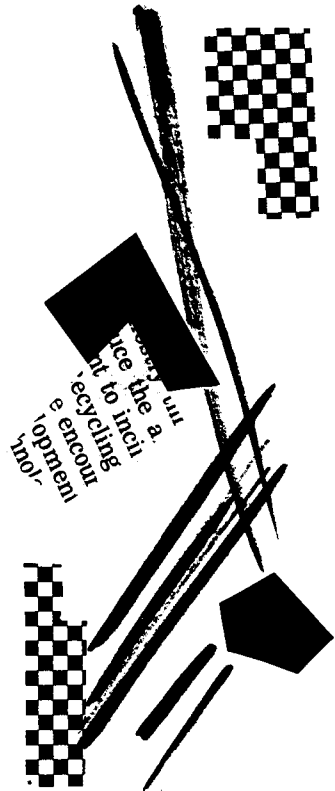
私たちの暮らしの中には「前もって知っておく」ことで備えられることがたくさんある。だからこそ「正確な情報」がぜひとも必要なのだが、どうも日本政府は「国民がパニックを起こしたら大変!」ということばかり心配して、「市民生活における二〇〇〇年問題」という視点では、積極的に対策をとってきたとは言いがたい。ようやく「食料の備蓄も必要」ということを発表したのが、一般市民の認識を確立させるには至っていないのではないだろうか。アメリカでは、一週間〜一カ月分の水や食料、生活必需品の備蓄が常識になっている(ただし「買い占め」は禁物だ)。

「二〇〇〇年問題」が、即、備蓄が必要になる問題だとは言い切れない。本当に、そんな災害が起こり得るのだろうか……と、私自身も半信半疑でいる。

が、しかし今求められているのは、半信半疑のままでいいから「その可能性がある」ということを認識すること、だそう。日付限定のこの問題を機に、各家庭で防災対策や備蓄の徹底をした方がよいのではないだろうか。それはとりもなおさず、いつくるかわからない震災対策としても役立つ日頃の個人の防災対策・危機管理の見

直しにつながるからだ(ただし、震災だったら他から助けが来るが、二〇〇〇年問題による災害は、起こるとしたら全国、全世界のことだから他からの助けはない)。

「危機管理」の原則とは、「最悪の状況を想定した対策をとる」「空振りには許されるが、見逃しは許されない」ということだ。「あんなことを言っ、何も起こらなかったらどうしてくれる?」という議論ではなく、「可能性」がある限りは備えるべき、ということだ。私もそろそろ、備蓄の準備をしなければ、と思っている。そして



「自分だけ」ではなく、地域の方々にも情報提供ができるように、来週は「二〇〇〇年問題・地球学習会」を予定している。

詳しく知りたい方は「二〇〇〇年問題」に関する書籍（例えば『何がどうなる？どうする？2000年危機』エスカルゴムック116 日本実業出版社、『Y2Kサバイバル・シフト』越智洋之・稲田芳弘著 三五館、他たくさん出ている）を読むか、インターネットでも情報がとれるのでアクセスしてみると良い。

『Y2K JAPAN』<http://www.y2k-japan.com/>

『Y2K 市民ネット』<http://www.mediaforest.com/y2k/>

（電子メールやインターネットは、二〇〇〇年問題にからめた悪質なコンピュータ・ウイルスやデマ情報が入ってくることもあるので注意が必要。また、もし、皆さんのまわりで「Y2K学習会」があつて、その最後に「この問題から救われるには、〇〇〇——宗

教やら何かの団体やら——に入ることです」というメッセージがあつたら、それは信用しない方がいい、ということもつけ加えておく。そのように悪用されることを、この問題に真剣に取り組んでいる人たちは、大変心配している）

靴を買うならトルコで

横浜市泉区 原 昭宏

二八〇号の「スタッフから」の冒頭で菊池さんが靴と足の関係について書いていらつしやいました。それを読んで思い出したことです。

今年の春トルコを旅行したときのこと、旅の途中で靴がこわれました。イスタンブールへ着いて次の日、あいにく雨でした。市内を歩いていたら右足がどうもジクジク湿つぱい。調べ

てみたら、右の靴の底が割れて水が浸入しているのです。これはいかん、何とかしなければと思いつつも、スケジュールにせかされて、底の割れた靴を履いたまま旅を続けました。その後は好天に恵まれて重大な状況には至りませんでした。アンカラに着いたとき雨に会い、何としても靴を買わなければならぬ状態になりました。幸いホテルからそう遠くないところに大きなショッピング・モールがあるのとことだったので、水の漏る靴を履いて出かけました。

話のすじとは関係ないことですが、入り口で警備員によるボディ・チェックがあるのには驚きました。話によると、二、三日前にイスタンブールの中心街で爆弾テロがあつたとか。

それはともかく、そのショッピング・モールはある高級ホテルの建物の一部をなして、高級ブティックや輸入電化製品店やらが並んでいます。これこれこういうわけなので靴を買い

たいと言ったら（幸い英語が通じた）、店員は私の足をジーンツと見ていました。が、やおら棚から靴の箱を取り出して来て私の足に履かせました。そしてなんと、足にピッタリ合ったのです。

店員は私に色と形の好みを尋ねただけで、サイズについては何も訊きませんでした。彼の眼力はまさにプロのそれだと感心したことでした。イタリー製だというその靴は、トルコの物価水準からすればかなり高価でしたが（といっても日本円で六千円くらい）、そのスタイルの良さ、歩きやすさはすばらしく、その後の旅行をきわめて快適なものにしてくれました。

このことに味をしめて、もう一足靴を買いおうと思い、帰国の前日、イスタンブールの街で靴屋を歩き回りました。

イスタンブールというところは革製品の店が多いところで、当然靴屋も沢山あります。それらの中で比較的雰囲気の良い店に入り、ショウケースの中

の気に入った靴を指し、買いたい旨を伝えました。店員はアンカラの時と同じように私の足をジーンツと見て、後ろの棚から靴の箱を取り出して私の足に履かせました。そして今度も一度で足にピッタリ合ったのです。ふたたびトルコの靴屋のプロの眼力に脱帽しました。それはイタリーのデザインをトルコで製造したものだそうですが、日本円で三千円くらいでした。二足目のこの靴もなかなか履き心地が良く、目下愛用しています。

懐しきの向こう側

茨城県稲敷郡 山田登志恵

ある朝、中学時代の同級生だったT君から電話がきた。同窓会名簿で見たのか、お正月に思いがけなく年賀状をくれたあのT君だった。「仕事で近く

まで来てるんだけど、ちょっと会えないかなと思って……」と言う。あいつはそういうこと言う奴だったかな……。あまりにも突然でびっくりはしたけれど、とにかく土浦の駅で待ち合わせることにした。少しドキドキ、そして懐しさがいっぱい。あとは会ってもわかるかなと不安が少し。私は目印に雑誌を持って立っていることにした。彼の方は昔より二十キロくらいも太っていると云ってたけど……。

仕事から日中家にいる夫のことが少し気がかりだったが、硬い表情ながら「遅れないように行け」と言ってくれた。大丈夫だよ。現実はそのらの安っぽいドラマのように、進展しやしない。

でも車を走らせて土浦に行くまで、もしや、T君が何かのセールス目的で、私に連絡したのではと思ったり、新興宗教の勧誘かも知なんて、つまらぬことに思いをめぐらしたりもした。たとえそうであっても三十年近くも会っていない昔の友人に会うのは、平凡な日

常にとてもいい刺激をくれるし、何だかちよつとミステリアスで、おもしろいナと思つてもいた。

待ち合わせ場所には、私の方が五分位早く着いた。電話で聞いたとおり、グレーのスーツ、めがね、黒のアタッシューケースの四十代の男性の姿を探すけど、そんな格好の人はザラにすぎず、何やらわからなくなり本当に会えるのかナと心配にもなる。でもその直後お互いに「アッ!」という感じで、この再会は実現した。

体格は確かに二まわりくらい大きくなつていたけど、あの頃の面影がそのまま残るT君が、私を見おろすようにして笑つていた。

「いやー、久しぶりだね」

お互い同じ言葉で挨拶して、すっかり昔なじみの友達気分だ。食事でもしながら話そうということになり、駅ビル内の寿司屋で落ち着いたけど、あんまりお互いになつていなくてふーんこんなもんかナと思えた。

それから昔話。彼はけつこう細かい

ことを覚えていのに、私は忘れていることが多い。そしてお互いの卒業後の話。これは私の方が話す時間が長かつたように思う。T君とは高校もクラスはちがつたけれど一緒だったので、あいつはどうした、この子はどこで何してる、と話は途切れることなく続く。それにしても、よくいろんな人達の消息を知っているもんだと、私は感心してしまふ。そしてその都度、その友人達を思い出す。こんな時懐かしいという言葉しか出てこない自分は、なんて貧困なボキャブラリーなんだろ、と思ひながらも、やつぱり只々懐しかった。

自分が今しよっている毎日の生活とか日常の暮らしの重さは何もなくなくなつていた。何がどうということでもなく、中学生高校生だった頃の自分とその仲間達を思い出し、頭の中には、あの校舎、校庭、教室が鮮明に浮かびあがり、制服姿で明るく笑っている自分がいた。(だから学生の頃の友達っていいんだナ)なんて思つているうち

に、時間は過ぎT君と握手して「じゃあネ」と言つて別れた時は、もう夕方だった。

私の中にはT君を通してあの頃のみんなが甦つてしまつていた。その後家に着いても、なかなか現実の自分に戻りにくいような気さえた。そしてその日は眠りにつくまで、ずっとT君と話したいろいろな事を思い出している自分がいた。T君は中学時代、細くて色白で、何か神経質そうにさえ感じられる少年だったけど、今や立派な社会人に見えた。

「サラリーマンしてるネ」と言つた私の言葉に、ニヤニヤ笑つていたつて。

ただ不思議なことにも気がついた。懐しさと楽しさが通り過ぎてしまつたら、今のT君は本当に充実した毎日を送っているのかナという、おせっかいな心配が湧いてきたのだ。高校の同窓会には毎年のように出席しているらしい(これは羨ましいくらいだが)、それ以外にも、私を訪ねてくれたよう

にいろんな級友達を訪ねては、昔話に花を咲かせたりしているらしい。そのせいでいろんな人達のことを、彼は実によく知っていた。

それはそれでいいのだけれど、四十代の男、妻子もいる一人前の男がどう



してそんなに昔を懐しんで、いろんな友人を訪ねて出かけていくんだろうか。この年代の男性は、普通は仕事に忙しく追いまわされているような時だろう。しかるべき責任や地位を手に入れ、それが社会的なものであらうと、個人的なものであらうと、いわゆる脂の乗りきった、といわれる熟しつつある年代なんじゃないだろうか。

人生振り返って懐しむのは、もっと先になってからのような気がして……。少なくとも、私の夫も含めて、私のまわりの男性達は皆そうだ。

T君は、本当は誰と、何と出会いたかったのだろう。

ホクロ

東京都世田谷区 太田啓子(41歳)

三、四年位前からだろうか。下くち

びるの右側に、ホクロができた。それがだんだん大きくなって、直径四ミリ程になってきた。

生まれた時からあるホクロは良いのだが、途中からできたホクロはガン化することがあると聞き、急にこわくなった。

今までにも、

「口に何かついているよ」

とか、

「何、ノリ付けてんのよ」

などと言われたこともしばしばあったので、皮膚科をやっている親戚の伯母に紹介してもらい、七月半ば、太陽の照りつける暑い日に、私はSクリニックを訪れた。雑居ビルの二階にあるそのクリニックは、ズバリ、美容外科である。そういう所に足を踏み入れるのは初めてだったので、ちよつとドキドキした。

ドクターは、七十歳程の女医さんと聞いていたが、アイシャドーがパツチり入った目もとと、豊満な胸が、年よりずつと若く見せていた。

ドクターは、ガンの疑いがあるかどうかは、組織検査をすれば、すぐにかかると説明した。私にとつてもガンはこわい病気なので、検査を受けることになり、ホクロの部分の皮膚を、少し取るようになった。

「どうぞ」

といつて通された隣の部屋が、施術室になっていた。八畳程の広さの部屋に、幅の狭いベッドが二つ、並べられていた。天井には、手術室にあるような、丸い大きなライトが設置されていた。

ナース、というより助手のオバさんといった感じの中年の女性二人が、白衣を着て、施術の準備を行っていた。

二人とも、クリニックでの仕事に慣れていないのか、かなり手際が悪かった。ドクターは、そんな二人を見てイライラするらしく、さかんに叱咤している。

私はとても不安になった。この病院、大丈夫なんだろうか……。奥のベッドに上向きで寝るように指

示され、アイマスクをされた。私の不安を和らげるかのように、「ホクロの皮膚を二ミリ位取るだけだから、簡単よ」と、ドクターは言った。

天井のライトがパツとつき、まわりが明るくなったのが、アイマスク越しに感じ取れた。

「麻酔の注射をします。最初チクツとするけど、すぐ薬がきいてきますからね」

と、ドクターが言った。

口びるに、プチツと注射針がささった瞬間が、何ともいえず、いやな感じだった。続いてドクターは、

「ドリル」

と言った。ドリルという言葉に、身がちんだ。ギューーンと、機械の回る音がし始めた。

「ギューギュー」

口びるに機械がふれた。と同時に、液体があごの方に流れていくのが感じられた。何か薬品が流れていくのかと思つたのだが、

「口びるって、案外血が出るのよね」というドクターの説明で、それが血液であることがわかった。その間も、

「ホラ、〇〇さん、患者さんの血を拭いてあげて」

とドクターは、助手のオバさんを叱りつけている。

事件はその直後におきた。

「あら、組織どこいつちやったのかしら」

ドリルで取ったばかりの皮膚を、見失ってしまったらしい。

さすがにドクターも少しあわてて、「ほんと、どこいつちやったのかしら。何しろ小さい組織だからね。〇〇さん、△△さん、よくさがして」

と言いながら、あたりをさがしまわっている様子。思わず私も、

「絶対見つけて下さいね」

と、口ばしってしまった。そして数分後、

「先生、ありました!」

小さな皮膚は口びるを拭いたガーゼに付いていたらしい。

「アラアッ、○○さん、オ・テ・ガ・ラー！」
ドクターは、はずんだ声で言った。

帰り際にドクターは、小さな薬びんに入った、ホクロの皮膚を見せてくれた。小さな魚のウロコとも見える皮膚の破片は、びんに入れられた薬品の表面に、プカリと浮いていた。

一週間後、検査の結果は異常なしと出た。よかった。その上で、美容の意味もこめ、レーザー光線による、ホクロの除去を行った。

料金は、しめて三万五千五百十円であった。

要領の悪い私

千葉県船橋市 三枝きよみ

言われてみると、いや、言われなくても本当に自分の要領の悪さには苦笑

せざるをえない。したくしてしている訳では無いのだが、どうしてもそうならない。しょう。

その日も足の踵に皮膚炎をおこし、初診から三日目の日だった。初診のとき「これはひどいね」と言われ「朝晩充分に手当てをして下さい。薬のぬり方も教えますので又三日後に見せて下さい」と言われ、靴も履けず帰って来たのだった。だいぶ良くなり今日は午前中に行く日になっていた。

だが八時半頃ゴミ捨てに出たところ



ろ、夜勤から帰り朝食をしてるはずの息子が外に出ている、思わず、

「どうしたの、どこへ行くの」

「早く！ ○○フーズのMさんから電話が入ってる」

私を呼びに来たのだ。何だろうと思いつき受話器を取ると、

「おはようございます。Mですが、午前中に出て来るはずのSさんが、お子さんが体の具合が悪くなり出社できないので、まことに悪いのですが、急遽出してもらえませんか」

「はあ、私も皮膚科の医者に行くことになってるのですが」

そこ迄言っただけで頭の中であんなに考える。やはりマネージャーも困って何人かいる中から、私などに電話したのだろう。行くことにしようか。追いつきをかける様に声をする。

「なるべく出てほしいのですが駄目ですか、お願いします。そして午後は午後で又いつものように出て下さい」

「はい分かりました十時半ですね。出ますので……」。

「そしたらお願いしますね」

仕事を受けてしまった。さあ大変、

医者は何時から受付か。診察券で九時からになっているのを確かめる。仕事に行く前、医者に行き、まっすぐ出社するか。あたふたと駆けずり回る。皮膚のきずもオリーブ油できれいに拭いて薬を取って来て下さいと言われたっけ。そばで見ている息子が、どうしたと聞く。

「午前中も仕事に来てくれて頼まれちゃった。その前に医者に行き、そしてまっすぐ勤めに行くわ」

「それじゃ医者迄車で送って行くか」

「そうしてもらえれば有難いわ」

そんな話をしている時、夫が帰って来たらしい車の音がした。このところ朝六時半頃出かけ八時頃迄ひと仕事して、朝食に帰ってくる。又営業所に出勤するのだが少々きついと思う。だが、「この不景気に忙しい方がまだましだよ」などと言っている。外に出て行った息子と二言、三言、何か話していたが玄関に入るなり「どっちか一つ

にしたら」と言った。医者にするか仕事に行くか、そんな時はことわればいいだろうと言う。

「でも私に電話するくらいだからマネージャーも困っていたのよ」と言いながら「本当に私に要領が悪いのね」「そうだよ俺なんかいかに要領良く世渡りするか考えてるよ」
何も言えなくなった。

「今日はどうしても医者に行かねばならないので、悪いですが出られません」って何故言えないのか、自分を良く見せたい為か、それとも少しでも収入が入るゆえか？ そんなんじや無いのだ。本当に幾つになっても直らない要領の悪さ愚図の癖、全く傍から見れば、いらいらするだろうが、一生このままいくのだと思う。

でもいつそ直らないなら、又こんな人間も一人位いてもいいだろうと思う。馬鹿なところも又可愛いではないか、とひらきなおり、自分を慰めている。

(え・カステラネンコ)

お友達に「わいふ」をおすすめください

新しい定期購読者をご紹介くださった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介くださるごとに誌代プラス送料とも一号延長。

「わいふ」年間分をプレゼントにお使いください

●ご結婚、赤ちゃん誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申し込みいただければ、新読者に、贈り主のお名前とプレゼントのおしらせを同封の上、一年分、計六回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介の場合と同様に、お一人につき一号分延長させていただきます。

●また十冊以上ご購入くだされば割引がございます。



ゴキブリハンター M

熊本県天草郡 松本とみよ (43歳)

ターキッシュ・アンゴラという種類の猫をもらって来た。真っ白で毛が長くとても優雅。たばこ屋のおかみさん、通称まあちゃんに似ているというので、二男が彼女のイニシャルをとってMと名付けた。

みかけ同様、性質もとても上品で、自分の皿の上に置かれた猫用缶詰のえさしか口にせず、魚のそばを通っても見向きもしない。さすが、今まで見て来たそこらへんの

野良猫とはお育ちが違うではないか。夫など「美智子皇后」と呼んでいたほど。

ところが、漁師さんからとれたばかりの魚を大量にいただいたので、煮付けをした時のことである。本当に缶詰のえさしか食べないのかなあとちょっと好奇心を起こしたのが間違いの元であった。ためしに手のひらにのせたカワハギの煮付けをやってみたところ、まるで別人(猫)のようにむさぼり食い、「もつと」とおねだりする。

それからが大変。人間は、自分よりもさらにうまいもんを食っているらしい、許せないと思ったのか知らないが、なんでも口にするようになった。

私がむいているじやがいもの皮を盗んで食う。なすのヘタ、バナナにスイカ。お前、本当に猫か？ そしてなんと、きわめつけは台所用スポンジ。あの洗剤のついた皿洗いのスポンジまで食っていた時は驚いた。お前バカじゃないのかあ。食いもんとスポンジの区別もつかんとは！ 舌がおかしいのだろうか？ 味すらもはや超越してひたすら胃袋におくりこむM。あの上品だったMちゃんが……。



長男晃とM

そして、ある夜のこと。ゴキブリを見つけたのでハエたたきでしとめた。するとそこへMがやって来て、ペロリと食べてしまった。ウェーッ!! きたねえやつ。それがおいしかったのかしらないが、Mはゴキブリを捕って食うのを趣味にするようになったのである。猫は普通ネズミを捕るものではないか。こんな猫は初めてだ。

その夜も、人間の目にはとまらなかったのにどうやって感知するのか、ゴキブリを四匹も次々に捕まえて来た。

その後も部屋の中にゴキブリの足だけが

散らばっていたこともあった。

最初は眉をひそめていた私も、これって、家のためには良いことなのかもとチラリと思うようになった。なんて珍しくて面白いのだろうと感心するようにさえなった。

——というわけで、自分が特派員をしている熊本県民テレビの野口ディレクターに売り込んでみた。

「ゴキブリを捕まえる名人猫という話題はどうでしょうか」

すると、ほとほとあきれた様子で、「かんべんして下さいよ。テレビで見たくないです」。

そうよね。あまりにも汚いシーンよね。

援助交際？

大阪市旭区 宮崎貴子

三歳の娘は、女性のことは「女の子」と言うのに、なぜか男性のことを「男」と言

う。呼び名で言う以外は、全てこの言い方に当てはまる。

先日、「男と車に乗って、海行った。また、行きたいなあ」と言ったので、一瞬間にいた人が振り返った。これ、実はパパとまた海に行きたいという事だったのだ。また、おじいちゃんと旅行に行った話も、「男とホテル行った。楽しかった」となるし、その上、実家にいる私の弟の部屋で泊まった事が「りかちゃん、昨日、男と朝ま

で寝た」となる。知らない人が聞いたたら、えっ？と一瞬びつくりするはずだ。

孫に甘いおじいちゃんはしょっちゅう、キティのグッズを買ってくるのだが、それだって、「男に買ってもらった。チューしたげる」なんておそろしいことになる。これでは、まるで援助交際じゃないの。おねがいだからやめて……。

(え・小牧あい)



グループホームがいい！

東京都足立区 福田幸子（53歳）

私は三年間という短い期間ではあったが、老人ホーム（民営有料の介護型）に勤務した。それは施設にプライバシーなどなく、入居している人たちの生活の自由さえも奪われていることを実感した日々であった。

自分が老いて、からだが思うように動かなくなってきた時、そしてほけがきた時、こんな所で絶対に人生を送りたくない。終わらせたくない！ ほけでも私の人生は私のもの。

私はほけても自分の思いどおりに生

きたいと思ったり行動したりして、ケアしてくれる人々を振り回すことだろう。

そんな時でも私を受容して許してくれるヘルパー（ワーカー）に巡り会いたい。

それには、いつも見守ってくれる人が側にいるということ、それも毎日二十四時間そんな状況であることが必要。

それがグループホームなのだ。

グループホームとは、五人から十人

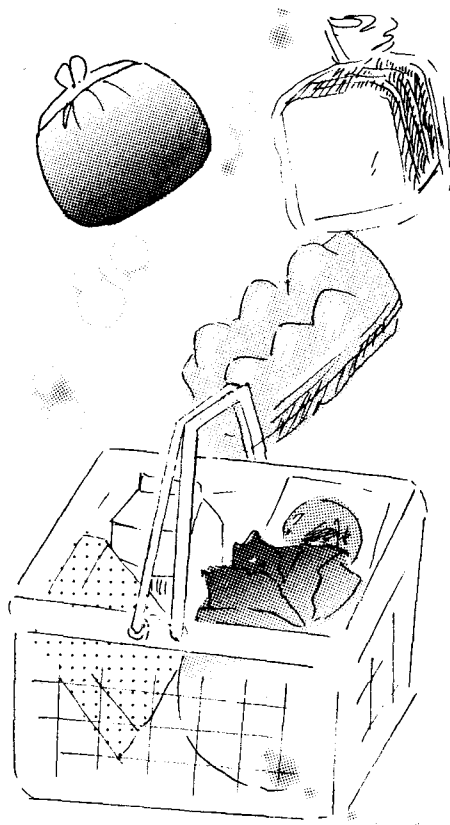
ぐらいの人々が普通の家で暮らしを共にする施設。自分の個室を持ち、見守る人（プロ）がいて、自由に出入りできる。買い物して、料理して、洗濯物干して、畳んで「これ誰のパンツ、くつした？」わいわい賑やかに楽しむ。一人になりたければ部屋に行き一人になれる。贅沢なことではないと思うけど……。

足立区に、モデル事業として行政が委託し、オープンした初めてのグループホームがある。今、私はそこにボラ

ンティアとして週二回通っている。
利用者のMさんは七十二歳。若い頃
家政婦をして一人娘を育ててきたとい
う。

ここに来る前は、娘さんが仕事に
いつて留守になると、家に帰るといつ
て出歩き、毎日のように迷子になつて
いたらしい。

ホームで彼女は毎朝床を水ぶきす
る。ある日、私も拭こうとしたらMさ



んは「あなたはまだ若いんだからこん
なことはいけません。冷えて子ど
もが出来なくなつたらどうするの」と
いう。五十過ぎた私は「そうかしら？
ではなにを手伝いましょうか」とくす
ぐつたさを笑顔で誤魔化して答える。
「何もしなくて良いのよ。どうしても
というのならその箒ではいてちょう
だい」と私に気を遣う。

小柄な彼女は流し台が高くて大変そ

うだ。それでも流しに汚れた物が一つ
でもあるとすぐ洗う（専用のお立ち台
がすぐ後で出来た）。

ある日、二人で近くのスーパーに買
い物に行くことになった。買い物リス
トと財布を、しっかりと買い物袋に自分
で入れたのに、何度も私に在処をたず
ねる。

「大丈夫、あなたがしっかり持ってい
るから」。そのつど答え二人で腕組み
してスーパーへ向かう。彼女は嬉しそ
うな顔を私に向けて安心するがすぐま
た繰り返す。

スーパーの入り口で買い物カゴをと
らない。私は黙ってついていく。買つ
たものが手に持ち切れなくなつて、は
じめて気がつく。リストに書いてある
順番どおりに買い物するので、店内を
あっち行ったりこっち行ったり、二人
で大笑いしながら歩きまわった。

精算する時に時間がかかる。代金を
払い領収書を貰うのに、がま口を開け
るのさえ苦勞している。後ろに並んで
いる人のイライラが伝わってくる。

私がちょっと頭を下げたが相手は気がつかないのか、膨れたままの顔だ。それでも黙って見守る。

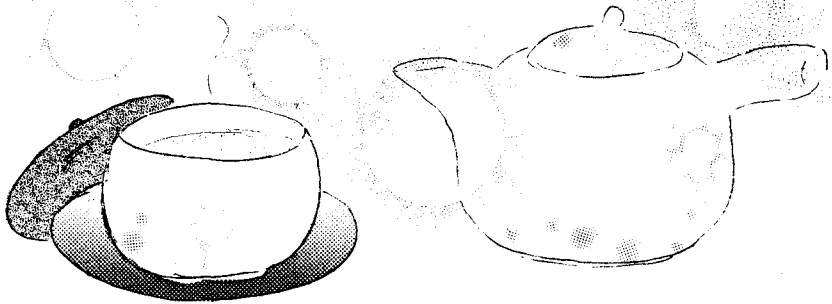
帰り道が分からなくなり迷ってしまった。「お姉さん知っているでしょ？」私に不安げに聞く。「わたしはじめてだから分からないのよ。戻ってみましょうか」と心の中で謝りながら引き返すことにした。自分で考えて思い出しでもらわなくてはならない。

手を握り合いながら彼女は見なれた景色を探す。曲がり角の八百屋さんの所に来て、嬉しそうに「ここ！ここ！」と手に力を入れる。

ホームの前で「良かったね、お疲れ様でした」と二人で頭を下げ合い笑った。

八十九歳になるUさんはお寺の娘さんだったという。仕切る事が好きで他の方とぶつかる事が間々あるが、話すことはいつも「ごもつとも」と思うことばかり。

来客も大好き。ホームに入れ代わり立ち代わり来る人にお茶を出しに行



く。そして、丁寧に挨拶する。

お客様が帰る時もきちんと「お構いも出来ませんで、申し訳ありませんね」と挨拶に出て行く。自分の部屋を間違え、不安げにしているUさんだけど、そういうときは凜として背筋も伸びて素敵である。

この人が、老人保健施設（病院から退院後、家にすぐ帰るのはむりだという人が入る施設）に居る時は、オムツをさせられ、ベッドで暗い顔をして座ってばかりいたそうだ。

八十二歳になるKさんは夕方になると、ウロウロしだす。「家に帰ります」といつて外に出て行く。ドアを開けるとメロディーが鳴る。職員はその音を聞き、すこし間を置いてKさんの後に続く。

一時間もすると「ただ今」とにこにこしながら二人で帰ってくる。「お帰りなさい」と残った職員が普通に迎える。

声かけしてもあまり動かないOさん八十二歳。

「働くの嫌いなもの」という。自分の歳も子どものこともあやふやな記憶しかないけれど、ユーモアたっぷりに話す。

ホーム長が朝刊の記事を、リビングにいた人たちと一緒に読んで、「お酒を飲んでいる人の方が長生きするそうですよ」と言った。

それを受けてOさんいわく、「酒屋さんが喜んでいでしょうね。うふふふ……」といったずらつぽく笑う。

彼女がリビングの椅子に座っている



● グループホームがいい！

だけで温かな雰囲気を感じられる。

ある日、裏口のところで一人ひっそりと座っていたので「退屈してませんか？」と声をかけた。

「退屈なんてしたことないよ。外の風を見ているだけでも楽しいよ」

「風を見ているのですか？」

「そう、木が揺れて、今、どれぐらいの風の強さか分かるの。雲も流れて行くところはどこかなあと考えると面白いよ」

「そうですね。そんなこと発見でき

るって素敵ですね」

脱帽。自由に自分のしたいように過ごしているからその人らしさが出るのだと思う。

遅めの三時を頂きながら夕飯の相談をする。まるで私たちがいつも言っている「今晚何にする」と同じ感覚である。

「毎日毎日大変だね。何でもいいよ」

「何でもいいよじゃなく、食べたいもの食べましようよ」と職員。

「そうね、やっぱり魚がいいかなあ」

「私は刺し身がいいかな」

「お寿司もいいね」

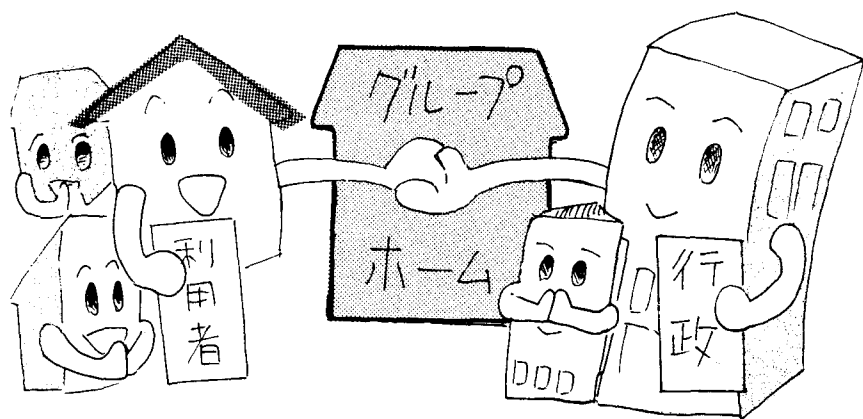
「食べられればいいよ」

「おいしかったらなおいいよ。ハハハ……」

みんなの笑い声がリビングの中に広がる。

此処に来てまだ六カ月、お互いを知ること無く集まった八人だ。勿論自分の意志ではないけれど……。

ある人は訪問看護を受けていて勧められ、ある人は施設にいて、在宅で一



人になってと、理由はさまざまだけれど、身内の人が本人の幸せを願ってホームを申し込んだという（面会はとも多い）。

警戒するでもなく、来る人は温かく迎え入れられる。

これが在宅で疲れきった家族と居たら、何もせず何も期待されず、大事に大事に閉じ込められることになってしまふ。

私は嫌だ。自分のしたいことを、したい時にする。食べたくないものは食べたくない。嫌だと感じたことは訳がわからなくても嫌だという。

そんな我が儘許さないと押さえつけたら暴れてやる。施設の中でも暴れたり、徘徊したり、問題行動といわれることをするのは必ず訳があるのである。

それを理解しない施設の職員は、すぐベッドに縛り付けたり、薬を飲ませたりする。社会問題になっている抑制というものの。いろいろ言い訳は用意されている。

「ベッドから落ちて骨折したら大変」「夜眠れなくなったら昼間困るでしょう」

「毎日毎日歩き回っていたら疲れるでしょう」

等々、人手不足やケアする人の心の貧しさなどは考慮されない。

悪循環を起こしだんだん寝たきりが作られて行くことにもなりがちだ。

そんな事になりたくない。絶対嫌だ！

だから私は自分の住む地域にたくさんグループホームを作りたいと思う。出来て欲しいと願う。

私はこの七月に「グループホームを創ろうかい」という会を立ち上げた。

地域の人たちが本当に共感して、自分たちで作り上げよう、と言ってくれば夢のような話でもない、恐いもの知らずで無謀な事を考えたのである。

会う人毎に「グループホームついでいよ！」と宣伝して歩いている。

（え・田村幹代）

足立区のグループホーム「こもれび」について



痴呆対応型老人共同生活援助事業の委託事業として、東京二十三区で初めてオープンした。

経営主体は医療法人社団である。

理事長兼院長は精神科を専門に四十年この地域で開業してきた。

当初は精神疾患と痴呆の患者を同じ病棟で治療していたという。

後に別にしたが、痴呆症患者を集団で治療する事の難しさを痛感する。そんな時、秋田県のある病院がグループホームをやっている事を耳にし、見学に行った。

「これだ、痴呆症の患者には共同生活の場を通して支援した方がいいのでは」

とひらめいたという。

行政側にグループホームの有効性を働きかけた。そしてモデル事業として

今年三月にオープンしたのである。

駅から歩いて十分の住宅街に位置する、看護学校の学生寮二棟をつなぎ改修した。改修及び施設整備費は、東京都と足立区がそれぞれ二分の一ずつ、全体の四分の三を補助した。

区の広報紙で利用者を募集。定員八名の二倍の希望者が出た。区の担当者とホーム長がそれぞれの家庭を訪問して、痴呆の程度が軽度から中度の人、共同生活が送れる人にしほり決定した。

費用は一人当たり月に約十七万が補助されるので、利用者は家賃、光熱費、食費、共益費等で十二万ほどを負担する。

職員は常勤五人、非常勤二人合計七人。八時から二十一時までは三人、それ以降は一人体制となっている。

英語教室の日々

神奈川県中郡 石井しのぶ（40歳）

小、中学生に自宅で英語を教える仕事をはじめて二年と七カ月。生徒数も順調にふえて現在、自分の子も含めて二十八名になった。学年やレベル別にクラスが分かれているので、今は八クラス分を月曜から金曜までにふりわけている。一クラスはその年によって一名〜八名までといういろいろである。最初の年は週に二日だけだったものが、次の年三日になり、今は結局、土日以外休みなしになってしまった。労働時間のわりに収入はいい方だと思うので、もっと子供に手がかからなかったら、仕事への満足度も大きかっただろうと思う。

しかし、問題は、仕事の時間帯なのである。ちょうど小五の息子が帰ってくる夕方三時半から六時まで続くので、自分の子とゆっくり話す時間がとれないのである。つい最近までこのことで息子から「なぜこんな仕事をはじめた!」とかなり責められてい

た。毎日何人の子が家に集まってくるので子供もほっとする間がないのかもしれない。私自身も、どうして子供が学校に行っている間にできる仕事を選ばなかったのだろうと罪悪感に苦しんだ。息子もこの頃はあきらめたのか、その間をなんとか工夫して過ごせるようになったようだが、私の中の子供への申し訳なさは残っている。当初の予定だと、週二、三日のはずが、毎日になってしまったのは大きな誤算だった。

子供は中二と小五で、まだまだ親に頼りたい時期なので、来年以降しばらくは生徒募集をやめようと考えているところである。

さて、仕事の内容だが、テープも用意されたテキストとワークブックというしつかりした教材があり、毎回の授業のやり方も、話す言葉から使うものまでマニュアルの中に詳しく書いてあるので、教えることに關してはあまり苦労することはない。

午前中、一、二時間くらいマニュアルを読み、授業の流れを覚え込み、その日に使う小道具をそろえれば準備完了である。ただ、実際の授業となると、全くマニュアル通りにいかないこともあり、アドリブをどう使うかが肝心になってくる。はじめて英語にふれた小学高学年の子たちは、興味もあるのか比較的おとなしく聞いてくれるのでとても教えやすい。

しかし、低学年の子や、二、三年目で慣れてきた子たちなどはだんだん、勝手なおしゃべりをはじめたりと言われた通りにやってくれなくなってくる。

最近、小学校で学級崩壊などが問題になっているが、この頃の子供たちの様子をみてみると、確かに何か昔とはちがってきているのを感じる。中にはまじめな子もいるけれど、六、八人くらいのグループになつてくると、妙にみんな騒ぐのである。

授業を妨害しようなんて気持ちは全くないことはわかるのだが、小さなことにも大げさに反応して「ギャーギャー」大声を出してみたり、筆箱を投げたり、人をたたいたり……。そのはしやぎ方が少々度を越しているように見える。日頃何か抑圧されているものでもあって、この場で大きくエネルギーを発散させているのだろうかと考えてみたが、どうも



ワーキングライフ

学校でも同じような感じらしい。私は、きつくしかって静かにさせるより、多少騒いでも楽しく勉強してくれればよいと思っていたのだが、すっかり甘く見られてしまったようなので、これからは少し厳しくしようかと考え直している。

時々、あまりにみんなやる気がなくて騒ぐことがあり、がっかりして私自身のやる気までなくなってくることもある。でもなぜか、その翌週はまじめに取り組んでくれたりして私の気持ちもち直すのである。日々、感情的にならないように自分をおさえ、子供たちのパワーに負けないようにと大声を出していると、たったの一時間でも心身共に相当こたえる。

しかし、この前中学生の女の子に「先生に数学も教わりたくない」なんて言われて何だかとてもうれしくなった。たまにこうした喜びがあるから続けられているのかもしれない。

家族からは「自分の好きなことをして迷惑をかけている」と思われ、生徒たちにエネルギーをどんどん吸いとられ、それでも私が沈んでいては授業がつまらなくなると思って、から元気でもいいから出して、はりきって笑顔で仕事をしているのが今の私である。

(え・西宮さき)

あ
なたへ

スマッシュ

二七八号「通い婚のすすめ」 麦穂さんへ

東京都日野市 十河温子(46歳)

私の文章を読み、感想を書いてくださいましてありがとうございます。

ご家族とうまいかないこと、わかるような気がいたします。私もつい数年前まで、口うるさい夫と、私の神経を逆なでするような言動をと

る夫の母との暮らしに、もう我慢ができないと何度思ったものでした。

でも寝たきりになってしまったその母を看護し、二人だけで見送ったことにより、私は夫から絶大な信頼を得ることになりました。夫曰く「夫婦関係が逆転してしまった」と。

その上郷里に住む母の兄弟姉妹からも感謝の言葉をかけられ、意地悪をしてきたことを恥じながら、母を人任せにせず我慢してきて良かったとつくづく思いました。一周忌の後にも言葉だけでは足りないのか、感謝のしるしだと叔父から食事に招待

され、叔母たちからも多大の気遣いを受けました。

こんなことならもっと母に優しくしておくべきだったと後悔をしましたが、家事・育児・介護に明け暮れる日々にはどうしてもそんな気持ちの余裕は持てませんでした。ですから、麦穂さんもきっと同じことではないかと思っています。

でも自分も含め人は変わります。夫は母の死後、ぴたりと小言を言わなくなりました。不思議に思いどうしてかと訊ねてみると、あまり気にならなくなったとのことでした。



きつと夫も私への負い目と母の病状が心配で、殺気立っていたのだと思います。

母が亡くなってみて、初めて息子
の母親への気持ちがどういふものな
のかを、思い知ったような気がしま
した。夫の親への思いは私たちが自
分の親に対して抱くのと同じ気持ち
であること、だからどんなことがあ
っても舅姑をないがしろにしては
いけないのだということです（中
にはとんでもない老人もいるのでそ
う場合は別ですが）。

こんなこと済んでしまったから言
えるのですけれど……。

「省エネ」って何ですか？ その後

埼玉県大宮市 新井純子

市の環境基本計画策定市民懇談会
なるものに参加して、市の環境のあ

れやこれやを聞いたり、しゃべった
りしている。

ある人がこんな話をして下さっ
た。「地球環境のことを専門に研究
していらいっしやる大学の先生は、今
まで一日三食の食事を二食に減ら
し、風呂は一週間に一回にした。そ
れぐらい、その先生は、危機感を抱
いていらっしやる。私たちは、何年
ぐらい前の日本の生活に戻るだろ
うか」と。

話し合いの部屋は、電灯が煌煌と
し、冷房がきき、ペットボトルのお
茶が紙コップに注がれていた。

その時と前後して、私は年一回の
基本健康診査と骨粗しょう症検診の
ため保健センターにでかけた。食
事、生活の指導を保健婦、栄養士よ
り受けた。適度の運動と清潔を保
ち、一日三十種類の食品をとり、充
分な睡眠を心がけるようにと言われ
た。まるでこれが「正義」とばかり
の言い方だ。

十月十五日付『週刊金曜日』とい

う雑誌に、百姓見習いだという青年
が書いていた、「生ごみ堆肥化に反
対する」というコラムが興味深かつ
た。

内容は、リサイクルという考え方は今の世の中に必要不可欠なことではあるけれど、すでに食品には、多くの添加物が使われていて、家庭の生ゴミのなかには化学物質が含まれている。特に腐敗、変質防止剤は、その名の通り微生物を殺すことが目的で使われている。そんな毒性物質を土に入れたら、土のなかの微生物バランスがすっかり壊れ、有機農業はできないというものであった。

それなのに、食料自給率五十パーセントに満たない国なのに。棄てるために海外から食料を輸入しているのでは、と思うことがある。

「あーあつ」私は溜息しか出ない。
百年後の子どもたちのためにでき
ることなんていう将来でなく、もつ
と近い将来、私たちはいったいどう
なっているのだろうか。

私じゃない！

東京都新宿区 林 直美

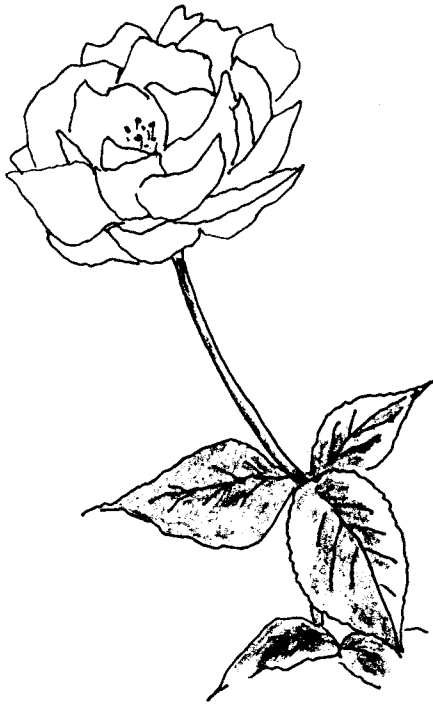
二八〇号に「私はお母さん」という投稿文を載せていただいた。要するに女に見えない私の話なのだが、挿し絵を見て、思わず吹き出してし

まった。「笑える！」のコーナーでしばらく笑わせてもらった後、少し複雑な気分になった。

「この絵のおばさんは私じゃない。私の文を読んだ人がこういう私を想像するなんて、たえられない」

挿し絵をにらんで、もんもんとしていると息子がのぞきこんで、

「そうだよ。これはお母さんじゃないよ。お母さんはもっと細くてかっこいいんだよね」



さすが、我が子。さほど細くもないが、あの絵ほど太つてもいないと思う。やっぱり、落ち込んだ私をなぐさめてくれるのは、かわいい息子だけなのだ。

「でも、挿し絵としてはうまく書けるよ。作者自身のイメージを描くわけじゃないんだから、これは見事なものだと思うな」

さすが、我が夫。こういうことは冷静にシビアに言うのだ。

「そりゃ、私だってわかってるけどね。ちよつと違うんだなあ。キムタクとは言わないけど、せめてそういうかっこよさをイメージするような挿し絵がほしかったなあ」

絵というものは、テレビなどの画像もそうであるうが、見た人に強烈なインパクトを与える。一度、目に焼き付いた印象は、なかなか覆すことが難しい。それが絵の持つ力だと思う。

「あはは、そりゃ文章力の問題じゃないの。文に力がないから、うまく

伝えられないだけじゃん。要するに下手なんだな、文章を書くのが」

墓穴を掘ってしまった。だが、読み手の想像で、文章の世界が広がっていくのだ。それこそが読むこと、そして書くことの楽しさでもあると思う。読者が挿し絵の通りの私を想像したか、キムタク（ありえんと思うが）を想像したか、自由に思ってくればいいことにした。私には少々不本意なあの挿し絵が、私の投稿文のスパイスになってくれたことは確かだろうから。

いろいろな生き方があってもいいのではないですか

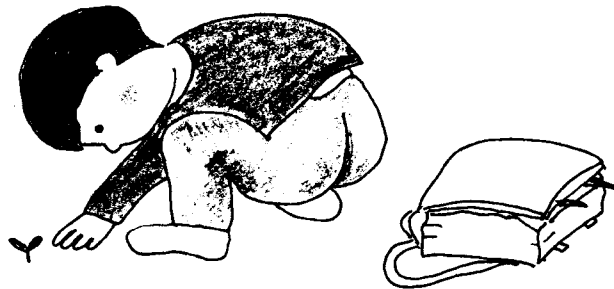
東京都品川区 菊池裕子（51歳）

二八〇号のズバリ一言「フリースクール」宮崎貴子さんへ。

「不登校」の子どもたちが通うフリースクールが増えたことなど、手放

しで賛成出来ないところのご意見ですね。現在の問題点や疑問などを的確な文で表現されているのを読ませていただきました。社会に暮らす多くの人も、宮崎さんと同じように考えていると思います。しかし、私はフリースクールが必要になってしまった社会だと感じています。その要因は別として、体験から反論があります。

ちょうど十年前、小学校二年生の息子が学校へ行かなくなった時があります。現在は、今春より大阪の大学に進み、東京を離れて一人暮らしをしています。詳細は「企画室」という出版社から出された『十五人の親たちの子育て奮戦記』にあります。十年前なので、登校拒否という言葉もまだ一般的ではありませんでしたが、そうだとわかると同時に、母親の私だけがカウンセリングを受けました。その後は精神科医の講演や相談、親業の受講、親の会の参加へと、仕事を持ちながらも出来る限



りの勉強をしました。

その時出逢った親子、教師や医師、他区の学校のようにすなから、誰一人として同じ状況ではないことを知りました。

特に学んだことは、一番小さな社会が家庭だということです。現在は核家族のため、人間関係を十分に学ばずに、学校へ行く年齢になってしまふことでした。そして感受性が豊かな子どもほど、とまどい、迷い、悩むことになるのであって、安易



に、がまんが足りないとか、甘やかし過ぎたとか、誰が悪いからなどと決めつけてはいけないということを教わったのです。

研究が進んでからは、文部省も「誰もが登校拒否になりうる状況だ」と発表しています。このことから、子どもが学校へ行かれなくなるのは、ほんの紙一重の違いであることが周知されました。

宮崎さんの文中に「この様な場所で過ごす子供たちは実に生き生きと

していて、本当にこの子たちが不登校で苦しんでいたのかと思うほど充実した笑顔を見せている」とありますが、充実しているのか本人に聞いたのでしょうか。一瞬の笑顔を見ただけで、他人にそのような評価はされたくないし、勝手に判断して欲しくないことです。

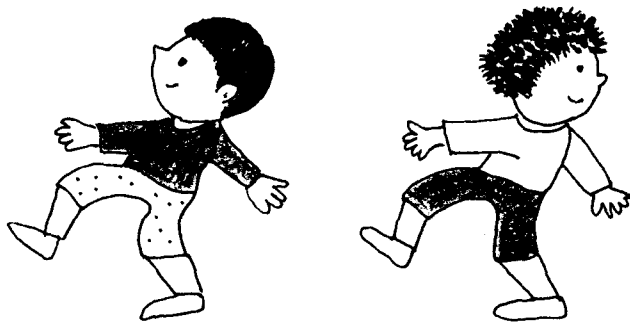
つまり、このような他人（まわり）の解釈や誤解が本当の解決を邪魔するのです。

子どもはみんなと同じに学校へ行

きたいと思っているからこそ苦しんでいるのです。そして母親を安心させたいと思っても、そう出来ない自分を責めます。心を痛め、困り果てている本人が一番辛いのですから、不登校が悪いことだと決めつけず、笑顔の奥にはどんなにか苦悩があるのだろうと広い心で見えて、共感して欲しいものです。

後半で宮崎さんは、逃避の受皿に利用し甘い方へ甘い方へと逃げに走る子供が増えるのではないかとご心配なようですが、追いかける何かがあるから逃げることになる。なければ、誰が逃げることを好みますか。正堂堂と生活した方が楽しいのですから……。逃げることは苦しくて、辛いことではないでしょうか。あえて選択するとは思えません。

しかし、一時期、社会や学校から遠ざかる必要性が出たとしたら、外側から冷静に見る時や、場所としてはフリースクールのような環境が大切なことだと思います。学校に行か



れない自分をまるごと受け入れてくれる場が必要だからです。フリースクールは教育制度の枠外ですが、私教育と考えれば良いと思います。そして、「学校へ行けない」から「学校へ行かない」と自分で選んだ子どもたちが主人公の場です。いろいろな生き方があってもいいのではないですか。

来年七月日本で開催の「世界フリースクール大会」に向けて子どもたちが準備を始めたそうです。今までヨーロッパ、アメリカなどだったようですが、第八回をアジアで引受けたことは画期的なことです。発展途上国の子どもたちの参加により、今後の教育問題も地球規模で考えるチャンスになると期待されています。

別な話ですが、品川区教育委員会は、来年度小学校に入学する予定の児童から、学区域の自由化を行うことをこの九月二十八日に決定したそうです。品川区を四つのブロックに分け、そのブロック内ならばどの小

学校を選んでも良いことになりました。約十校の中から自分の気に入った学校を選べるのですが、区民や教育関係者の意見や考えを聞いてから決めて欲しかったです。

その他では、二〇〇二年から小・中・高校では「総合的な学習の時間」が始まるそうです。決まった教科書もマニュアルもない、創造的な学習になります。

このような教育改革を、主人公の子どもの立場から考えてくれたなら、市民から認められるフリースクールにもなるのではないでしょう。

オネシヨは ママの責任じゃないよ！

埼玉県加須市 古田由記子(51歳)

睦美さんは小学校二年生以降オネシヨが完治したとありました。それ

だったら、早いほうです！ 我が家の息子は五年生までありました。そして、裕子さんと同じく、親子して悪戦苦闘しました。その模様は、裕子さんの投稿とまったく同じでした。真冬の寒いときにグッシヨリ濡れたパジャマを着て熟睡している息子がかわいそうで、タイマーをかけて三時間毎に彼の様子をみて、オネシヨシーツの交換とパジャマの着替えをさせたことが懐かしく思い出されました。

裕子さんと私どもの違いは、私達夫婦とも、大きくなってもオネシヨをしていた経験を持っていたので、最初から「これは遺伝だ」と思っていたことです。私達ふたりとも、小学校高学年までオネシヨの経験があるけれども自然に直ったから「ダイジョウブ！」と、自分たちを励ます裏付けを持っていたので、息子を怒ったりせずに、おおらかに対処していました。

それなのに、当時の育児書などには、必ずオネシヨの要因は神経質な子育てにあると書いてあつて、よく、憤慨していたものでした。

息子が自然に完治した頃、抗利尿ホルモンの記事が掲載されて、おおらかに対処しては来ても、私自身そうだったように息子も小さい胸を傷めていたろうな……、もう少し早くこのホルモンのことを知っていたら、物心つかないうちに直してあげられたかもしれない、と思いました。

そして、親バカというか、用意周到な私は、この、有り難くない遺伝子を持つ孫（勿論、まだこの世には生まれておりません）のために、あれから十年以上経っても、しっかりと文箱のなかに、その時の記事を保管しております。

精神的なものは、一割だってない！というのが私の持論です。

(え・田沼千恵)

ここに、あなたの妻はいる

ゆれる心、迷う明日

石川 結貴 著



石川 結貴著
毎日新聞社
本体1500円+税

神奈川県藤沢市

木村澄子

夫に向き合ってほしい。社会に必要とされず、家の中に固定される妻の孤独と虚しさ。平等に教育を受けて来て、対等を選び合って：共同生活を始めるやいなや、変貌する関係。

思えばここに登場する女たちは、卒業後数年の花嫁修業をして結婚した一昔前と異なり、休み以外、家にいたことなどないのだ。子どもを育てるのは苦勞もあるけど楽しみもあるし、

るし、家事は生活を楽しむ快適にするのに、だれにも評価されないところ。まらない虚しいものになりはてる。私ももしかしたら陥っていたかもしれない状況で、生計を一人で担う夫もつらかったと思う。

傍目に不幸と見えるものがないだけにだれにも言えず、胸に押し込めた思いを抱えている人と、心を通じ合わせて話を聞く。相手は人には言えないと思ってきたものを吐露し、少しだが元気になる。ずっしりとしたものを受け取った筆者は苦しむ。「あんなに好きで結婚したのに」

寝室は冷えきり、夫のお土産のワインは不毛の味がし、メールで知り合った男にさそわれるとどうしていいかわからなくなり、でも窓の向こうに行ってみると、新しい誰かと

出会ってみたい：窓を開けて夫以外の男と束の間の女としてつきあう人。大きな失望もないかわりにのぞき見もなし、それでもまだのぞきを信じていたいと引き返す人。夫にふりむいてはしくてめっちゃくちやをする人。

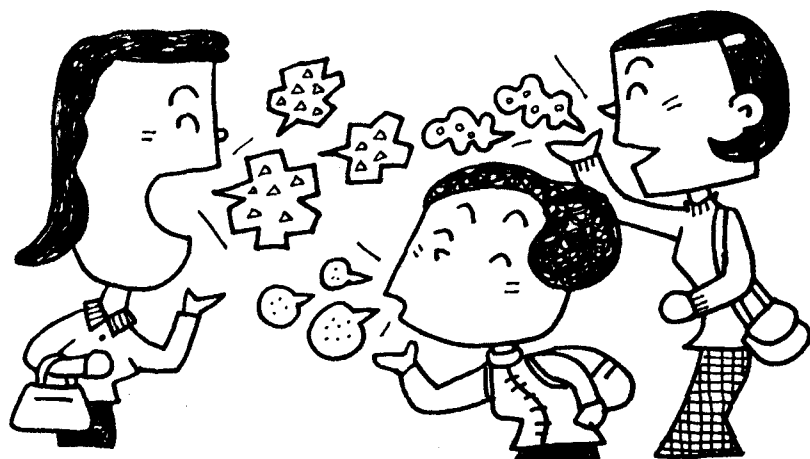
けれども最後は自分なのだ、夫も同じかもしれない、「やりなおす」という方法があることを忘れてはならない、と筆者はいう。

結婚は長期に渡る共同生活で、どんなに緻密に計算し約束しても必ず変化はある。出産・転勤・加齢。ときには決定的な愛情の変化も。

結婚生活の中で、夫婦の意義を見失っているカップルでなくても、限られた例だが自分に関係ないと思わず、私はここに、という叫びに耳を傾け、わが夫に伝えてみるべきだ。

座談会 私も言いたい

方言自慢



出席者 辻浦知津代 高梨陽子 後藤 晶

司 会 田中喜美子 編集部 和田好子

東京の方言

司会 今回の企画の「方言自慢」は後藤晶さんのご投稿がきっかけです。

東京で育っていると何となく、自分のところには方言はない、みたいな感じでエバってますけどね、本当は東京にも江戸方言というのがあるんです。それを意識しないで暮らしているのが東京っ子。

みなさんは方言のために嬉しいこと、つらいこと、プラスマイナス両面をそれぞれお感じになったことと思います。

まず最初に、ご自分のところの方言の特徴を話していただいて、それから、喜怒哀楽にからんでくるかもしれません、方言にまつわる体験をお聞かせください。

辻浦さんとは長いおつきあいだけど、ついで方言についてはお話しただけかなかったですよね。

辻浦 私は夫と同じ和歌山県の出です。家では和歌山弁、関西弁丸出しなんです。それでいて、いったん外へ出ると標準語で

すました顔をしている。

私、考えてみると、言葉では手痛い目に遇った思い出があります。この体験はあとでお話します。

高梨 私は茨城県の生まれで、ふだんは標準語を喋ろうと努力していますが、茨城弁の特徴って、語尾がすごく上がるんですよ。何でも尻上がりになる。

例えば、結婚前に私は実家から東京の新橋まで通勤していたんですが、電車が遅れたりした場合に会社へ電話をいれると、話し方ですぐ私だとわかってしまう。

旧姓は福嶋っていうんですが、「フクちゃん」は、やっぱり茨城弁だよなあ」と言われる。

私、茨城弁でいい思い出がないんですよ。この座談会も「方言自慢」ってあったから、私には向かないかな、と。方言でいい思い出をほとんどしていない。

もう一つ、茨城弁の特徴って、「い」と「え」の区別ができないんです。

司会 栃木県もそう。私の母の里が栃木だから。

高梨 だいたい北関東は「い」と「え」の

区別ができない。

和田 東京は「ひ」と「し」だよ。

司会 和田さん、いかがですか。出席者の一人として。

和田 あ、ね、田中さんというのはね、東京の山の手言葉なの。私は下町言葉なんです。



田中さんで、ときどきすごい乱暴な言葉遣いをするわけ。「メシ、食ってくる」と

かね。何であんなことを言うんだろうと思っただけでも、じつは私の姑も東京の山の手の人で、やっぱりそうなの。

不思議に思ってた、ある本に、江戸の武士というのは、中流以上の武士なら丁寧

な言葉と悪い言葉を使い分ける、と書いてあった。平生はペランメエ口調で言うんだ

けれども、出るところへ出ればきれいな言葉を使う。それが武士というものだと。

ところが下のほうの町人になってくると乱暴な言葉しか使えない。上流の町人はいつも丁寧な言葉を使っているんですよ。

なるほど、と思った。私はその下のほうとみえていつも乱暴な言葉を使う……(笑)。

司会 それ、誰の説？ 私の場合は性格的に乱暴なだけよ(笑)。

地方尊重の風潮

後藤 私は徳島で生まれ育ちました。

大学は東京で、結婚相手が徳島県人で、徳島の会社に就職したんですけども、たまに転勤で東京へきて八年くらいになりました。

ふだんの会話は家庭では徳島弁です。子供は東京弁。

このまえ「わいふ」に載せていただいた

文章にも書いたように、小学校のときは方言

言をなくすような教育を受けましたけども、大学へ入った頃は東京弁をすぐ喋ることができました。テレビを見て育っていたし。

方言がいいなと思ったのは、職場が、東京の真ん中、日本橋にありながら徳島弁の世界なんです。オジサンの世界。

でもまあ、これでもいいんだ、東京にいるからって無理に東京弁を使う必要はないんだなと思いました。杜宅も徳島弁の世界。子供世代は東京弁ですけど。

最近、大阪弁は平気ですよ。そういう感じで電車の中で県人同士喋るのはもう平気になりました。以前は何であんなに恥ずかしかったのかなあ、と思います。

子供に聞かせても、違和感なく受けとめますので、方言が恥ずかしいという感情は持っていないと思います。やっぱり時代が変わったなと思いました。

司会 いつごろから変化がありました？

和田 わりあい最近。十年もたっていないんじゃない。

辻浦 甥が大阪で商売しているんですけど、うちうちでは、もう吉本興業そのまま

の言葉ですよ。

でも仕事先から電話がかかってくるってパツと標準語に切り換わる。ただイントネーションは関西弁だから、私は関西風標準語って言ってるんですけどね、うまく使い分けてますね、今の若い人は。

後藤 音感がいいんだと思います。ふだん喋ってなくても、テレビで聞いているとパツと喋れるんだと思います。

高梨 テレビの影響は絶対あると思います。私の育ったところはテレビがなかったですから、地元では茨城弁を喋っていたと思うんですけども、今の子供たちはホント、全国各地、どこへ行っても標準語を喋っているんじゃないでしょうか。

司会 地方の言葉が恥ずかしくないとみんなが思うようになったのは大阪人の影響だ、みたいに言われていますよね。大阪弁はいいんだ、面白くて、と。だけど、そればかりじゃなくて……。

和田 言語学や民俗学のほうで、方言を尊重しようという気運が出てきたからでしょう。

司会 それはいつごろから？

和田 やっぱり十年以内じゃないですかね。

後藤 私、小学校時代は三十年くらい前でですけど、学校でも方言を喋っていました。ところが方言で話しちゃいけないって言われて、そうすると標準語を書き言葉みたいに喋んなきゃいなくなるわけです。方言を喋るとカードを取り合いするっていうような教育があった。

和田 ナニ、それ？ イエローカード？

後藤 みんな一日十枚くらいカードを持っていて、徳島弁を喋ると取られる。あんまり詳しく覚えていないんですけどね。

中学へ入ったときも国語の先生が、すごくいい先生だったのに、開口一番「私の授業は標準語でおこないます」って。

まだ標準語がいいという時代で、そのあと教育現場で地元を尊重する、という風潮が出てきたと思います。

和田 そういえば三十年くらい前、私が大阪に住んでいたころ、娘の学校では先生も生徒も平気で大阪弁を喋っていた。

司会 そのころからだんだん地方尊重みたいな風潮に……。

後藤 地域の伝統とか文化を保存しようとして

か。

和田 なってきたのかもしれない。

司会 昭和三十年代、四十年代は、何でも新しければいいという時代だった。

後藤 何でも合理化していく。

和田 そうだと思う。

だけど、この標準語がどうしてできなかったというとな、井上ひさしの芝居では人爲的につくったみたいを書いてあるんだけど、私はたぶんそうじゃないと思う。

参勤交代で地方から江戸へ出てきた武士どもが、みんな同じ言葉を使わないと通じないから、自然にできてきたんだと思う。それを明治政府が教育に取り入れようとした。そういうことだと思っね。

司会 自然にできたといっても、やっぱり江戸弁だったんじゃないの。合成語じゃないか。

和田 江戸弁に近い。地方から出てきた武士はみんな江戸弁の真似をするから、それで全体に通じる言葉ができたんじゃない？

高梨 鹿児島弁なんて、全然通じないんですよ。

後藤 友達が転校を繰り返して、鹿児島で

暮らしたとき、子供だったからすぐ言葉を覚えたみたいですけど、テストの答案用紙を返されて「なおせ」と言われた。一生懸命間違っていたところを直していたら、何度も「なおせ」「しまう」ことだったんですよ(笑)。

大学へ入ったら地方の子が多くて、いろんな方言を聞きましたけど、鹿児島はすこかったです。外国語みたい。

和田 もう沖縄はわかんないですもんね、完全に。

標準語に 侵食される方言

後藤 やっぱり標準語は講演とか、みんなの前で喋るのに向くと思うんですよ。阿波弁は会話にはいいけども。

辻浦 昔、和歌山の女学校へ転校したとき、級長さんが泣いている子に「泣きなよ、泣きなよ」って言ってるのね。

「泣きなさいよ」という意味だと思っていたら、じつは「泣きなさんなよ」という意味だったの。

司会 ハア——！(感嘆) 古語に近い感じ。

和田 古語は残っているわよ、方言には。随筆で、どこの地方か忘れたけど、先生が「ばりをばる」という言葉をとても憎んでいて、子供に絶対使っちゃいけないと言ったのよ。

それは、オシッコをする、という意味なの。「ゆまりまる」っていう古語からきていて、ちつともへんな言葉じゃなかったんだ、と大人になってから知ったという話だった。

古語はずいぶん残っていますよ。和歌山弁で「つれもていこら」なんて古いよね。

辻浦 もう代表的な方言です。

私、生まれは和歌山ですけど、地方を転々として、小さいころは大阪で育って、小学校三年の夏に浜松へ移ったんです。

二学期の始まる日に初めて学校へ行つて、転校生として紹介されて席へ座った。そして先生が「夏はお腹をこわす人が多いが、こういうことに気をつけたらいいだろう」と言つて、いきなり私を指名したんです。先生としては私を引き立てようと思われ



高梨陽子さん

たんでしょけど、私は突然の指名で緊張しちゃってね、大きな声で「ちめたい水を飲まんこと」って言ったんです（笑）。

教室中が爆笑でね、それからいじめられました。「ちめたい水、ちめたい水」って後をつけられてね、あれは辛かったです。

言葉を関東圏と関西圏にわけたら浜松は関東圏で、東京からは人が来るけど関西からはあまり来なかった。むかしは人の交流が少なかったんでしょうね。

でも小学生だからすぐに土地の言葉を覚えて、東海地方では語尾はたいていずら、だに、じゃん、なんですよ。得意になって喋ってね、それでやっと仲間に入れてもら

えましたけど。

戦争中は空襲で一家丸焼けになって、和歌山へ疎開して、和歌山の女学校で一年間、京都の女専で三年間、寮生活をしたんです。

後藤さんじゃないけど、それこそ全国から生徒が来ていて、いろんな言葉が行き交う。寮の中では九州弁も古屋弁もワイワイやるんですけど、やっぱり共通語が必要なものですから、外へ出ると標準語になっちゃう。

それで標準語が身についたものですから、卒業して和歌山へ帰って教師になってもからも絶対標準語で通したの。

今思えば、もう方言は使いたくないという気持ちと、標準語を使うとちょっと別の目で見られるという優越感があったんでしょうね。

四年ほどして結婚と同時に東京へ出てきて、ずっとこちらで暮らしてますが、中年過ぎて、あるとき国へ帰ったんです。新幹線で新大阪へ着いて、地下鉄で天王寺へ行つて、そこから和歌山行きの電車に乗る。ホームに立っているとね、あちこちから和歌山弁が聞こえてくるんですよ。

そのとき初めてね、「ああ、やわらかいひびきだなあ」って、有吉佐和子の『紀の川』を思い出して、耳をすまして和歌山弁を一生懸命聞きました。

兄嫁が、和歌山でも南のほうの道成寺のそばの出で、あそこは土地柄浄瑠璃がきかんなんです。日常生活の中に浄瑠璃の言葉が生きている。「泣きやんすなよ」とか「そうしやんせ」とかね。

それを兄嫁がコロコロしたとてもいい声で喋っているのを聞いてみると、耳に快くてね、やっぱり東京弁よりいいなあ、と。年のせいかなと思ったりもするんですけど。

司会 そういう心の変化って、面白いわねえ。和歌山弁というのは優雅なんです。辻浦 昔、それこそ有吉佐和子がいた時代は「そうのし」とか「そうよしな」とか、すごく優雅でした。でも今はもう、使える人はいないようです。

司会 方言でも、使える、使えないがだんだん変わってくるわけ？

辻浦 変わってきますね。

和田 結局、標準語に侵食されちゃったん

だ。

辻浦 侵食されているの。ちゃんぽんになっっている。イントネーションだけは関西だけ。

司会 方言自身が変わってきて、昔の方言と今の方言が違って、ということはない？

辻浦 というか、消えつつあるんですね。お年寄りの言葉は今でもいいなあと思います。

後藤 イントネーションは残りますけど、単語自体は消えていきますね。

中学のときの「標準語でやります」とおっしゃった先生が、なぜか方言を書き出し



後藤 晶さん

ましようという授業をされて、おばあちゃんだったら使うけれども自分は使わない言葉とかって書き出した覚えがある。

方言に残る古語

司会 みなさん、方言で、これは東京とは違います、という例を出してみてくださいらない？

後藤 持ち上げることを「かく」と言います。

司会 あ、カゴかきの「かく」？

後藤 そうです。「ちよつとかいて」って、便利なんですよ。東京だと言にくいんですけど、子供に「ちよつと来てかいて」とかね、こういうときに「かく」って言うんだよ、と教える。

司会 和歌山はどうです？

辻浦 うーん、「かたぐ」とは言いますけど、それは「かつぐ」ですからねえ。

高梨 茨城にはそういうの、ありません。茨城ってけっこう中途半端なんです、方言としても。

北のほうの津軽弁で、テレビの「いいとも」でよく喋っているけど、ほとんどわかんないですよ。

今、私、「ほとんど」と言いましたけど、うちのほうでは「ほとんど」って言うてたんです。

私も使っていたもんですから、子供から「お母さん、どうも『ほとんど』じゃなくて『ほとんど』」って言うみたいよ」って言われました(笑)。確かに辞書をひいたら「ほとんど」になってる。

後藤 じゃあ、書くときも「ほとんど」って書いてました？

高梨 覚えはないけど、きっと書いていたと思います。姉はいまでも茨城に住んでいますから、相変わらず「ほとんど」って言うっている。

辻浦 この間、福島の人と話をしたら、文学の話になって、「イトウジュン」は惜しいことしましたね」って言うの。

和田 江藤淳、だ。

辻浦 私、サッパリわかんなくてね、イトウジュンってどんな人だったかなと思って、よくよくきいてみたら江藤淳だった。

高梨 それ絶対、茨城弁の「イ」と「エ」の区別がないの一緒。

だって、ゴミ収集の「燃えるゴミ」のところに、「燃えるゴミ」って書いてあった(笑)。誰かが気がついて、消して「え」になってましたけど、そのぐらい「い」と「え」の区別がない。

和田 お能を習っている人にきくと、東北へいくと、まったく東北弁の謡なんだってね。ちょっと面白い。

東京は「ひ」と「し」がダメでしょ。八十歳くらいになる私の従兄弟が、火箸のことを「シ箸」って言う。私が火鉢のそばで「それは『シ箸』じゃないわよ。『火箸』よ」って言ったら、「何言ってるんだオマエ、シ箸じゃねえか」って(笑)。

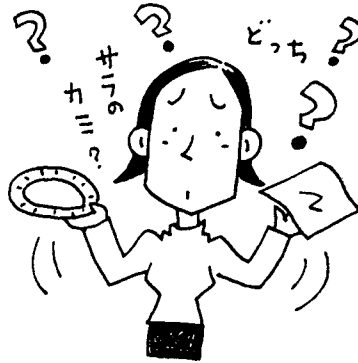
司会 「わいふ」で出てたじゃない。おばあさんが漬物にラベルをつけて、「ヒソ漬け」と書いてあるって。おかしかったな、あれは。

後藤 砒素カレー事件の調査って、新聞に出ている裁判の調査ですけど、方言だからすごいリアルですよ。

私が夫に「こんなふうを書いてあるわ。

和歌山弁ですいよね」って言ったら、夫が、徳島だったらこう書くかな、とか言ってる。

例えば、ここに「これがあるじゃない」



というのを、徳島弁では「あるでないで」と言うんですよ。夫の職場は徳島の会社ですが、東京出身の女の子もいるので、よく笑い話に出る。

東京支店だと東京でも採用するし、徳島からでもいいばい転動してくる。そこへ入ってきた十八歳くらいの東京育ちの子は、徳島弁にビックリしちゃうって、「サラのカミ

持ってこい」って言われて、お皿を持っていくのか、紙を持っていくのか、右往左往。
和田 私、戦争中に茨城の古河という所へ疎開していたんですが、そのときの印象では男女の言葉が全然変わりがいないような気がした。

女の人も「おれ」「おまえ」と言い、男と同じだったような気がするんですけど、どうですか。

高梨 私が小さいころはそうだったかもしれませんが。

記憶が定かではないですけど、私たちよりずっと年配の人はこちらん言っていたと思います。今でもだいぶん年配の人は言っているかもしれません。

和田 それは古語ですよ。近松の歌舞伎狂言に出てくるお姫さまは、みんな「おれ、おれ」って言うもの。

辻浦 奈良県の山奥に疎開していたことがありますけど、そこでは、ビックリしたときにね、「なんとわいらまっさらよー」(笑) っていうんですよ。

和田 なに、それ? どういう意味?

辻浦 「なんと」は感嘆詞ですね。「わい



辻浦知津子さん

「ら」は「おまえら」で、「まっさらよ」はどう訳したらいいかしらねえ……。なにしろ驚きの表現で、これは私も面白かったです。

和田 ずいぶん面白い言葉があるんだ。

後藤 (言葉を) 二つ知っているとというのは面白いですよ。子供には、ふだんは使わなくても耳でだけでも聞かせておく方がいいと思う。

高梨 同じ方言でも西のほうは、すごくやさしいじゃないですか。何となくきれいで。北のほうは、茨城弁から北へいっちゃんうと、全然きれいいじゃない。

後藤 でも何をもって美とするか。

つぶやきシローとか、私はすごい好きです。

高梨 あ、そうですか。あの人の喋っているの、栃木なの。だいたい茨城弁に近いです。

後藤 ああいうふうに方言が復権するとすごくいいと思う。

和田 なんていう人？

高梨 つぶやきシローっていうタレントさんがいるんですよ。マッシュルームカットの面白い頭をして、言っていることもすごく面白くてね、つぶやくようにボソボソ喋るの。

後藤 マギー司郎みたいな喋り方。

高梨 そうそう。あの人も栃木かなんかだから。

でも、他の人からみるといいのかもしれないけど、私からすれば茨城弁で、ほんとにインパクトがないの。

和田 だいたいね、京都のほうからみたら、東訛ってよくないのよ。でも、今聞くと、みんな古語だね。

司会 古語が北関東にあるわけ？

和田 私が聞いた古河の言葉には古語、あ

りましたよ。おそらくいいはある。だけど、だんだん標準語化されちゃってるんじゃないよね。

私の父が「歩く」ことを「ありく、ありく」って一生言っていた。これも古語です。

大事にしたい方言

司会 方言がずいぶん出ましたけど、さっき辻浦さんがおっしゃったように、嫌な思いをした体験、ありませんか。通じなくてすごい困っちゃったとか、大ミスをしたとか。

和田 私は関西へいったとき、「なおす」ってのがわかんなかったね。

高梨 「ほかす」というのもわかりませんでしたよ、私。

後藤 北海道では「捨てる」ことを「投げる」って言うんですね。除雪した雪を置いておく所を雪投げ場。ただ捨てることを「投げる」って面白いなと思った。

高梨 それが茨城弁だともっと汚い感じになる。捨てることを「ぶん投げっちめえ」

とか（笑、そんな感じ）。

和田（感心して）やっぱり古い言葉だねえ。

司会 昔のローマ人はラテン語を使っていたわけですが、ほうほうを征服していくからラテン語圏が広がっていく。

そうするとね、これは私のわずかな知識から言うんだけど、フランス語はわりにきれいな感じで変わっていくのよ。ところがロシアへいくとすごく汚いの。ズーズー弁みたいに濁ってくる。

英語のオクトーバーは、フランス語ではオクトーブル。それがロシア語ではオツチヤーブリとかね、なんかヘンテコリンになってくるの。そのなり方がすごくズーズー弁っぽくて、汚らしい。

和田 北って、そうなるのかしら。

辻浦 東北弁で、口が寒さで思うように動かないからあまり口を開けないんだっていいますよね。

高梨 そう。すごく言葉が短い。

和田 高梨さんが今言った茨城弁、昔の本にそっくりな言葉が出てくるわよ。江戸初期の言葉に似ている。



高梨 そうですか。

高校へ入ると、同じ茨城でもちよつと離れるとけっこう違って、「帰りましょう」ということを、私たちのところは、「けつぺえ」なんて言いませんでしたけども（笑）、「けつぺ、けつぺ」。

「だつぺ」とか「べよお」とか。

和田 東京は八王子あたりまで「べえべえ」言葉が残っている。

後藤 私は徳島でも鳴門なので、高校は県庁所在地の徳島市まで三十分くらいかけて通うんです。やっぱり鳴門は田舎なんだと思います。鳴門の言葉を喋ると、ちよつと恥ずかしくて、徳島市の言い方に合わせ

たりした。県内でも、夫の実家のほうとは全然違うし。

辻浦 違いますねえ。同じ大阪弁でも、あれは河内だとか、すぐわかります。「何してけつかるんや」とかね。

司会 すごいねえ。やっぱり直に耳で聞く。

和田 「けつかる」は古語だよ。近松の浄瑠璃にもよく出てくる。「雑兵物語」という江戸初期の、当時の言葉で書いた本がある。もう、そっくり。読んでごらん。

高梨 考え方がちよつと変わりましたよ、私（笑）。方言を大事にしないといけませんね。

和田 今の女言葉が出てきたのは明治からだけど、それ以前は吉原みたいな遊里とか大奥にしか女言葉はなかった。江戸では男も女も同じ言葉を使っていた。

どこから女言葉が出てきたんだろうと思っていたら、この間、ヘンなことを書いてる学者がいてね、出所はやっぱり吉原など花街だって言うの。芸者の間で使われていた言葉だって。

明治の政治家がさかんにそういう人たち

と結婚したんで、上流階級へ広まっていった。子供たちがその言葉を喋って、女子学習院へ入って、それで「ざまます」言葉が出てきた。あれは完全に吉原だもんね。

司会 吉原の言葉って、田舎弁で喋ると身元が知れちゃうから人工的につくったわけでしょ。ヘンな話ね。それを上流階級がありがたがって使うなんて。

和田 これは一説に過ぎないけど、女言葉と男言葉がどこからこんなに分かれたか。

一人称は、狂言でも初期の台本では分かれていない。つまり後に「わらわ」を女が使い始めるんだけど、最初は両方とも「われ」「みども」ですよ。



司会 女も？

和田 女も「みども」。

司会 あ、そう。

和田 日ポ辞書ってあるでしょ。ポルトガルの人たちがつくったポルトガルと日本語の辞書。それに出てるが貴婦人の使う一人称は「わがみ」。最上級の言葉だったらしいね。一般には「われ」「みども」。

こうやってきいてみると、方言でやっぱいいですね。とてもいいと思うわ。保存すべきだわね。

司会 そうはいっても旗色が悪い(笑)。

駄目になりそう。

後藤 でも今、テレビの視聴者ビデオなどで方言がよく使われていますよ。

和田 方言で、書かれないからいけないのよ。保存されない。

司会 楽譜をつくって、イントネーションがどこで上がるか下がるか、ちゃんと書いておけばどう？ テープで録音するとか。

和田 いま、どのくらい本気になってそういうことをやっているか……。

後藤 NHKラジオなどで時折、音の風景とかやっていますよ。

司会 ねえ、やれそうなんですよ。

方言が

残りにくい原因

和田 誰かが書いていたけど、サルトルの『嘔吐』、あれを大阪弁で書くとみられたもんじゃないって。関西弁で文学は駄目だと書いていた。難しいことを言おうとするとできないんだ、方言は。

後藤 そうです。

話すのには方言はいいけど、やっぱり書いたり、説明とか議論とか、人前で喋るときには標準語のほうが便利だと思う。

辻浦 そうそうそう。

和田 どうだろうねえ。

後藤 昔はどうだったのかなあとはいいますけど。

和田 うーん。

後藤 夫のおばあちゃんは九十歳くらいですが、私の知っている中では一番古い人で、やっぱり話し言葉しかないですね。昔は人前で喋る機会もなかったでしょうから、話し言葉としては完璧な阿波弁ですけど。

ど。

辻浦 文字にするとおかしくなる、というのはありますねえ。耳に入るぶんには心地良いけど。

後藤 書くのには、その体系がないから駄目なんですよ。

司会 でも最初から諦めちゃって、使おうとしないんじゃないですか。本当に書けませんかねえ。

後藤 だって、語尾からして話し言葉の語尾じゃないです。ふつうに「～です」と書くとか共通語と一緒になっちゃう。

司会 方言で「です」とか「ます」とか、ないんですか。

後藤 ないです。「～よ」「～じよ」になる。

辻浦 確かに語尾は違いますねえ。

司会 でも、東京弁でも日常的に話している言葉のなかには、書き言葉はないんじゃない？

和田 わかった！

昔から文語とか雅語とか、書き言葉と話し言葉が分かれているのよ、日本語って。

話し言葉で難しいことは書けないんだ

よ。それで特別な言葉ができて、小説もそうだけど、なんでも文語や雅語で書くようになっちゃったんだね、きつと。

司会 東京だからある、というんじゃないくて、書く言葉と話し言葉が……。

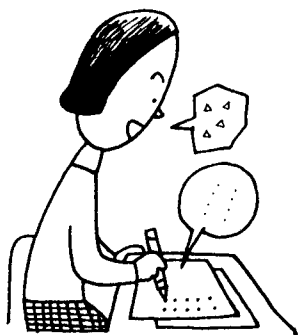
和田 分かれてたんだ。

辻浦 言文一致体って、ちよつと試みられたけど、何とおかしなものでしたね。

和田 それは明治になってやったことで、それ以前にはない。

司会 あのオー、『東海道中膝栗毛』みたいな、ああいう俗っぽいものの地の文はどうなの？

和田 やっぱり文語です。



後藤 会話だけの、落語みたいなものだったら方言でもいいかも。

和田 きつとそうだ。

だから、それが各地で方言がなかなか残りにくい一つの原因なのかもしれない。

辻浦 身内で喋るのには方言はいいですけどね。夫とは方言丸出しで会話してますが。

でも、ちよつと改まると標準語が出てくる。「ちよつと、あなた……」ってやると、向こうはビックリとする(笑)。知らず知らずのうちに使い分けができちゃってる。

後藤 私、方言で困った経験はあまりないんですが、高校生のとき、東京から来た転校生の男の子が一言も喋らないで一学期だけで帰ってしまった。溶け込めなくて。

司会 本当にそのせいで帰っちゃったの？

後藤 逆差別じゃないけど、都会から来たというんで、私たちにちよつと警戒心もあった。その子も「こんな田舎……」って思ってるな、と。

親切にしたいと思っても、言葉が全然わかんないから、って言っちゃったね、彼は。

司会 やっぱり言葉がバリアでしようねえ。

辻浦 違った言葉の世界へ入ると、なかなか話が出てこないですよ。

昭和二十五、六年ごろの話になるけど、初めて中学へ勤めたときにね、私はふつうのつもりで標準語を喋ったんですよ。

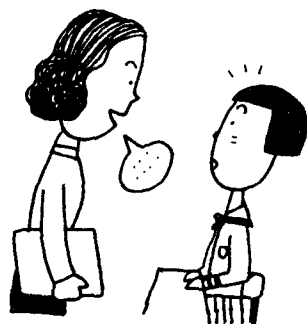
そしたら生徒が呆氣にとられた顔を聞いた。「あのとき、ナマの声で標準語を聞いたのは初めてだった。カルチャーショックでした」って何年かたって言うんですよ。司会 「辻浦です。さあ、これから授業を始めましょうね」とか、そういうことを言ったの？

辻浦 そうそうそう。

後藤 私だってそうでしたよ。三十年くらい前は先生も徳島の人が多かったから、標準語をナマで聞くなんで、なかったです。今は転校生もしょっちゅう来ているから珍しくないけど。

司会 ともかく、昔は転校生って滅多に來なかつたから、ものすごい好奇心の的だったもんね。

高梨 私の時代だと、東京から疎開してきて、そのまま住む人がけっこういました。言葉も違っし着ている物からして垢抜けて



いて、異質なものを見る感じだった。確かに物珍しさはありましたねえ。

“故郷の訛懐かし”

和田 田中さん、外国語で方言で、こんなにたくさんある？

司会 さっきから考えていたんだけど、こんなに小さな、微妙な差があるかどうかはきいたことがない。今度、フランス人にきいてみる。

和田 こんなにひどく違うのはないかもしれないね。こんなにバラエティーにとんで

いるのは。

司会 例えばモーリヤックなんかすごい田舎に住んでいたけど、書いてある会話はパリあたりで喋っている言葉と違わないもんね。もしかしたら、あんまりないのかも。

和田 日本は山脈が列島を縦断しているんで、村が分断されて言葉が別々になるのよ。島はまわりから隔絶しているし。

辻浦 これから（方言は）どうなるんでしょうねえ。

後藤 もうみんな個性を主張して、堂々と喋ると思います。

司会 大丈夫になつてきているんだとしたら、いいことよね。

和田 各地方で、保存運動というか、保存する動きがもつとはつきりしてくるといいですね。

司会 少し、その動きが出てきているかもしれない。

辻浦 保存しながら、適当に、使い分けがうまくいくんじゃないですか。

後藤 方言でしか言えない言葉のニュアンスって、ありますよね。

よく夫が阿波弁で、肩がこることを「や

ねがこわる」って言うんですよ(笑)。

私たちの世代はもう言いませんけど、親世代までは肩のへんを「やね」っていうんです。「こわる」ことを「こわる」。

今夫は四十三歳ですけど、「昔『やねがこわる』って親がよく言っていたけど、意味がやっとわかった」とか言っています(笑)。

言葉があるから感覚がわかる、ってありますよね。

でも「やね」って、何からきているんだろう？

辻浦 家の屋根、でしょうかねえ。

後藤 どうなんでしょう。耳でしか聞いていないから……。文字に書いたものを読んでいる。

司会 「こわる」って、肩のあたりのことしか言わないの？

後藤 腰も「こわり」ます。微妙に言い方はあると思いますけど。

辻浦 「こわる」って、すごくわかる感じがする。

後藤 わかりますよね。こわばって、ちょっと……。

辻浦 痛いとか、それだけじゃない。

司会 栃木はね、「こわい」と言うのは疲れたときのな。

高梨 茨城もそうです。

司会 あら、そう。似てるんだ。

高梨 疲れたときに「ああ、こわい」。

司会 じゃあ、そろそろこのへんで。今日は短い時間でしたけど、たいへん充実した面白い座談会でした。

和田 そうね。

辻浦 まとまりのない話で……。

啄木の歌に「故郷の訛懐かし停車場の人混みの中にそをききにくく」というのがありますけど、私、東京駅へ行くと、ときどき(方言を)じーっときいているんですよ。懐かしいなあと思ってね。

司会 きこえてくる？

辻浦 ええ。

いろんな故郷の方言が、自然な喋りのなかにあって、日本語っていいなあと思いますわ。

(え・小沢恵子)

自費出版は

「わいふ」へどうぞ！

「わいふ」編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

イラストも用意できますし、お書きになれない方のために、聞き書きのまとめもいたします。

費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実に安いのです。事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

ちなみに最近では、読者からのご依頼により、「紅の雲」、「春のかたみ」、「出会いに合掌して」などを制作いたしました。

皆さまも人生の記念に計画されてはいかがでしょう。

ズバリ一言

ペケ男の発言に思うこと

愛知県春日井市 小栗 明子

最近、この日本社会で強力な立場を持つ男性の、女性蔑視発言を二件、立て続けに目にした。

一つは全国的に有名な西村真吾元防衛政務次官の件。そしてもう一つは九

月、中川八洋筑波大学教授（国際政治学、今も教授！）の件。これは「わねっと」というメーリングリスト（ML）から知ったもの。

西村発言は、始まりが雑誌記事という活字になったものであったおかげで証拠十分、すぐさま全国的に世論の対象になったが、中川発言は、長崎県町村議長会主催の研修会で講演されたもの。一般のメディアでもっと的にされなくてはならないはずなのだが、正確な講演記録の作成と、その公表がない。つまり証拠不十分というわけか。

発言内容はMLによれば、女性蔑視（四十過ぎた女は肉のかたまり、だそうです。ほかにも色々！）、共産党を名指しで批判、アメリカ銃社会の賞賛、軍縮反対、と、びつくりすることばかり。早く、「証拠十分」にならないものか、と思う。

でも、大学教授という職種は官僚とは違う。四面楚歌になっても、ひとりではがんばれてしまうところがあるので、これからずっと教壇に立ち続け

ることになるのだろうか。

なぜ、女性蔑視をしてしまうのだろう。その人間をあえて「男性」とはいわない。女でも、女性蔑視の考えに基づいて行動する自分を許しているところがある。ただしそれは、そうしないとあまりに生きにくいこの世であるからね。

そう、生きにくい。この数カ月の間にアダルトチルドレン（AC）関連の本を数冊よんだけれども、女にはダブル・スタンダード（相反する二つのきまり）が課せられていることが今の日本ですごく問題なのだと思う。

男性にとってはシンプル。「仕事や勉強ができれば、できるほど、よい」。ところが女性の場合は「できれば、できるほど、よい。だが、できすぎてはいけない」である。

できすぎてはいけない、というのは男性の手前を意識している。父から、そのような教育をすっかりうけた私はACである。自分の経験では、義務教育時代より高校、高校よりは大学にお

いて、段々それ（できるのはいいが、過ぎるな）を求められているのを肌で感じるようになった。でも学生のうちは、まだいい。いったん社会に出ると、急にこの矛盾がおもてに出てくる。出ざるを得なくなる。なぜなら仕事の場合は、相手が男だろうが、きっちり勝負しないとイケないから。

そしてどちらかのルールを選ぶことになる。出しゃばらないほうを選べば、真剣に仕事ができないことになる。なのに「女は腰掛けで、まともに仕事をしないから」なんて、男からいわれたくないよね。真剣を選ぶと、「かわいげがない、女としてはだめだ」といわれてしまう。西村元防衛次官が社民党女性議員（真剣仕事人）を侮辱したのがいい例だ。

なんとかならないだろうか。女を蔑視する男はみんなベケだ。当たり前だ。男が生まれた瞬間から、いやそれ以前から、いったい誰と接していると思っているのだ。

儒教が優勢な中国大陆にしろ、イス



ラム教圏にしろ、歴史ある大国だし人数はとも多いのに、キリスト教の欧米諸国に遅れているのは女性の人権を無視して社会をつくろうとしているからだ。キリスト教の男性陣も、本音は建前とずいぶん違うようだが、女性がおもてに出てこられるという建前だけでも大事だ。

六年ほど前、NHKの育児番組でイスラムの女性が話しているのを観た。それまで私はイスラム教といえば一夫多妻制であり女性は外出もままならず、布で目だけしか出せないという、

男尊女卑の典型という知識しかなかった。

番組で、その女性がいうことには、①イスラムの教典には「母の足は天にあり」とある。これは、出産、育児という偉業を果たす母たるものは皆、天国にゆけるということ。②「子供はかわいがれ。女の子は特にかわいがれ」とも。③一夫多妻制については、妻を複数めとった場合、夫は妻たちの待遇を全く平等にしなくてはならないという。

これは衣食住からセックスに至るま

で、と思う。当然、これでは並大抵の金持ちでは務まらないし、バイアグラが要る。イスラムの教義は女性にダブル・スタンダードを履かせずシンプルに、男性より出しやばらない方針を選択し、全員レイプにも遭わないようにと考えられたとても現実的なものだ。



男にばかり甘くならないように多妻をもつ条件を厳しくし（妻にとつては当然ともいえるが）、女性を軽んじているわけでもない、というのはいわゆる①を聞いたときなど、「おつ、わかっているじゃん、イスラム教!」と、膝をたたいてうれしくなった。でも、そこまでだ。

イスラムの現実も、日本の現実も、変わらない。日本の男性も、女性の人権を考えるとめんどろから、社会にばつてくるなときつと言いたいのだろう。世界に遅れをとるといふ懸念はないのか。西村も中川も、公務員だから給料源の税金には、私たち女が出した分だつて入っている。「いったい、誰に飯食わせてもらつてると思つてんだ!」つて言つてやりたい。

このごろ話題の、ドメスティック・バイオレンス。妻を殴つたりののしつたりする夫も同罪。ペケ男。西村や中川にも奥さんはいふのだらうか。奥さんは、自分を含めた女性をそこまでのしる夫に見切りをつけたくはならな

いのだらうか。そんなペケ男からはすぐさま立ち去らないと。ぜひ、これらの世のためにも。

なぜそうしないか、いけないか。次のような邪推をしてみましょう……。西村真吾の父親西村栄一は、やはり物議をかもした男。やはり、女性蔑視の似たような考えを持っていたのではないかと。その妻（真吾の母）はそれをわかつていながら添うていた。息子（真吾）はそんな母を、つまらない人間だと思つてあろう。かくして母と女をばかにした息子が育てあげられる。この悪循環を断つには、女をばかにしているような男とは添わない毅然とした態度が全女性に必要なのだ。何も、西村の奥さんばかりとはいわない。わたしたち、すべてだ。ペケ男を許しては、いけない。

そして子供たちには人間の尊厳を、わかつてもらおう。女性蔑視やレイプがなくなるには、やはり教育しか、ないのだから。

(K・Jasmine)

出会いと別れ——私の場合⑥

東京都北区 田沢 未実

食道から喉にかけての異常な痛みで苦しんだり、隣の家から季節を問わず聞こえてくる、養子への折檻の声がもたらす気持ちの落ち込みを、何度となく繰り返しながら日々は過ぎていった。

そして、次男が二歳、長男が五歳頃だったと思う、私は町内会のおしゃべりグループから抜け出した。

二年くらいの間に私の言動が彼女達とどこか相容れないものであることを感じ取り、少しずつ輪から離れ始めた時期であった。

彼女達は、私が感じていた違和感を見てとっていたのであろう。そして私自身そのように「仲良し主婦らしくするグループ」には向かない自分自身の性格・性質に改めて思い当たり、また家の中にとじこもった。

そして、「アタマのサビ落とし」に英語の勉強を再開した。次男がまだ生後二カ月だった、一九七七年四月月から聴き始めたラジオの英語番組を、その時までに三年続けたところであった。それに加えて二十代で取って以来、

眠っていた英語検定二級を実力相応のものにする為に、同じレベルの通信教育（「英検」の基を作った日本英語教育協会の）を一年間受けて、修了書を得いったん終了した。これで二級の實力は本当に得られたものと思い、ブラUNKを埋め合わせたような小さな達成感を覚えた。

一九八一年四月、長男がやっと小学校に入学した。この時のスナップでも、しかめっ面で新入生らしい期待に満ちた笑顔もない。悲しそうでさえある。

カメラを構える私の方に向いている。こ
の子は、笑顔になれない気持ちを抱え
ていたのであらう。

次男は幼稚園の年中組に入園した。

徒歩圏内の私立幼稚園で、送迎バスが
ない分だけ園費が安いという理由でそ
こに入れたが、朝の集合場所での次男
の大泣きが有名になるほど、彼は泣き
まくった。どうしても泣きやまずと
う先生が困り果て、園の門前まで私
がついて行くことを一、二カ月くらい
続けた。

送って帰って洗濯したり掃除したり
して、一休みする間もなくまた出迎え
にいかなくてはならなかったが、それ
でも、全くひとりではいられないほんの
二、三時間が、自分をとりのどせるほ
つとしたひとときであったのを覚えて
いる。

再就職の夢

この一九八一年四月から翌年三月ま
での間に、私のなかで「離婚」の文字

が現実味を帯びて成長していった。き
っかけがあった。

ある日一通の封書が舞い込んだ。

それは、「大阪にも今度新しい人材
派遣会社ができること、貴方も昔取っ
た梓づかでもう一度働いてみないか」
ということ、そしてその会社の派遣コ
ーディネーターの名前を紹介するもの
であった。

それは、当時「テンポラリーセンタ
ー」といつていた会社だった。現在は
パソナグループとして成長し、大企業
になってしまったが発足当時は御堂筋
・本町の、交差点角のビル一、二フロ
アを占めているだけだった。

そのお知らせを送ってくれた人は、
すでにある大手商社を退職して、その
人材派遣会社の顧問になっているとい
うことであった。

結婚するまでもまたしてからでも、で
あるが、私の職歴は小さな貿易会社か
外資系の秘書兼タイピストであった。

結婚後働いたある翻訳会社の同僚の父
上の紹介で、その人の勤める大手商社

が提携した、アメリカのフランチャイ
ズビジネスの会社に秘書として採用さ
れたことがあった。長男出産の前年ま
で働いた会社である。

お知らせを送ってくれたのは、その
時の商社で何度かお目にかかった方
であった。

「自由になった両手」を得た私にとっ
ては、つぎに「仕事」が手の届く範囲
に入ってきたのを感じた。そのお知らせ
は、出産前まで働いていた「自分自
身」を思い出させてくれた。気分すら
も三十代に戻るようであった。この
「一通のお知らせ」が果たした役割の
大きさは計り知れない。

日数を経ずして、私は「テンポラリ
ーセンター」の、コーディネーターの
方（その人も働く母だった）を訪ねた。
あの日のことは生涯忘れないだろう。

大阪・T市に住んで四年半あまり、
阪急電車を乗り換えて、初めて御堂筋
線に乗り「淀屋橋」で下車し地上に出
た。

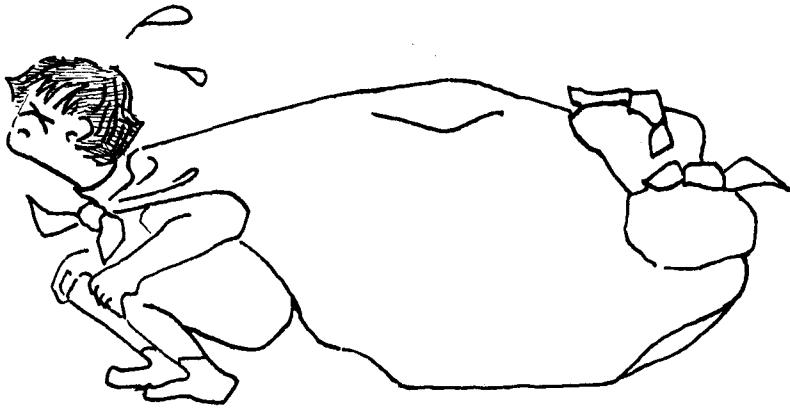
まさにそこに「淀屋橋」がかかって

おり、御堂筋の並木があった。これがあの有名な御堂筋か！と感慨無量だった。

指示通りに南に向かって歩いていったあの時の私は、主婦でもなく母でもなくましてや妻でもなく、求職活動に向かうその第一歩を歩みはじめていたのであった、と後日気がつくことになる。

母でもなくといっても、子供たちがそれぞれ学校・幼稚園で給食のある日に出かけて、それぞれが帰宅する前に帰ろうとの思いもあるから、気持ちは揺れていた。

私の名前は紹介されて通っていたが、ペーパーテスト、適正・反応テスト、タイピングテスト、面接と、やはり一時間以上はかかった。英語のサビ落としをやっておいて良かったとしみじみ思う一方で、シヨックなのはタイピングスピードの落ち込みであった。現役時代の七割くらいしかできなかった。また電動タイプライターに液晶画面のついた型のものができており、時



代の推移を突きつけられる思いだった。

この日をきっかけに、週二回、子供たちの帰宅時間が午後になる日を選んで、タイピングスピードを取り戻すためのトレーニングに通うことにした。

はつきりと、「仕事をしたい」と思っていた。そういう時にはそういうふうになるものか、バスで二つ先くらいの場所で、「子供英語教室」の講師を募集していて、それに応募しようと夫に相談してみた。

案の定、定番の答えが返ってきた。

「家の中の事をきちんとできるなら」というあれである。

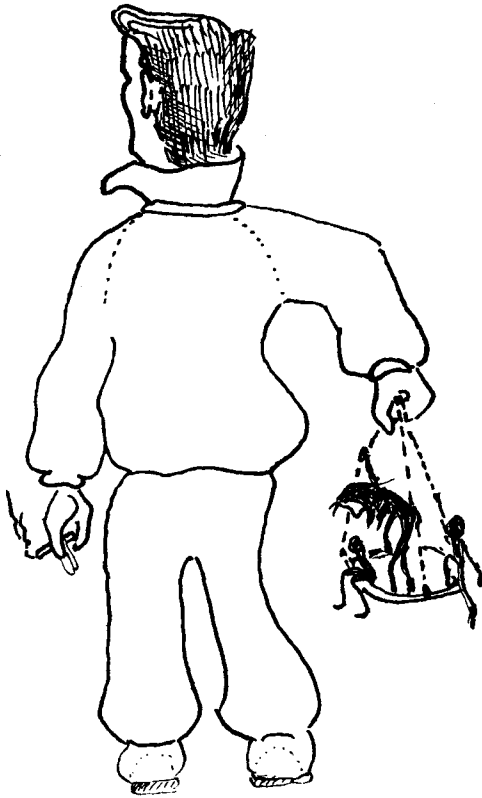
「教室」というからには、放課後に決まっている。夕方から夜にかかる。

毎日の掃除、洗濯、買い物、炊事、後片づけ、順番でまわってくる幼稚園の給食作り当番、子供たちの入浴、就寝まで雑多な仕事のいろいろを考えると、家の中をきちんとなどできるわけもない。

この時どうしても「仕事をしたい」

と言ひ張れない自分に腹立たしかつた。たった独りで育児・家事・仕事は背負ひ切れないとわかつたからである。保育所は、まず母親に仕事があることを申し込み条件として規定しているし、子供が幼稚園と小学校に通つていくという、「じゃ放課後に子供を見てくれる人はいるんですか?」となる。仕事にはつけない。

夫は、働かなくても今のままで生活



していけるのに、何でもいさらそんなことをするのか、と考えたらしい。

「俺の給料で君たちを養つていけるよ」と言つた。そして、「子供たちがもつと大きくなつてから考えたほうがいいよ」と。

「養う」「養われる」。収入がないということはそういう関係である。

「養う」という言葉によつてもたらされた私のショックは大きかつた。それ

まで夫とは五分五分だと思ひ込んでいた。

事実、長男が生まれるまでの共働きの年月は、私の給料だけで二人の生活を支えた。このことは第一回と二回に書いたとおりである。だから今子供たちが小さくて、私が家事・育児に専念していても関係は五分五分だと、疑いもなく思ひ込んでいた。そして、いずれ必ず私も働くからと言ひ続けていた。

「今は子供たちが小さいからこうして子育てしているけれど、いずれきつと私は働く!」そして、大阪に永住してもいい。家を買おう。そのように言つていた。

実際、夫にはそれまでに何度も「社宅にいる間に貯金して、中古のアパートの3DKくらいのを買い取ろうよ」と言つた。

しかし、夫からの答えは判で押したようにいつも同じだった。

「ボーナスがいつも必ず出るとは限らないから、住宅ローンは怖い」と。

一九七〇年代から八〇年代初期で、

高度成長期の右肩上りの真つ最中であつた。ボーナスは夏・冬コンスタントに二カ月ずつは必ず出ていたころである。

彼はボーナスを当てにして賭けマージャンの負け分と飲み代を払っていたので、住宅ローンが怖かつたというのは、彼なりの理由ではもつともであつたろう。

彼も、しかし三十代後半であり、住宅ローンを組むにはぎりぎりになってしたが、住居というものに全く関心を示さなかつた。

夫としての彼に失望した理由の一つである。

それではと、住宅公団の空き家募集になんとか応募したがみんな外れるのだった。あれは住宅に困っている人を対象にしているのだから、たとえこちらがボロ社宅に住んでいようとも、一軒家の住所でハガキを出しては抽選もれになるのであつたろう。

この年の夏、とうとう我慢しきれなくなつて、社宅変更願いを強硬に申し

立てた。だめなら自分たちで家を見つけて引つ越してしまおうとまで私は言つた。

いつもいつも隣の家から聞こえる折檻のわめき声に、もう私は耐えられなかつた。また、引つ越してきた一九七六年十二月の時点で、ふやけていたふる場の敷居とドア前の床板が本当に腐つて、穴が年々大きくなつていたのに加え、青白いキノコが生えてきたのである。

それに年がら年中、朝から晩まで、電灯をつけなければいられないような、薄暗い六畳の部屋での生活で神経が千切れそうになつていた。

会社からの返答が「許可」となつたのは、その翌年一九八一年の初めだった。大家が「ふる場の修理をしない」という書面に捺印してくれたので、やつと会社も転居を認めたのであつた。

また、週二回通つてトレニングしたタイピングは二、三カ月で中止した。初めは無料だったのが、途中で有料になつたからである。往復のバス代

・電車賃でも持ち出しなのに有料となつては、無収入の私には賄い切れないとわかつたのと、いますぐの仕事にながらないと分かつたからである。

九時から五時（六時）まで、きちんと働ける人でないと仕事はなかなか無いのである。「貴方のフリータイムをアレンジして……」などというあれは、キャッチコピーの嘘である。雇う方は、八時間なり九時間なりをしつかり消化する人材を優先的に採用するのである。

念願の引つ越し

明けて一九八二年三月、小学校一年生の長男の修了式と、次男の幼稚園のそれを待つて京都府Y市へ引つ越した。京阪電車で京都からも大阪からも約三十分、便利で環境のいい静かな場所だった。

しかし例のごとく「家のことはすべて君に任せる」という一見カッコヨサソウな、実は非協力的言い訳以外の何

ものでもない錦の御旗により、引越し先を見つける不動産屋回りも、運送業者の手配も、荷造り、荷ほどきから掃除も片づけも、全て私一人でしなければならなかった。

独りぼっちで荷造り・引越しは私の運命とさえ言える。この後も何回かあったし、結婚以前から数え切れないほどあったのである。それはともかく、引越し先の3DKのアパートに、荷物が手当たり次第に降ろされ、運送業者はタンスなどの大型家具さえ動かす手伝いもせず、さっさと大阪へ戻ってしまったのには啞然とした。引

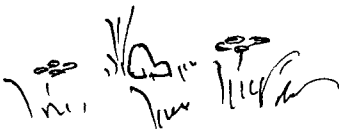


越し代を値切ったのが悪かったのかもしれない。

今夜寝るところをどうやってつくろそうかと、呆然と立ちつくしているところへ、彼が珍しく夕方早めに帰宅し、家具の移動をしてくれたので、どこにか寝る場所を確保してその日は荷物の谷間に寝た。

「今日は引越しだろ。早く帰って奥さんを手伝ってやれよ」と言われ、仕方なく、帰ってきたらしい。

私は当時「アルコール中毒」という言葉を知識としては持っていたが、夫がそれであるとは考えてもみなかった。



「飲みすぎると肝臓に悪いから、飲まない日をつくらないとだめよ」とはよく言ったが効きめは全くなかった。

たまに、「今日は飲まない日にする」と自ら言いだしても、夕方になると「やつぱりちよつと飲もう」と、冷蔵庫のアイスキューブを取り出す、そういう自己管理能力のない人なのである。

引越し後は、またも私一人で市役所への転入届け、転校・転園届け、銀行口座の移転・開設、運転免許証の住所変更など、一通りすませて終わったら、もう四月の新学期が始まりY市第四小学校とその付属幼稚園に、それぞれ二年生と、幼稚園年長組となったふたりの息子達は通い出した。

年齢が低いこともあったし、学期の変わり目で転入生も珍しくなかったのか、「イジメ」にあわなかったのは幸いであった。学校も幼稚園も道路をはさんだ向かい側にあり、ものの一分もあればかけつけられるという場所にあった。

入居したアパートは木造二階建に六

世帯がはいっているもので、二階の足音が気になったが、日当たりがよくて、五年近くも暮らした、あの丁市の一軒家のうす暗さと湿気を思うと雲泥の差だった。布団干しをしたときの何と気持ち良かったことか！

南に向いて並んでいる四畳半二つを私と子供の部屋にして、玄関を入ってすぐのDKの隣の六畳は、日当たりは悪いがどうせ一日中いないし、休みも昼過ぎまで寝ているのだからと彼の部屋にし、テレビもそこに置き、深夜でも休日でも、彼が好きだけ見ることができるようにした。

そうしたことで子供達は、休日の夕方はその部屋で父親と一緒に、テレビのアニメーション番組などを見る事ができた。

連続して起きた事故

しかし、そういう平和で平凡な日々は長くは続かなかった。引越して転校したその年の一学期が終わった夏休

みの間に、続けて二回次男が事故に遭ったのである。

一度目は自転車に乗って道路を横断しようとして、通り掛かった自動車に触れて転倒した交通事故。夫には、詳しいことは話さず、今日車におぶつかった転んだが、病院で検査してもらったなんでもなかったから、という程度の言い方にとどめた。前例のこともあり、電話しても無駄だと分かっていたし、仮に彼が来たとしても、大して役に立たないことも分かっていたからである。

その事故がやつと一段落した頃に、幼稚園のクラスの友達を訪ねて（どうしてそんなことをしたのか解らないが）団地の階段から二階のひさしに出て誰かに手をふっていたという。そこから落下して大怪我をしたのである。

あと三十センチ横にずれていたら、下はコンクリートだった。落ちたところ、少し湿った日陰の土の上だったため骨折はせずにすんだ。が、顔から肩、腕、太腿と血だらけになって倒れ

たらしい。

それを目撃して、すぐに電話してくれた同じ幼稚園のお母さんのおかげで、早く駆けつけることができた。

その時隣に住んでいた人が、「私の車を使って病院へつれていきなさい」と言ってくれたので手当てが素早くできたのである。

目撃した人の話をあとで聞いたら、どん、と一気に落ちたのではなく、側壁をズルズルすべるように落ちていったのだそう。

「もしも、あれがドーンと落ちとったら、いまごろは……」と言われ、鳥肌がたつた。

次男は身が軽く、足も早く、チョコマカする子で怪我の絶えない子であったが、それでもこの時期のこの連続事故は実にショックであり、悲しかった。

どうしてこの子だけがこのように何回も何回も怪我をするのだろうと不思議な気がした。が、夫に事故の詳細を話す気にはならなかった。

なにが起きてもなんの助けにもならぬ夫のことは、T市にいたときの出来事で十分解っていたからである。

子供が事故に遭ったり、怪我をした、あるいは病気をしたりしても、相談相手にならず、まして頼りにはならないなら、どうして一緒にいる必要があるだろうか。

彼は給料をもらって帰り、妻子を養ってさえいればそれで事足りると思っていたのだろうか。仕事をして給料を

もらって帰ることだけが男の責任なのだと考えていたのだろうか。

ほっておいても一人で物事を処理する気の強い女だから、子供の事は任せにおいて口出しはするまい、と決めたかかっていたのであろうか。

空虚な、形だけの家庭でも維持してゆけるならば、セックスレス妻でも我慢して暮らしていこうと思っていたのだろうか。

それでいいと思っていたのだろうか。



私たちの、会話のない関係を敢えて変えようという気持ちは私にはなくなっており、関心は子供たちの成長と、自分自身の仕事への復帰であった。

離婚を決意

その夏休みも終わりの頃だったか、あるいはもう九月に入っていた頃だろうか、残暑の厳しいある日の夕方、私はアパートのひさしの下（二階の外廊下が一階のひさしになっていた）で、暮れていく町の風景をぼんやりながめていた。なぜかそのときに着ていたTシャツとジーンズのことさえ記憶している。

開けておいた台所の窓から、FM大阪のDJの声と音楽がずっと聞こえていた。いつもFM大阪の音楽を流せばなしにして台所仕事をするのがその頃の私の習慣だった。

ガーシュインの「サマertime」が聞こえてきた。胸が締めつけられるようだった。

「サマータイム」は子守歌だ。子供を寝かしつける母親の歌だ。

そのとき決心した。

別れよう。

別れて母と子だけになって生活しよう。生活資金は私が働けば何とかかなる。それでも、いまの生活と実態は何も変わらないではないか。今は結婚している形ではあるが、ひとりで子供二人をかかえているのと同じではないか。

相談にのってくれる相手がいるわけじゃなし、力になってくれる人がいるわけじゃなし、困ったときは他人様が助けてくれる。本来は夫が担ってくれはるはずのそのような役割を、彼は果たそうとする様子はまったく見えない。「君は何でもできるから」と。

その姿勢は何も変わらない。一緒にいる必要があるのか。

いろいろな思いがどつと押し寄せてきた。

大阪へ来てからの五年半がフラッシュバックで流れた。

積み上げて来た危うい積み木が一気に崩れた。その積み木に最後の一突きをくれたのは彼の、酔っ払っての一言だった。この事はいままで誰にも話したことがない。あまりにもなさけない話だからだ。

その二、三日前で休日の夜だった。子供二人を側に置いて一緒にテレビを見ていた彼が一杯機嫌の酔眼朦朧とした状態で言った。

「おい見てみる、すげえオッパイだろう」

八歳と五歳の子供にである。私はその声を聞いただけで、テレビにいったい何が映し出されていたのかは知らなかったが、この人を「二人の子の父親」として一緒に暮らすのはこれでやめよう、と即座に思った。

どのように話をきりだすか。協議離婚で円満に別れる為には、どうするのが一番いいか。

時間はたつぷりあったので一人で考え続けた。

その年の秋が深まったある休日の夕

方、彼が晩酌を始めない前のわずかな隙を狙い、子供たちがいないのを確かめて話した。

まず、私達はこれ以上一緒に暮らす意味はもうないと思うので、「別居」しよう、と。

お互いまだ四十代に入ったばかりであり、人生の後半をやり直す時間的ゆとりがある内に別れようと(ちなみに、私は四十二歳、彼は四十歳だった)。

子供たちは、私が責任をもって成人するまで働いて育てるからと。

私には帰るべき家も、頼るべき親もないことを結婚の時から承知しているはずだから、私と子供が暮らす場所がどこであれ次男が成人するまでの保障として、家賃五万円を毎月払ってほしいと(この頃その町の家賃相場はそれくらいだったからである。後日、東京圏内に更に引越すことになるのはこの時点では夢にも思わなかった)。

その他の生活費は、子供たちの将来の学費も含めて、私が働いて得るから何も要求しないことを約束すること

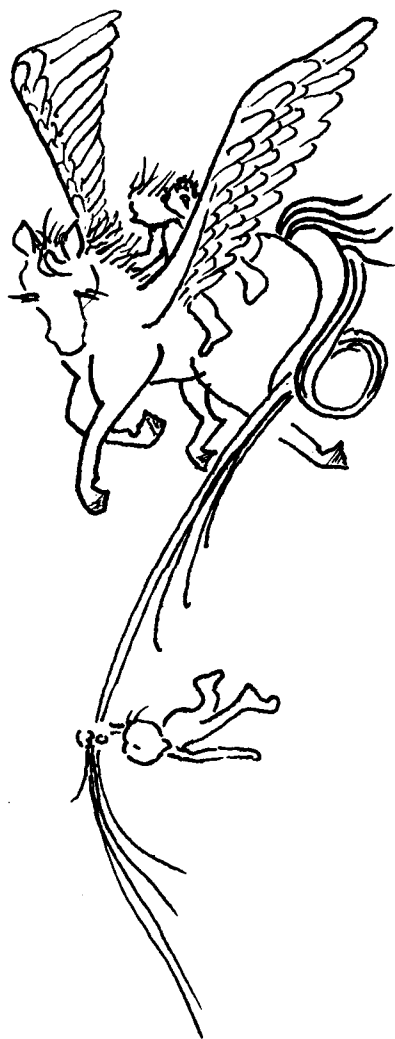
(いろいろ要求すると別れることに同意しないかも知れないという恐れがあった)。

それから、細々と貯めた手もとの三十万円は子供との当座の生活費として貰うこと。

子供たちが父に会いたい時はいつでも会いに来させること。

おおむねそんな話を私からした。

私が話すあいだ、彼は黙って聞いていた。



「そこまで考えて言うなら、反対してもむだだろうな」と言っただけである。そして「別居」にあっさり同意した。まったく二人だけで話し合い、決めたことである。

彼はその時点で、彼の母親(父親はその年の三年ほど前に亡くなっていた)と、弟夫婦が身内として首都圏にいたが、敢えて我々の別居のことを話しもしなかった。何となく疎遠になっていた、電話することもほとんどなかつた。

彼は私が本気で離婚を考えているとは思ってもみなかったようだった。一時的別居にすぎないと思いこんでいたようだった。それゆえ、あっさり同意したのではないか。

いずれ生活費に困って泣きついてくることになるだろう。「別居」も解消するだろう。四十代の女に簡単に職が見つかるわけではない。

そのように思っていたのではないか。

「別居」という現実に対する甘い見込みがあったのではないか。また、子連れの女が生活を維持するだけの収入を得るのが、困難であることも見越していたのではないか。

ともかくも、私の申し出には「いやだ」とも言わず、反対もしなかったことは事実である。

彼もまた、私と生活を共にしていることに飽きていたのかもしれない。妻子を抱えていることに疲れていたのかもしれない。

「——かもしれない、かもしれない」の連続である。

今も彼があの時どのように思い、「別居」にあんなにもあつさり同意したのか、私には解らない。

私達は、互いに心の裡を忌憚なく話し合うことをしなかった。

が、そういうことができる夫婦がどれほど現実にあるだろうか？

日々の生活についてや、子供のことや、身内のあれこれやうわさ話などは話すかも知れない。しかし、今私が何

を思い、何をどのように感じているか、ありのまま配偶者にぶつけて、本音で話し合える人達がどれほどいるだろうか？

この年の十二月、四畳半二つ・二畳ほどの小さい台所・ユニットバスというこじんまりしたアパートを見つけて契約した。

ともかく別れへの第一歩はこのようにして踏み出した。

明けて一九八三年一月中旬、大寒のさなかのカーンと音が出そうなほどに晴れたった日、彼が出勤し、子供たちが学校に出かけたあと、運送業者の四トン車一台に母と子の荷物、子供の自転車二台を積んで、かつて会社に転居願ひまで提出して強引に移ったその杜宅を出た。

この日の為に準備していた期間、子供たちに父親と別れることをどのように説明したか、また私がどのようにして仕事にありつき、子供たちとの生活を維持していったかなどに触れている

と、くだくだしくなるのでここでは省略しておきたい。

まだ幼稚園に通っていた次男を、道順も変わったので三月の卒園式まで毎日送り迎えをした。

小学校二年生だった長男は教えられた道順通りにちゃんとその引越した小さなアパートに帰ってきた。

こうして母子三人の暮らしが始まった。

私にとっては、一九六八年秋から一九八二年暮れまでの、十四年間の短い結婚生活であった。

法律上の手続きは一九八三年四月、協議離婚届を提出して完了した。

付記

ここまで読んで下さった「わいふ」の皆様には感謝いたします。

今年、長男は二十五歳、次男は二十歳、私は六十歳になりました。

また、別れた夫はその後再婚せず、五年前五十三歳で亡くなりました。

(え・橋本美智子)

今日も病院に銃弾の雨が降る

クルディスタン
はちやめちや
医療奮闘記

鈴木 崇生 著



鈴木 崇生著
亜紀書房
本体1800円+税

東京都品川区 佐藤ゆかり

「悲慘を通り越し、ハチャメチャ」。
赤十字からの派遣で内紛と経済封鎖
が続くクルディスタン（北イラク）
に渡った麻酔医の、二年に渡る医療
活動と日常が綴られた本書を読ん
で、そう思った。

クルディスタンの病院に運ばれて
くるのは地雷で手足を飛ばされた子
供や銃弾の犠牲者たち。息も絶え絶
えの重症患者ばかりだが、医療器具

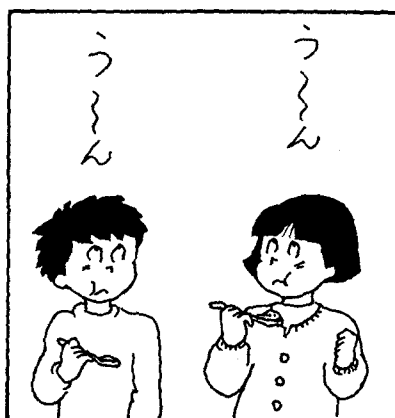
や薬が足りず、治療がままならな
い。最初から、ないわけではない。
経済封鎖が続くこの国では、誰もが
今日の暮らしを支えるのに精一杯。
救援医療物資は病院に着いたとたん
に盗まれ、ヤミ売買に流れる。残っ
ているのは、停電が日常茶飯のクル
ディスタンでは使えないハイテク機
器だけ。高額な救援物資が病院に鎮
座するなか、医師や患者はガゼや
薬を街から買ってくるありさま。著
者も汚れた医療器具を使い回しなが
ら、現地医師に麻酔の指導を行う。
期限切れの薬も使う。

当然、死者は多い。毎日、多くの
人が病院から墓へ移る。だが、ここ
は「死」が日常の国だ。死にも銃声
にも慣れている医師たちは、死体を
横目に息する患者に向かう。

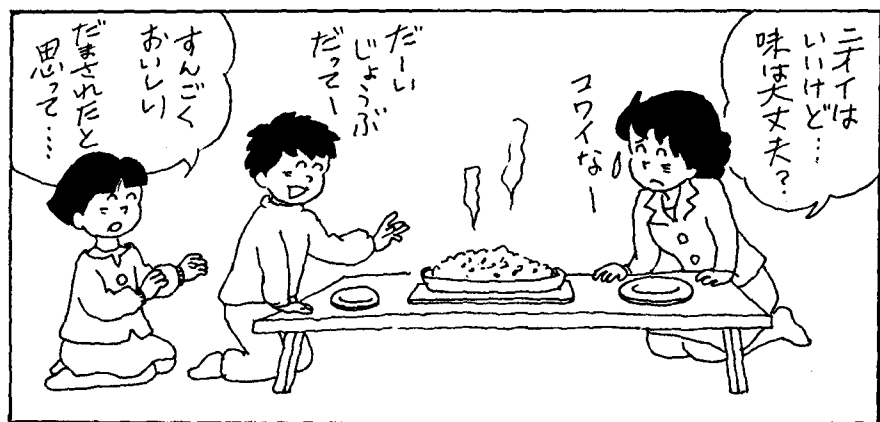
慣れているのは医師だけではない。
銃弾飛び交うなか、酒を酌み交
わし、雑談を楽しむ人々（イスラム
教徒でも飲む人は飲むらしい）。流
れ弾の恐怖をモノともせず、暑い夜
を屋根の上で過ごす人も少なくない。
刹那的と言えなくもないが、その
様子はどこことなくのどか。何とも
おかしくて不思議な紛争地の人々
に、人間の逞しさを感じる。

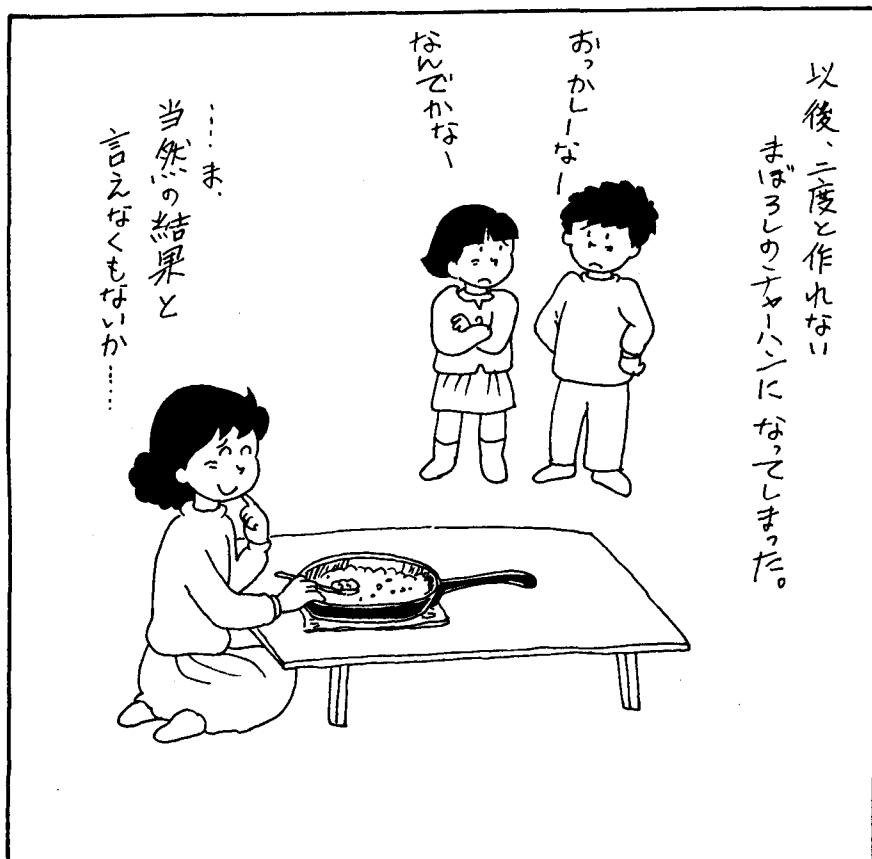
同時に、著者が感じているのと同
じ怒りが込み上げてくる。何はなく
ても兵器を買うお金だけはある紛争
地。自らが売った武器によって破壊
された国を助けるため、援助の手を
差し伸べる先進国。「兵器がなければ
死者はでない」。著者のこの当然
すぎる叫びは、いつになったら武器
輸出に届くのだろうか。

これが 子供の生きる道 栗田 光









子育てフォーラム

NMSのページ



姉妹愛

東京都練馬区 宮本康子(29歳)

四歳になった長女あさこは、よく大人に、「あーちゃんは誰が好き?」と、パパかな、ママかな?というような意図の質問をされる度、「なっちゃん!!」と妹の名を挙げる。いつもいつもとはいかないが、よく面倒を見てくれているとは日々感じている。

言葉を話さない二女が、「アーヤーン」とあさこを呼ぶらしい声を発すると、何はともあれ、「何、何、どしたの?」とほとんどの場合歩み寄る。一

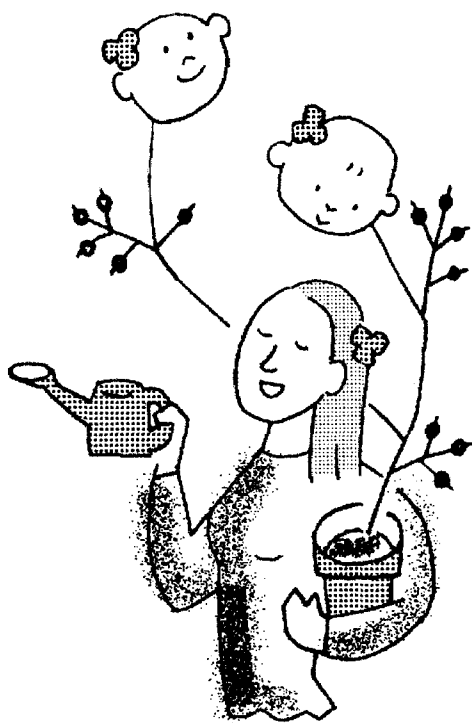
歳二カ月の二女は、「ジージー」「ママ!」「イテー」など、全く意味を持たない言葉を繰り返すのみだが、「乗りたいの?」「アメ欲しいの?」「どこ行きたいの?」など調子良く答えてもらい、何があっても姉の手を引っ張って行く。

先日も夜の十時過ぎに、一本橋こちよこちよをせがまれ、眠い目をこすり、アクビを何度もかみ殺して、永遠に続く要求に堪えていたのは私ではなくあさこ。

そんなあさこが最近寝しなに私と二人でしている事が、「想像ゲーム」。目をつむり、お花畑や遊園地など頭の中に思い描いた風景で、好きなように遊

ぶ事を口にする……というイメージトレーニングのような事をして、眠りに入り易くしているだけなのだが、その状況に居るのはいつも「あーちゃんとママ」。「なっちゃん?」「あーちゃんとママ」。「まだママのお腹の中に居るのよ」と言う。もしかして本心は妹がうつつとしいのかしら……と思っていた矢先だ。夕食の手伝いで、ごぼうや人参、大根などの皮むきをしていたあさこの横で、いつものように妹が、何度注意されても邪魔をし、ちよっかいを出し続け、いい加減頭にきていただろうあさこが「やめてって言うてんのー!!」と一撃をくらわした。なっこは泣いたが私はあさこを責めなかった。それど

ころか私はいつも、この可愛い天使で
ありながらときに悪魔に化する二女
に、相当頭に来る事が多々ある。あさ
この忍耐力に敬意をはらっていたのだ
から。なつこは私にとりあってもらえ
ず大泣きし、やがて眠ってしまった
が、悪夢にうなされていた様子。
それはそれとして、一歳児という存
在は、憎めない所が本当に憎らしい。



あのキラキラ光る目で見られると、ヤ
ンチャ坊主もお菓子やさし出し、茶髪
の兄ちゃんも困惑する始末。「もう!!」
と怒り爆発しても抱き締めて押し倒し
て、ぐちゃぐちゃにしてしまいたくな
る。何もかも許してしまえる威力があ
るもの。

もうあさこにはそれは無いが、なつ
ちゃん、あーちゃんがいて、幸せね。

あーちゃん、なつちゃんがいて、楽し
いよね。ママと一対一じゃ、逃げ場が
ないもんね、お互いに。

輝け、我が息子!

東京都調布市 **グリーンアスパラ**(41歳)

今、高校一年生の息子は第一志望校
の工業高校自動車科の定時制に通学し
ています。

朝から夕方までガソリンスタンドで
バイトをし、その後通学しています。
車が大好きな本人は、バイトも授業も
楽しそうです。

しかし、こうなるまでにはいろいろい
なことがありました。

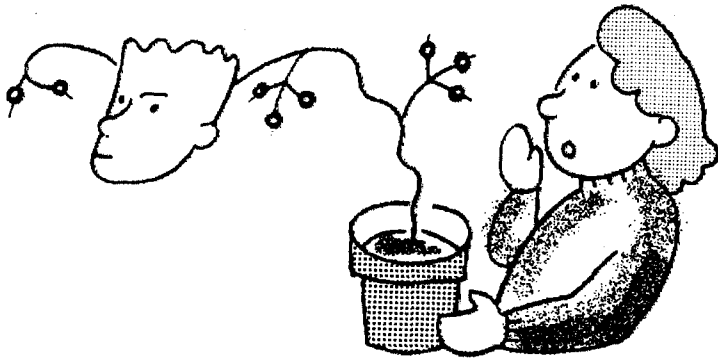
中学三年生の頃の息子は、他の子よ
り背丈も小さく、まだまだかわいさの
残る男の子でした。

それが、中学三年生の夏休みが終わ
った頃から、髪は少し茶色がかって
くるし、なんとなく怠惰な様子。塾に行

ったある日の夜、「おかあちゃん、今日オレ家出するから」と電話。「はっ？ どこにいるの？」なんで家出するの？」と聞くと「〇〇団地の公園にいる。ひとりで考えたい事がある」とのこと。「そんな所にいたら通報されておまわりさんに連れて行かれるよ。夜中に警察署まで迎えに行くのもイヤだし、考え事したいなら家の自分の部屋で朝まで考え事すればいいんだから、早く帰っておいで」と言うとい時間後に何くわぬ顔で帰宅。

その後、塾からの帰宅がいつもより遅いので塾に電話してみると若い先生が出て「塾の休憩時間に近くのコンビニでカメラを万引きして捕まり、今塾長が行っています」とのこと。慌てて父親が駆け付け謝罪。塾に行き謝罪。

反省をしている様子なので解ったのかと思いきや、数カ月後に今度は駅ビルの菓子パン二個万引き。店長から電話が入り、「反省もしている様だし、お金を持っていたので代金は払ってもりました。今から帰らせます」との



こと。翌日、父親と息子とで菓子折を持って謝罪。

「ただ何となく、万引きをしてしまった」という息子にとって、「他人に頭を下げている父親の姿」は、心痛んだようで、さすがにその後は万引きはしなくなりました。

数カ月後、クラスのお母さんから電話で「うちの学校に万引きの集団グループがあるというウワサをPTAの執行部から言われたんだけど、ウチの子の名前もあるし、お宅の子の名前もあるのよ。実体を知るために名前の上がつている親子で話し合いをするから来てくれる？」とのこと。息子に話すと、「オレは絶対に違う」とのこと。「違うなら違うとハッキリさせた方が良いでしょ」と言い、取りあえず一緒に会場へ。

男子十五人ほど、父母二十人ほど集まっていました。話し合ううちに男子のほとんどは万引き経験があるものの、各自親にバレていて反省の様子。集団でやっている事実はなく、息子は

無関係と解り一安心。

そんなこんなうちに、勉強は嫌いだけど、学校は好きだった息子が登校を渋るようになり、連日の遅刻。休みはしないものの、益々様子が変。

よくよく話を聞いてみると、ガラスを割った、ドアを壊した、タバコを吸っていたなどが校内で多々あるとのこと。「本当にその子が犯人なのか？なぜそんなことが起きたのか？何も考えずに勝手に犯人を決め込んでいる。生徒の話を聞くかもしれない先生達の一方的なやり方に納得できない」と言う息子に「違うならハッキリ言えばいいじゃない」と言う、「言おうとしたって、オレ達の話は聞いてくれないんだよ。頭くるんだよな」とのこと。

このことを担任に言う、「授業は各教科ごとあり、放課後は部活もあり、充分な話し合いの時間が取れていないのは事実。今後充分気を付けます」と言われたものの、先生と生徒の間に出来た溝はそう簡単には埋まらない。

そうこうしているうちに、受験校を

決める時期。成績が低空飛行している息子は「勉強は嫌いだから、進学しない」「じゃあ就職？ 何の仕事がしたいの？」「何でもいいよ」「何でもいいってことはないでしょう。好きな事すればいいじゃない？」「好きな事なんてないよ」「じゃあ、好きな事探してみたら？」。私にそう言われて考えてはみるものの、なんとも出口のない様子。私も「この子は何が好きなのかなあ」と考えてみると、車が好きだったことに思いあたりました。家族で車で出掛けると、前後や対向車の車種、種類を、車好きの父親と喋りまくっていたのです。「車の学校なんてどう？」と聞いてみると「そんな学校あるの？」「工業高校の自動車科があるよ。説明会に行ってみたら？」「普通の勉強は嫌いだけど、それなら良いかもしれない」と父親と数校の説明会へ。

家から徒歩で行ける学校が気に入る「あそこの工業高校の自動車科に行きたい」と気持ちは決まったものの、成

績もやバイが、自動車科だけが倍率が高い。「全日制が落ちたら、定時制でも行きたい」と本人の意思を確認。

全日制は不合格。定時制に合格したとたん、自分でガソリンスタンドのアルバイトを決めてきて翌日から出勤。

アルバイト先の若き先輩達は、車好きばかりで、そんな先輩達との話が何より楽しそう。しかし、仕事となると親切に教えてくれる人、上司のいる前だけ働く人、何やっても怒る人、イイカゲンな奴などなど、いろんな先輩あり。

また、お客さんも、偉そうにしている人、ありがとうと声をかけてくれる人。さまざまな人に出会うことが、息子を少し大人にしてくれました。

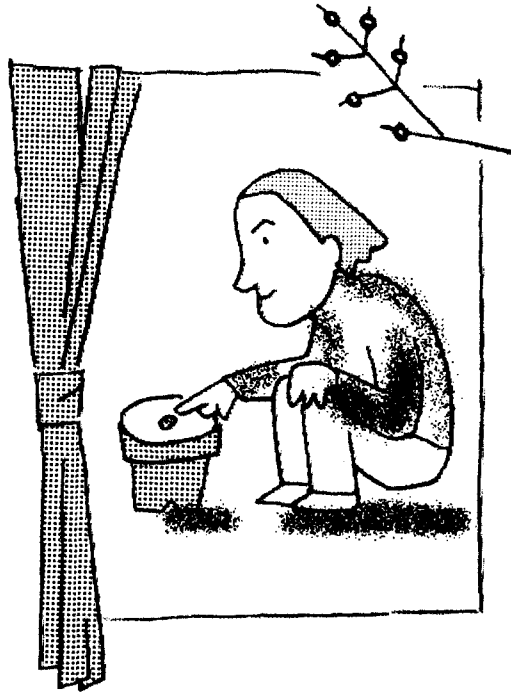
初給料の日、帰宅するなり「家の時計とタイムカードの時間と違うんだよ。一分でも遅刻すると三十分の給料引かれるんだよ。やべえよなあ。でも十万近く貰ったんだよ。すごいでしょう？」「あんたが毎日がんばって一生懸命働いて稼いだお金なんだから、大

切に使うんだよ」と言うのと部屋中にお札を並べながら、「もつたいなくて使えないよ。ゲームセンターなんか絶対に行かない。免許取る金とバイク買う金は毎月ちゃんと預金するんだ」と御満悦。翌日、父親と郵便局に行き、口座を作ってきました。

数日後、「これ、手紙」と差し出したメモのような紙には「いつもあたりまえの様にごはんがあることに感謝している。お父さんとお母さんがボクをととても大切に思ってくれていることも知った。お金の大切さも知った。これからも心配かけますが、よろしくお願いします。父と母が自分の誇りです」と書いてありました。

「学校では作文を三行しか書かない子が、こんなもん書いてきたよ」とダンナに渡しながら、ティッシュで鼻チーンをしていた私です。

先日、お世話になった塾の先生にご挨拶に行ったところ「その後、どうしているのかなと思って息子さんの友達に聞いたら、アイツすごく楽しそうに



仕事しているし、学校もおもしろそうなんだよ。いいなあ、うらやましいよ。オレ達もアイツの学校に行きたかったな、と言っていたんですよ」と笑っておられました。

後日、以前に万引きグループ?と疑いのかけられた子のお母さんにお会いし、その後どうしています?と聞かれ

ました。経緯を話したところ、「高校が楽しいなんて良いですね。ウチはやつと入学させてもらった学校なのに、つまらないって言って、ここどころ登校していないんですよ。でも、やりたいこととか、好きなこととか考えたことなかったです。もう一度、考えてみないといけないですね」とおっしゃ

っていました。

中学時代は、朝起こすことから始まり、「ホラ○分だよ、早く行かないとまた遅刻だよ」の連発。学校へ送り出すまで付きっきりの状態だったのが、今では毎朝自分でさっさと起き、仕事に出かけます。

自分がやらなければいけない仕事を与えられていること、がんばった事を認めてくれる人がいること、その努力がお金になること、そのお金の貴重さがわかったこと。仕事を通じて得たことはたくさんありました。

小さい頃から、スケボーや自転車の分解組み立てが得意だった息子は、学校での実技はお手のもの。「手付きが良いね」と先生に誉められたと自慢。小学校、中学校と成績で誉められたことのない息子が、高校の先生の一言で自信を取り戻してゆくのが手に取るように解ります。

大人から見ると高校三年間は短いですが、本人にとって高校三年間が楽しい

かどうかは一生を左右するものです。世間からみたら「オチコボレ」？と見られる進路かもしれませんが、本人は今一番輝いています。

応援団は、家族です。

息子の座右の銘は、「明日死ぬかもしれない。今日を楽しく」です。

輝け、我が息子！

保育園、幼稚園で育つても

茨城県牛久市

小山佳世子

私の二人の娘たちは幼稚園三年保育育ちです。次女は今年の四月に入園し、私の心配をよそに楽しく通っています。

私は子どもの生まれる前は、仕事を辞めて子どもと楽しくやっていこう、育児雑誌のきれいなママのようにと思っていました。

でも子育ては思っていた以上に大変で、なかなか泣きやまない長女と一緒に泣いていました。毎日毎日同じこと

の繰り返し、確かに楽しいこともありましたがつらい時は（この子は私に怒られてばかりいるより、広い園庭を走りまわったりたくさんお絵描きしていた方が伸び伸びと育つだろう）と思っただけです。しかし私は主婦で保育園に入れることはできませんでした。幼稚園までは私が育てるのが当然だと思っていました。

小学校一年の長女の友だちを見ると、保育園で育った子は活発のような気がします。オシメが取れるのも早いです、よく何でも食べるし、ひとりでするし……。

だからと言って保育園で育った子はすべていい子かというとも思えません。

Sちゃんはお3歳から保育園に入りました。とても元気がよいのですが、乱暴ですぐにけんかになり言うこともききません。Sちゃんのお母さんは、「共働きで忙しいから、自分のことは自分で解決するように言っていた」と話していました。保育園で過ごしても

家に帰った時、お休みの時は母親が育てていますから、子どもの育ちは母親の影響が大きいと思います。

でも今の幼稚園は子どもたちを遊ばせるというよりも「水泳、英語、音楽教育をやります」とおけいこことを園の特徴にしているようです。子どもにいろいろな体験をさせることは大切だと思いますが、おけいこ、お勉強をする幼稚園でどのくらい子どもの個性が伸びるのか不安です。

子どもが持っている個性、可能性（生きる力）をそのまままっすぐ伸ばしてあげれば母親がひとりです。育てても、いい子に育つと思います。今の社会、生まれた時から競争で親がしっかりと信念を持っていないと流されて、その子の個性は切られてしまいます。

長女は生活科の授業に使うためコログとバツを捕まえ、飼育箱で育てていました。しばらくして「ケンカをしていますから、分けてくれ」と泣いてきました。授業で使わなくなるとすぐに外に逃がしていました。私は長女の

優しさを感じとても嬉しく、そういうところを私が認めて伸ばしてあげたいと思いました。

二人ともいい子の時ばかりではありませんが、時々二人の優しさや強さを見つけます。三歳まで私の側で怒られてばかりいた分、今は二人の気持ちを大切にし自由にさせてあげたいと思っています。

現代は母親がひとりで子育てするの、ストレスがたまり本当に大変です。そんな中で子どもを育てるより、母親がゆつたりとした気持ちを持つために、子どもと離れることも必要だと思います。

私は子どもは親の思うようには育たないものだとかつくづく感じています。しかし二人とも牛久の自然の中でたくさん走りまわり、群れになって遊び、少しずつたくましくなりました。

その子にあった子育てをすれば母の手でも伸び伸びと育ちます。そう教えて自信を持たせてくれる助けが必要なの時代だと思います。

専門の生命保険コンサルタントを派遣いたします。

(東京都内・近郊のみ)

お一人ではチョット心細い、
でも何人かいれば心強いあなた…

お友達・職場の仲間などなたでも結構です。

3、4人でも何人でも

あなたのお宅に、あなたの職場に、お集まりください。

生命保険の専門家が皆さんの疑問にお応えいたします。

くわしくは「わいふ」あて 電話で資料請求してください

わいふ指定代理店 東京海上火災保険株式会社 東京海上あんしん生命保険㈱

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771

二番目の子どもが
やってきた ⑤

横浜市戸塚区 杉田みほ

十月に入っても夏のような日が続いていたのに、急に冷え込みが厳しくなり、野歩（二歳五カ月）は鼻水をたらして咳こんでいる。一週間たっても治らず、夫や私も何となく調子が悪くなってきた。風邪がうつったかな？ あらあら藍まで鼻水が……と言っていたら、ついに熱をだしました。生後九カ月、初めての発熱です。

一日目。三十九度を超えるときすがに目がとろんとしているけれど、野歩を見て笑ったりもして機嫌は良いし、普段以上には眠りません。そういえば、上の野歩が初めて熱をだしたのも同じくらいの頃。あの時に比べたら、たいして苦しそうではなく、額を冷やそうとしてもすぐに外してしまいます。

四十度くらいまでの熱で体力もありそうなら、長く続かないかぎりあまり心配もいらなないとわかってきたので、医者に行かずに見守ることにしました。冷たい風の中、風邪をひいた三人で出かける気にはならないし、付き添って行っただけでも野歩はお医者さんを見ると大泣きするし。足を温め、母乳とりんごジュースを飲ませ、静かに寝かせて様子を見ることに。

二日目。藍の体温は、昼間少し下がっていたけれど、夕方からまた高くなってきました。静かに寝かせようとしているのに、すぐに野歩がかまうので眠れません。私自身も頭が重たくて、いらだつてきます。

病気の時くらい泣けば抱いてやりたし、水分補給も頻繁にしなければと、藍に手をかければかけるほど、野歩は私の手を煩わせようとします。鼻水を拭いてやろうとすれば逃げ回る。藍におっぱいをあげていると「おしっ

こ、おしっこー」、藍の眠っているうちに食事にしようとしているのに起こしに行く……。怒ったって空回り、わかつちやいるけど怒つちやう！ 今までは言わなかった言葉も口走ってしまいました。

「ばかっ！」

三日目は日曜日。夫が休みなので、昨日の晩から、野歩を連れて実家へ遊びに行ってくれました。とても静かだったので、空腹の時以外、藍はほとんど眠っていました。やっぱり、本当は眠かったのね。

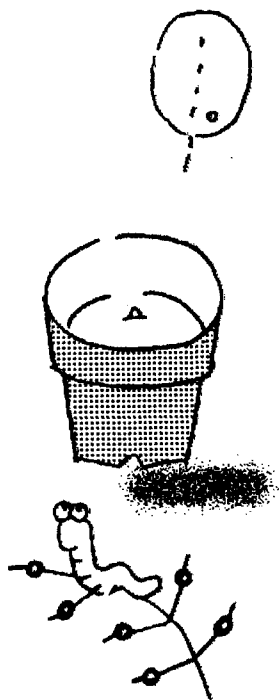
藍と並んで横になっていると、とても穏やかな気持ちに充たされます。野歩にもこんなふうに優しい目を向けていたのに、この頃はちよつと忘れていたなあ。他の大人に甘やかされたり、反抗したり後追ひしたりすると、つい意地になって厳しくしすぎてしまった。ものわかりがよくて器用なものだから、まだ二歳なのに、野歩には大人

びたことを要求しすぎてゐるかなあ。

藍の様子はだいたいぶ落ち着いて、夜になつても三十八度くらい。このまま上がらなければ、もう大丈夫でしょう。

四日目。藍の熱が下がり、お腹から始まつてあちこちに赤い発疹がでてきました。どうやら突発性発疹だったようで、一安心。

この三日間、私が藍に手をかけていたし、外に遊びにも行かれなくて、野歩は欲求不満になつてゐるだろう。藍の授乳間隔も短くなつたので、寝ている間に野歩と楽しいことをしよう



と思うのに、相変わらず野歩は騒いで藍を起こしてしまふ。また言つてしまった。

「ばっかっ！」

それにしても、求められるままに抱いたりおっぱいをやつたりしていると本当に大変。一人なら、泣かせておくより要求に応じたほうが楽なところもあるけれど、子どもが二人いたらもうお手あげ。藍に応えようとしていたら、時間はメチャメチャ、野歩はやきもち焼いて甘える、事は運ばず、私はイライラ。すっかり悪循環に陥つてし

まいりました。

「藍ちゃん、熱が出て苦しいから、ご飯食べられなくて、おっぱいたくさん飲まなきゃならないんだよ」「熱があるから、すぐに眠くなつて泣きたくなつちゃうんだよ」。野歩は私の言っていることをだいたい理解しているようですが、それでも何かと手こずらせてくれます。もしも、上の子を「自分が王様」と思わせるように育ててしまつていたら、年の近い子を二人育てるのは、そりやもう悲惨なことでしょう。病氣の時はやむを得ないとはいえ、やつぱり「泣いたらだっこ・おっぱい」を習慣にしてしまふと大変だな、と実感したのでした。

さて、藍の具合はよくなつたけれど、なんだか野歩が前よりもつと甘えん坊になつたよう……。目下の悩みは、私がトイレやお風呂に入ると、野歩が追いかけてきて泣きわめくこと。以前は平気で待つていたし、今だつて一人でお友達の家で遊んでいられるのに、なぜか最近トイレやお風呂の前で、

「ママ、出てきてよ!」と泣くのです。

そもそもは半年ほど前、トイレに慣らそうと、私が「一緒に来る?」と誘ったことに始まったようです。以来、

トイレには必ずついてくるようになります、私が鍵をかけてしまうと、「野歩も入る」と騒ぐように。そして近頃では、夫がいても「ママ出てきて!」。

最初はふざけているのかと思つたくらいですが、汗と涙でびっしょりになるほど、声を張り上げて泣いています。

お風呂でもそう。掃除をする間ですえ、お風呂場の扉を開けて、野歩と話のできる状態にしておかないと泣きわめきます。この間までは、「おかあさんといっしょ」のビデオを見せておけば、藍をお風呂に入れている間など、一人で待つていられたのですが。

藍も、ビデオをつけておけばその場で待つていたのですが、野歩が私を追つてきて泣いていると、ついてきて一緒に泣きます。トイレの前は玄関だし、すぐそばに指をはさみそうなドアもあるので、私はあわてて出ることになり

ます。藍一人なら、トイレの前に来られないようにドアを閉めておけるし、野歩一人なら、泣いても放つておけるのですが。

それに、この間夫がいるからとビデオもつけずに藍を遊ばせておいて、野歩とお風呂に入っていたら……夫はすっかり眠り込んで藍が泣き続けていたということがありました。それ以来、私がお風呂場や洗面所に行くと、あわてて追いかけてくるようになってしまいました。

トイレもお風呂も、毎日用のあるところなので、遊んで待つていてもらえるように試行錯誤しているのですが、今のところどうもうまくいきません。野歩に話して聞かせ、泣かないように言つても「やだ」。いつまで続くことやら……。

赤ちゃんがえりで仕方ないのか、厳しくしすぎているからか、いつも一緒にいすぎたからか。今まであまりなかった後追いに、ちよつと揺れていきます。ついついいらだつてしまう反面、

「私がいないとダメ」なのが、嬉しく感じられることも。何となく夫とすれ違つてばかりの時など特に……。おつと、あぶない、あぶない! これだけは避けなくちゃと思つていたところには、はまっていきそう。

世間では「魔の二歳児」なんて言われるくらい、手をやくことの多い時期らしい。この程度なら楽なほうだろうとも思うけれど。

藍も、熱をだして甘やかしたからか、そういう時期なのか、寝る前に「びやあーっ」と泣いてみたり、夜中に起きて泣いたり。つかまりだちを始めてますます目を離せないし。

一人で過ごす時間がないと耐えられない私には、少々つらい時期。でも、野歩が「ばかっ!」を覚えてしまわないうちに、時々立ち止まって冷静な目で「うん、いい子達じゃん」と思い直しながら、実はいちばん楽しめるのかもしれないこの時期を過ごしていかなくつちや、と思つています。

(え・農谷川てるみ)

私の意見・

あなたの意見

少年法について

少年法改正の問題点

東京都世田谷区 山田仁美

最近もおやじ狩りの犠牲となり、片目を失明した歯科技工士の事件などを見てみると、いくら相手が少年とはいえ、やり場のない怒りが込み上げてく

る。報道している方も、「こんなことが許されていいんでしょうか？」と視聴者をあおる。そして今の「少年法」がバッシングされることになるのだ。

でも「ちょっと待って」と私は皆さんに言いたい。確かに、憤りは覚えるがその気持ちイコール厳罰化で問題は解決するのか？ 私も二八〇号の武口さんと同じ意見で、少なからず大人に全く責任がないとは言えないと思うし、むしろ私たち大人社会が彼らを作り出している気さえるのだ……。

子どもに責任をとらせる以前に、どうして人を殺したり、傷つけたりしても、何も感じない人間になってしまったのか？ その原因を、大人自身が真剣に考え直す時期にきていると思う。

今、少年法の改正がとりざたされているがその大まかな点は、検察官の関与と刑事罰の適用年齢の引下げという二つの流れがある。検察官を介入させ、難解な法律用語で厳しく追及したところで、何の反省にもつながらないまま罰を受けることになる。今の改正

論では要するに犯した罪だけを重視し、義務教育の段階の少年を刑務所に入れさえすればよいという「臭いものにはフタ」という考え方ではないか……。現に少年法が厳罰化しているアメリカなどでは少年犯罪は減っていないし、再犯率も日本より高いのだ。

私も、二八〇号の武口さんと同じく今まで少年事件にかかわってきた弁護士の方の話を聞くようになって、初めて今までの少年法の良い点もあることを知り、今の改正論が危険をはらんでいることを知った。

大切なことは、真実を明らかにし、事件を起こした少年が本当に「悪いことをした」とわからせることではないだろうか。そうした点をいえば、日本の少年法は「子どもの立ち直りを教育・援助する」という点では優れているし、それなりの実績を残してきている。

しかし、こうした実績もありながら、少年事件は非公開という原則から、その少年事件の背景、その後の処罰などについて社会は勿論、被害者に

も全く知らされないというのはどうだろう？ このわからないいづくめの少年法が、表面的な「改正論議」の発端になっているように思う。

プライバシーの公開の問題にしても、加害者より、被害者こそ守られなければならないと思う。加害者には、カウンセリングだ、精神鑑定だと大騒ぎするのに、いきすぎた報道などで傷ついている被害者はほったらかし……。その上被害者には、事件の真実も、加害者の処罰などについても一切

知らされないという現実こそ問題ではないか。法的・精神的ケアは被害者にこそ優先すべきであり、被害者の救済制度を確立することのほうが、今は急ぐ問題だと思う。

私にも八歳になる息子がいる。いつ、何時、被害者、あるいは加害者になるかもしれない。

少年法は、人ごとの問題ではない。

そういう気持ちで、目先のことや感情論、マスコミ報道に踊らされずに、今の「少年法改正」が本当にOKか、問



● 私 의견・あなた意見

い直してみて頂きたい。

「少年法」について

東京都小平市 鈴木紀美枝(38歳)

前号、前々号のお二人の意見の内容から、四つの点について書いてみます。

- ①「犯人」について
- ②犯罪報道のあり方について
- ③被害者救済はどうしたらよいか
- ④犯罪はどうしたら減るのか

まず確認しておきたいと思うことは、「加害者」に関してのことです。春菜さんは「犯罪者」「人殺し」、武口さんは「犯人」と書いていますが、あくまでも「容疑者」です。これまでも、いくつかの冤罪事件が、数十年もかかって逆転無罪になってきましたが、逮捕された段階で、まだ犯人ではありません。ここ数年、報道するときは氏名の次に「容疑者」をつけて呼ぶようになりました。

次に、この「容疑者」をどのように

報道したらよいか、考えたいと思います。春菜さんが「私が被害者の身内なら『こいつだ、こいつが犯人だ』ってマスコミの前にひきずり出して、テレビでも雑誌でもバシバシやってくれと言いたいところだ」というように、加害者の犯行やプライバシーを報道して「さらしもの」にすることで「制裁」を受けるべし、と思ってる人は多いでしょう。でも私は、「いい人」ぶる訳



ではなく、加害者（又は容疑者）の実名や顔など、全く興味がありません。事件によっては経過や背景を知りたいこともありすが、中世に広場で行った罪人の処刑のような「つるしあげ」を見て、うっ憤晴らしをするような気分にはならないのです。同じような人は回りにもいます。私は、少年だけでなく成人の場合も、実名、顔写真を報道する必要はないし、容疑者なら尚更

プライバシーを守るべきだと思います。仕事を失い、家族も息をひそめて暮らさなくてはいけないのでしょいか。我が子や家族が加害者の側に立った場合のことを想像したらどうでしょう。私の場合は、自分が「悪人」だと認識しているので、神戸の少年や凶悪事件の容疑者の側に立って考えることが多い気がします。ひとごとではないのです。

このようにマスコミ報道によって被害者や国民感情が満足されないのだとしたら、被害者は、どのように救済されたらよいのでしょうか。私は今年の初め、近くの公民館で連続講座「少年と少年法」を受講したのですが、その中で、日本初の被害者の実態調査の結果によると、被害者にとっていちばん嫌なのは、禿鷹のようなマスコミだということです。実際マスコミは、加害者だけでなく、被害者も餌食にしてプライバシーを暴かしてます。被害者や遺族の方の心情は私には測り知れませんが、「加害者には厳罰を」「自分の手で

殺してやりたい」と思う人もいる一方で、加害者が刑に服しても悲しみは癒されないのも事実だと思います。被害者や遺族に必要なのは心を回復するためのカウンセリングなのではないでしょうか。

最後に、武口さんも言及している「厳罰化すれば（少年）犯罪は減るのか」を考えたいと思います。やはり前述した講座で聞いたのですが、日本の刑務所や少年院で行われている刑罰は「労役」ですが、これは受刑者を苦しめるためではなく、社会復帰を目的としたものらしいのです。受刑者の抱えている問題を解決し、社会に戻るようには手助けしてあげるのです、日本の再犯率（出所後に犯罪を犯す比率）は、海外に比べてかなり低いそうです。再犯率が低く、犯罪率も低いということは、刑法や少年法がうまく機能しているということなのです。厳罰化する必要はないのです。

私たちは、「どうしたら犯罪が少なくなるのか」「いい社会になるのか」

という視点で「少年法」はどうあるべきかを考え、マスコミ報道、論調だけで判断しないで、真実を正しく知っていく必要があると思います。

受講した講座が本になり出版されました。荒木伸治編著『現代の少年と少年法』明石書店

子供だって人間

東京都北区 安村豊子(35歳)

二八〇号の武口敬子さんの意見の中で、「大阪の少年は、家庭に問題があったようで」というくだりが気になった。

私が見聞きした限りでは、それほど問題があるようには見受けられなかったし、また多少あったとしても「殺人」を犯すに値するほどの問題って何だろう？

日本人はストーカーにしても家庭内暴力にしても「個人の問題」で何でも片付けがちであるが、それはもはや今

の時代にあつては間違いであると思う。だいたいが少年法というのは、ずいぶん昔に造られてそのままだと聞く。

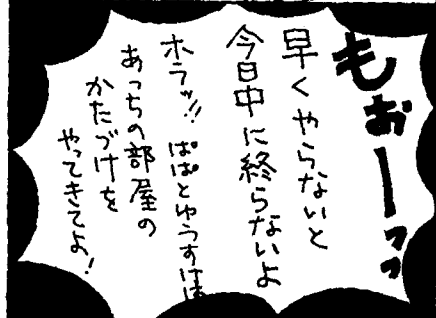
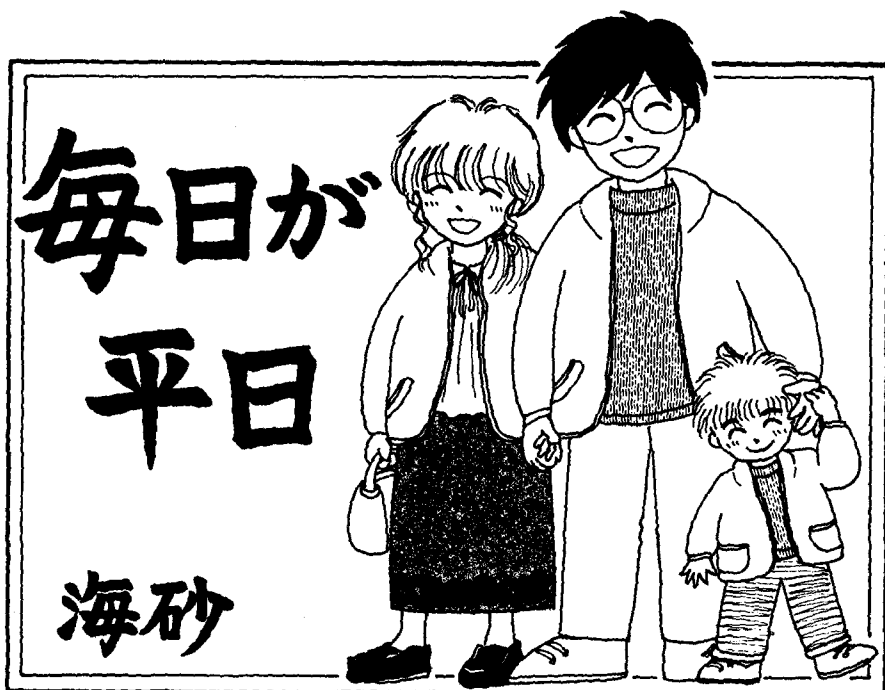
その頃は少年が凶悪犯罪を犯すなど、考えもしなかったであろう。はつきり言つて役人の怠慢である。

私は大阪の少年は「サイコパス（精神病質者）」だと思う。

「羊たちの沈黙」「セブン」等の映画にも登場する、恐怖や罪悪感なく、平然と犯罪を犯す人たち。少年の親が面会したときに「俺は、病気だと思うから」と自分でも言っていたという。また少年は、自分の年齢なら殺人を犯しても、まもなく出所できることも知っていた。「温かく見守る」なんて言っている場合ではないと思う。それでは被害者の人権はないに等しい。あまりにもむごい。

「少年だから」と罰しないと言うのであれば、結局は少年の人権を認めていないことになると思う。見直しはぜひ、必要である。

（え・弘法堂建二）





こんにちは「ともだち家族」



近山恵子著
風土社
本体1500円+税

いま日本で、高齢者問題と最も果敢に取り組む女性の一人である著者が、自分史にからめてこれからの高齢者の住まい方を語る。数奇な生い立ち、小西綾・駒尺喜美両女史との出会い……。臨床検査技師として働きながらシングルを通すが、母に屈折した気持ちを抱いたまま、その老後を担うことになる。母一人娘一人の関係の中での葛藤が、赤裸々に綴られている。

高齢者住宅を建設する会社、生活科学研究所に転職してからは、自分が運営するシニアハウスの中に母と共に住み、母娘関係が変わっていくさまが印象深い。福祉マンションから友だち村へと広がる構想の実践者だ。(早)

ブ

ツ

ク

情

不思議なレストラン

心病む人たちの街で暮らしたい
クッキングハウス物語



松浦幸子著
教育史料出版会
本体1500円+税

著者は精神科のソーシャルワーカーで、精神科単科病院で働いていた。長期入院している患者を、退院後どう地域に戻していくか。心病む人たちと、病院のなかではなく街のなかで心豊かに暮らしたいと、一九八七年十月に「クッキングハウス」を開いた。ここが、そのままの自分を受けとめてくれる所とわかると、心病む人たちはいそいそとやってきた。食事づくりを通して元氣になっていった。

五年後にレストランも始めた。心病む人たちの働く場であり、居場所であり、市民との交流の場にもなった。一人ひとりの生きる重みを感じさせる十年間の活動が書いてある。(高)

報

介護休業でいい仕事いい介護

家庭も自分も大切にするために



沖藤典子著
ミネルヴァ書房
本体2200円+税

夫の単身赴任中に、父親の介護や子育ての結果、心身の疲労に追い込まれて退職した著者が、これからは介護休業制度を利用して、いい介護をしながら働き続けられるようにしなければと語りかけています。いくつかの介護例は全く身につまされます。各種の統計資料や法律を解説し、深い洞察力をもって、高齢化社会においては介護休業制度が、どんなに大切かを気づかせてくれます。

高齢社会の到来により、肉親の介護はもとより、自分が介護を受けるかもしれない、例外のない介護問題です。事業主も働く人も、社会全体の意識改革が求められています。(小)

奪われし未来



シーア・コルボーン
ダイアン・ダマノスキ
ジョン・ピーターソン・マイヤーズ共著
長尾 力訳
翔泳社
本体1800円＋税

化学に詳しい人なら、本書に数多く出てくる化学物質についていつそう深刻に理解できるだろう。鳥や魚の名前に詳しい人なら、より具体的にコトの危険性を理解できるだろう。妊娠中や子供のいる人は、何をどう食べて生活すればよいのか、途方に暮れるだろう。不妊や育児、暴力や学力不振に悩む人には、その遠因が見つかるかもしれない。資本主義経済にもまれて業績を追求せざるをえない人は、良心の呵責を感じてほしい。

もつれにもつれて、ほどきようがないように思える現在の地球の実態を、丁寧に説明してくれる本。近い未来、無からまた地球が始まるのかも。(後)

家族のリストラクチュアリング

21世紀の夫婦・親子はどう生き残るか



山田昌弘著
新曜社
本体2000円＋税

「私が望むのは『家族はこうあるべき』というイデオロギーは脇においた形での議論である。なぜなら、『よりよい家族のあり方』は社会状況によって変化すると考えるからである」

社会学者である著者は、こうした観点に立ち、現在日本の家族形態が社会の変化に適応できなくなっていること、リストラクチュアリング（構造改革）が必要であることを説く。

夫が働き、妻は家事・育児を担う専業主婦という家族は、戦後経済の高度成長に合わせて作られた。先進国すべてが低成長に転じた今、大きく変わりつつあり、それを踏まえた政策が望まれる。未来の家族が見える一冊。(和)

伝記児童文学のあゆみ

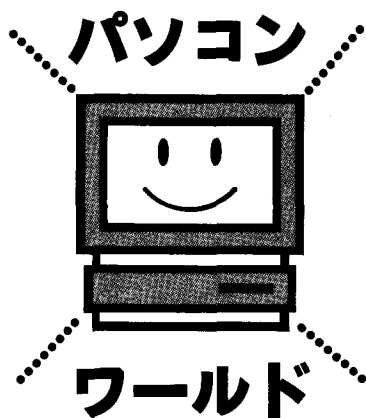
一八九一から一九四五年



勝尾金弥著
ミネルヴァ書房
本体3200円＋税

いつの世も子供は時のヒーローに憧れて育つものだが、考えてみれば最近では英雄とか偉人という言葉もあまり聞かれなくなった。この本は戦前に出た児童図書の中から「伝記」のジャンルをとり出して、その成立や変遷を多くの資料をもとにまとめたもの。

明治中頃から昭和にかけて有名出版社が、競って子供向けの伝記「偉人伝」を出版した。有名作家も執筆して大好評だったが、昭和十年頃から次第に戦争遂行の方向へと歪められていった。功罪はともかく、頁を繰る毎に歴史上の人物や挿絵が次々と現われて、懐しさに胸いっぱい。時間に余裕ある熟年世代におすすめしたい本だ。(浦)



ホームページを作った

千葉県市川市 ● 犬伏 裕子

高校生の娘がホームページを作ると言い出した。ハイパーテキスト用の面倒な言語を使わなくても、今はワープロ感覚で簡単にホームページを作成できるソフトがいろいろ出ているので、不可能ではないと私もその気になった。

漫画を描くのが好きな彼女は、自分の描いたイラストを載せたいと言う。ではまず、スキャナーを買わなくては。

絵を描くんだったらメモリを増やさないかね。この際だからシステム・ソフトも最新のバージョンにしよう。

というわけで、池袋のパソコン専門デパートへ出かけた。

増設メモリが二万円、システム・ソフトが一万四千元、スキャナーが三万五千元、しめて六万九千元なり。けっこうな出費だ。

しかし、ツールさえ揃えば作ることは実は実に簡単。文章はどんどん打ち込んでいけばいいし、絵や写真はスキャナーで取り込んで、作成ソフトの原稿ページに引っ張ってきて貼りつけられればOK。

こうして自分のパソコンの中で完成させたホームページをプロバイダーに登録できれば、もうインターネットの網の中に専用のスペースを確保できた気分だ。

ただし、ホームページって作るころまでは一気にやれるけれど、その後のメンテナンスが大変みたい。私だったらきつと作っただけで満足して、そのうち訪れる人もない廃墟のようなホームページになってしまうだろうなと思う。

その点娘はなかなかまめで、しょっちゅう表紙を新しくしたり、日記を書き加えたり、新作イラストを次々にアップしたりと手入れを怠らない。学校のお友達が毎日掲示板に来てくれるので、さながら女子高校生のおしゃべりサロンのようだ。

問題はやはり電話代。めいっぱい割引オプションを利用してはいるが、月々の請求額はまず一万円を切ることはない。

もしパソコンがなかったら、うちなどは基本料金に毛が生えた程度の電話代ですむはずなんだけれど……。

私も ひとこと

物忘れのひとさ

新潟県新津市 柳本絵子

あー良かった。私だけじゃなかったのだと物忘れのひとさに人知れず悩んでいた最近の私。「ノー・プロブレム」を読んでホッ！「一階建ての家を建てるか否か真剣に悩んでいる。今の平屋の家だつて水平面で右往左往しているしまつたから、それに高さが加わったら毎日が大混乱におちいりそう。高齢の方でもしっかりとした方がけつこういらつしやる。どう工夫(?)して生きていられるのかナ?

プロとアマの違いって何

埼玉県大宮市 新井純子

仲間四人で新しいタイプの地域新聞を創ろうと計画中。広告プロデューサーの彼女「主婦の持ち込む企画 何かエキスキューズがあつて甘い。今いち使えない」と言う。またある人は、「お金もらつたらプロでしょ」と言う。中三の娘は、「一般的に説明する時は、それが一番わかりやすいかもね。でも本当のところは、プロもアマも同じ。逆転つてこともあるよね」だつて観察力がある。

言っちゃった

愛知県豊橋市 藤池弘子

ただいま専業主婦の私。どうも他人には、日中ふらふらしている人と思われているらしい。ある日、同じマンションに住み、パートでお掃除をしているMさんに聞かれた。「Sさん、仕事してないの」「はい」と私。するとMさん「いいわね」と言う。どういう意味だろうかと迷つたが、出てきた言葉は「そうね……」これにはMさん、何も言えず、雑巾を持った手が止まつていた。

昔のラッシュ、今のラッシュ

東京都中野区 山内志保(71歳)

終戦後ラッシュ時の電車の混雑は大へんなものであつた。しかし降車駅に来て「降ります」と言うのと皆協力して通路をあけてくれた。今は「降ります」と声をかけても少しも通路をあけるべく協力する人はなく、そのままつ立つている。仕方がないので、押して自分で通路を作つたら、お嬢さんが蚊の啼くような声で「押さないで下さい」ですつて。それならどうして道をあけてくれないのかしら。

「わいふ」と十年

東京都北区 安村豊子

結婚して間もなく「わいふ」を知り、早や十年が過ぎた。途中方向性に疑問を感じ、忙しさに投稿もなくなつてやめようかな……と思つた時もあるが、最近又書くことが楽しくなつてきた。読むことも楽しく、二八〇号では老化現象と葬儀の記事が自分や老親とも重ね合せ、とても興味深かった。独身に毛のはえたように頼りなかつた私も、今や二児の母、年齢と共に先輩方のように深みのある書き手になりたいものだ。

骨菓子!?

奈良県生駒郡 高松恭子

二八〇号の私の文中写真の説明、確かシューズを入れてほしいと書いたのに、柩にシューズを入れてほしいになっていました。靴と書けばいいものを、やはり横文字はいけません。

柩にシューズを入れたら、お骨が大学卒のようにアメがけになるし、シューズを入れたらゴムが燃えてダイオキシシン発生、何も入れないのが一番。シンプル・イズ・ベスト!!
アッ!! また横文字使った……。

ワインじゃないぜ

リトルロック市 伊藤琴子

夏にシカゴを訪ねた時、義妹が私の大好きな赤飯を炊いてくれた。外国で食べる赤飯はことのほかおいしい。やさしい義妹である。

私はゴマが好きなので義妹に、「赤飯にかけるからちようだい」と言った。古いのしかないと言う彼女に、何でもいいからくれと言った私。弟、彼女、姪はゴマには手をつけた。後でゴミ箱に入っていたゴマの袋の賞味期限は昭和五十四年となっていた。古!

オトコのヒト

東京都葛飾区 田窪孝子

久しぶりに学生時代の友人とおしゃべり。三十六歳。三人共結婚十年目位の二人の子持ち。ダンナ以外の男の人としゃべったことって最近ある? 「ないよね」「うん、全然ないね」。三人で大きくうなづきあつてしまった。専業主婦でいると、男の人と接する事がほとんどなくなる。それが緊張感のなさにつながるのか……。せめて、夫の前で少しきれいにしてみようかなあと反省する秋の夜長である。

あなたにわたってくださったのだ

東京都世田谷区 後藤 晶(41歳)

石原東京都知事が、重度心身障害児・者の病院を視察後「ああいう人に人格はあるのか」「自分の文学の問題にふれる」などと発言し、反発が起こった。私は、長年文学と政治に携つて来た人が今までの問題を考えずに来たららしいことに驚いた。

たとえ身近にはなくとも報道で接する機会はあるはずなのに。神谷美恵子さんの詩の「なぜ私ではなくあなたが?」という表現を思ひ出す。

自分が一番、次男

名古屋市守山区 柳澤幾美(42歳)

我々は今年の五月に結婚十周年を迎えた。まわりからも仲の良い夫婦と評判である。

ある時、「私は今でもあなたのことが誰よりも好きよ」と私が言う、夫がすかさず「僕も!」と言う。思わず、「あら!」と、にっこり笑つたら、夫が「僕も僕のこと誰よりも一番好きだよ。気が合うなあ」だつて。

そうか、やっぱり夫は「自分が一番、次男」だと、納得した。

母親の育て方によつては……

東京都足立区 島村君子

先日レーナ・マリアのコンサートへ行った。彼女は両手と、片足が半分なのに健常な足一本で水泳選手としてパラリンピックに出場。

また、歌手として日本各地で素晴らしい歌を聞かせてくれている。母親は生まれたときからハンディをかくさず、人前に出したこのこと。もし家の中に閉じ込めていたら、レストランでも臆することなく足で食事をするという、明るい女性にはならなかったと思つた。

『母と子』 12月号

定価 500 円 / 送料 68 円

〈今月の視点〉 公立小中学校の自由選択

学校づくりへの住民合意の不足 平湯 統一

一品川区と日野市の自由化発表に見る一

- ◆アメリカ便利 学校選択制下で娘の小学校選び 山本由美
- ◆落語に学ぶ 個性とコミュニケーションの関係 猪股 富美子
- ◆葛藤体験が何よりも宝 総合学習のメッカ伊那小学校の場合 岩間克子
- ◆なぜ授業中マンガを読んではいけないか 山田雅康 & 編集部
- ◆天皇在位十周年奉祝行事の意味するもの 星野安三郎

——保存用『母と子』臨時増刊シリーズ 定価 1050 円 / 送料 78 円——

□当世 学校事情 (8月臨時増刊号)

——いち中学教員の意見—— 坂本 安之 著

203-0054 東久留米市中央町 5-4-8 電話 0424-74-9125 母と子社



婦 人 民 主 新 聞
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

からだのしんぱいは
はたらくもんだい
こころのえいよう
さべつへのいかり
アジアのうづき
あんぜんてなに？
きのうまでのみち
あしたへのみち
わたしのいけん
あなたのいけん
おんなという
ちから。

創刊以来、無党派の立場で 50 年。
その視点で創る、もうひとつのメディア。

東京都渋谷区神宮前 3-31-18-301 大阪府 大阪市北区中崎西 3-1-5
TEL 03(3402)3244・3238 TEL 06(371)2429
FAX 03(3401)3453

見本紙 お届けします。お問い合わせ下さい。

草の根は
伸びつづける。

世の中に？を
もち始めた
男たちにも。

新聞代 (送料込)	
1ヶ月	750円
3ヶ月	2,250円
6ヶ月	4,500円
1年	9,000円

毎月・5日・15日・25日発行

ふえみん 婦人民主新聞
婦人民主クラブ責任編集

(○で囲んでください)

タイトル・住所・氏名

本文

私もひとことは、投稿してみたいけど、長いのはチョットという方のためのコーナーです。わいふネットは相談や質問、掲載された質問への答えをお寄せいただくべー

ジです。あなたの声をお待ちしています。
投稿には、右の原稿用紙をご利用くださ
い。

●タイトル、住所 氏名は一行めに。もし、

二〇字を超える場合には横目にこたわらず、小さい字で、住所、氏名は他のコラムを参照してください。

●二行めから本文、全体で九行一八〇字。

[illegible]

「わいふ」をどこに置いて読んでいますか。私の友人に「わいふ」をトイレに置いて家族がいつも読めるようにしている人がいます。大学生の長男は「女の人ってこんなことを考えているんだ。母さんもそうなの」と聞いてくるし、娘さんは女性のさまざまな生き方に感銘を受けているようなのです。しかし、ご主人の意見はまだ一度も聞けないそうです。（成井）

今 年はいつまでも気温が高いく、川の水も温かい。ロールをして全身が濡れてもあまり寒さを感じなかった。らくもスイスイ泳いだ。しかし十一月にはいると、まわりの林は色づきはじめ、川辺のクルミの木も枝も実がたわわになった。カヌーで遊んでいると、水の温度や川辺の景色で季節の移り変わ

りがよくわかる。（水落）

モ ンマルトルの丘の西にあるスタンゲールのお墓に行った。古く、文字も薄れていたが、重厚な趣きあたり一面に漂っている。やつと探しあてた喜びがこみあげてくる。

こうして、はるばる東洋から訪ねてきたレナール夫人（エツ?!）の姿はどう映るのだろうか。『感動をありがとう』とつぶやきながら、ミネラルウォーターをたっぷりかけた。（山本）

我 が子に「読み聞かせ」をしなかつた母が、よその子に「読み語り」をしている。ある童話の一節「あるかなしきは泣くことができます。泣いて消すことができます。しかしある悲しみは泣くことができます。泣いたってどうしたって消すことができないのです。」「読み聞かせ」で童話の奥深さが、わからなかつたのに「読み語り

り」ではわかってくる。（野村）

赤 く色づいたトウガラシの実が、緑の葉の間から天を向いて、あざやかなコントラストを見せてくれている。

霜が降りる少し前に葉っぱだけつみ取って、浅炊きのつくだ煮を作る。わが家の晩秋の味。ついで一杯が二杯になつてしまふ。冬になつてから完熟した実を収穫し、一本だけ残しておく。毎年五月になると元気な苗がワーツと育ってくれる。（望月）

要 介護認定審査がスタートしたが、今になつて保険料徴収方法で国会をゴタゴタさせている政治家たち。区役所の高齢福祉課は、認定の結果、今までと同じサービスを受けられず困る人には「福祉で面倒をみる」と言う。「わずらわしい」の意味を持つ言葉使いに腹が立つ。今後の社会福祉の方向性に大きな影響のあることは、国民の

立場で考えて欲しい。（菊池）

千 五百円以上の肉を買った。卵十個を景品にくれる肉屋があり、ちょうど千五百円買つて銘柄品の卵をもらつた。老人世帯だから健康上余り卵は食べない。おまけに生協から届いたばかり。

そこで十個でマヨネーズを作り、編集部に持って来たがコレステロールが上がると断る人も。昔、卵は貴重品だったのにこの世の中の変わりよう。（和田）

医 者ぎらい、検診ぎらいの私が、よんどころない事情で十年ぶり?の健康診断を受けました。といってもごく簡単なものばかりなのですが、身長体重の測定もそのひとつ。ところが何と、身長が四ミリ伸びていたのです! 一六〇センチが一六〇・四センチに。ちなみに私は六十代の後半。信じられます?（田中）

「ファム・ポリティク」より

●よくもまあ、と呆れるような国民をコケにした政策がつぎつぎと自自公連立政権のなかから生まれています。

その極め付きが介護保険料の徴収を六十五歳以上の人には半年間猶予するというもので、これはもう選挙目当ての人気とり以外の何ものでもありません。しかもそのツケは国民の税金にまわってくるのは誰にでもわかる。なのに自分払わんでもいいよ、といってやれば喜ぶだろうと思われるほど、私たち国民はバカにされているのです。

●もともと大阪のある女性市議が、公園で掃除をしているおじいさんに「こ苦勞様です」と挨拶したところ、即、「あんた何も持っていないんだのか。」

まったく茫然としますよねえ。

おそらく自民党の票田には確実に、こうしたたぐいの人たちが多いのでしょう。ああ、こういう人が育てる「子ども」の顔がみたい!」。

NMS研究会より

●たくさんのご相談をうけるうちに、一番深刻にお母さんの悩みのタネになっっているのが「寝かしつけ」だということが分かってきました。

新生児は最初母親とは別に寝かされていますが、生後二、三カ月たつうちに、夜泣きが多かったり、寝つきが悪かったりして、お母さんはいよいよ寝やだつこでの寝かしつけにはまりこんでしまします。なにしろそれを奨励する育児書だらけ。無理ありません。でも一度このくせにはまりこんでしまつとあとが大変なのです。

NMSでは「ラクは苦の種・苦はラクの種」と終始いうのですが、最初はラクでも、一度ついたこうした母子密着のくせがどんなに母親の育児負担を大きいものにしていくのか。

自分で自分の負担を大きくして疲れているお母さんはほんとにかわいそう、育児書の罪は大きいと思わずにいられません。

老人ホーム情報センターより

最近のニュースで介護保険法のこと

が話題にならない日はない。

「介護保険料は一定期間徴収しないことにする」と政治家が言い出した。

介護保険法は来年四月にスタートすることが決まっているから、保険料は徴収しなくても介護サービスは提供しなくてはならない。

その財源はどこから持ってくるのだろうか。

どうも赤字国債を発行するようだ。

赤字国債って借金なのです。

「保険料はしばらく納めなくてもいいよ。つけは将来に回しておくから」と言われているのと同じで、国民の負担を勝手に先延ばしし、将来利息の付いたこの借金返済の義務を負わせる気らしい。

●無料電話相談・木曜十一時～十七時
☎〇三―二三三五―二八五四

募集します

特集テーマ

二八三号（二〇〇〇年四月一日発送分）のテーマは「私の読書歴」です。

読書は知的営みの最たるもので、その喜びを知るのは人間と生まれた幸福ではないでしょうか。

あなたが読書をするようになった

座談会 私も言いたい

二八三号のテーマは、「占いと運命判断・私の意見」です。

占いとか易とかいうものをまったく歯牙にかけない人もいるものですが、たいていの人は——とくに若いときには——一度や二度は占い者に見てもら

私の意見・あなたの意見

二八〇号に、新しい形の葬儀について二篇が寄せられています。（七四ページ）葬儀もさることながら、そのあとお骨をどこへ埋葬するかも中々問題があります。

そこで二八二号（二〇〇〇年二月一

きつけ……多分それはおもしろい本との出会いだと思いが……について、それから次々と読んで来た本の数々。途中でがらりと傾向が変わってしまった、誰かの影響（友人や恋人などの）で今まで知らなかったものを讀んだり、つまり読書の自分史を語っ

った経験があるのではないのでしょうか。

何ごととも度がすぎると病的になりますが、実際に占いが驚異的に当たった！という例もあり、いちがいに迷信と笑いとばすにもためらいを感じます。

次回の座談会は、いままであなたが出会った「運勢判断」や「占い」につ

日発送）のテーマは「お寺とのつきあい・お墓をどうする？」とします。

お寺と関係ない霊園を求めた方は、その規定や運営の是非・なぜ求めたかなどを。又お寺の墓地の方はお布施や戒名料、将来の相続についてなど、経験を踏まえてこれからどうあるべきか、

ていただきたいのです。

仕事上専門書をお読みの方は、それも書いてください（但し分かります）

字数 二千～四千字程度

締切り 二〇〇〇年二月十日

いて、プラス面、マイナス面の双方から語っていただきたいと思えます。

日時 二〇〇〇年一月十一日（火）

二時～三時半

ところ 「わいふ」分室

申し込みは十二月二十日まで電話で編集部へどうぞ。

どうしたいかのご意見を募ります。

ごく少数ながら散骨（自然葬）も行なわれているようですが、それについても賛否両論を。

字数 千字～二千字程度

締切り 十二月二十日必着

年末なので締切りが早まります。

◆グラフィア「私の……」

写真と文で登場してみませんか。ご希望の方は、編集部へ電話でお申し込みを。詳しく説明します。

◆特集

毎回テーマを設定しています。一四九ページをご覧ください。

一六〇〇字のコラム

(どのコラムも字数は目安で、多少長くても内容がよければ掲載します)

◆エッセイスト・クラブ

キマった文章、豊かな内容の随筆をお送りください。

◆ズバリ一言

オピニオン、評論のページ。あなた独自の考えを。

◆家族のスケッチ

同居、別居を問わず、あなたの家族のことをお書きください。

◆子育てフォーラム

おさない子、思春期の子。どんなときも親にとって子どもの存在は気になるもの。ありのままの関係を描いてみませんか。

◆ワーキングライフ

あなたは、どんな働き方をしていますか。さまざまな仕事の喜びや苦労話を。

◆今これに夢中

人生八十年時代。趣味その他、仕事以外に生きがいを持つ方も多いはず。あなたは何に夢中ですか。

◆フリートーク

どんなテーマでもどうぞ。どのコラムにも当てはまらないテーマを。自由なコーナー。

八〇〇字のコラム

◆あなたへスマッシュ

本誌の投稿や記事についての感想、意見を載せます。何号のどの投稿に対するものかを明記して。

◆ことばでハッピー

ことばの使い方はとても難しいですね。時には人間関係をこわしたり。でも、発想を変えて工夫することで、お互いの関係をよくすることも可能です。

失敗談も含めて面白い話題をどうぞ。

◆パソコンワールド

急速に普及し始めたパソコン。楽しんでい

る人、振り返られている人、体験談を。

◆おすすめの一冊

書評のコラム。どんなジャンルのものでも結構です。お読みになった本について感想を含めて、ご紹介ください。

四〇〇字のコラム

◆笑える！

嫌な話題の多い世の中。思わず笑ってしまう楽しい話を。

◆私の意見・あなたの意見

賛成か、反対か一四九ページにテーマを載せています。皆さんの素直な意見を求めます。

その他

◆私もひとこと(一四六ページ参照)

どんなことでも気軽に書きください。

◆わいふネット(一四六ページ参照)

教えて欲しい、聞きたい！ それに対するお答えも。読者参加のQ&A。

◆情報コーナー

お知らせ、募集など。要点を漏れなく整理してお寄せください。(一四三・一〇行にまとめて)

投稿の

◆特別寄稿

字数自由。どのようなジャンルのものでも結構。本誌に適合と思われるものは掲載します。出版社に紹介することもあります。(ただし詩、短歌、俳句を除く)

◆コミック、イラスト、写真

一度作品をお送りください。本誌に合うものであれば依頼したいので。

注意

●原稿はお返しできません。

●投稿は一人一篇ただし、「あなたへスマッシュ」「おすすめの一冊」「私もひとこと」「わいふネット」「情報コーナー」とはだぶっても可。

●締め切りは原則として偶数月の二十五日。郵送で当日必着。(読みにくいので、ファクスではお送りにならないようお願いします)

●他誌との二重投稿はお断りします。

●写真や、イラストを用意できる方は原稿とあわせてお送りください。

●誌上での匿名 ペンネーム使用可。ただし

いくつものペンネームを使い分けるのはご遠慮ください。

●掲載を希望しないお便りは「私信」と断り書きを。

●投稿は多少添削することがあります。

●最初に次のようにお書きください

原稿用紙は必ず開いたまま右上1カ所を留める

ペンネーム・匿名希望の方は明記

本文……	タイトル	コラム名
		ペンネーム・匿名 住所 会員番号 本名 電話番号
		年齢

なくても可

①

ページを明記
(場所はどこでもよい)

匿名の方は住所を
載せるかどうかを明記

●四〇〇字詰原稿用紙に縦書き。ワープロ打ちは二〇字×二〇行を一枚に、行間一行おきにあげる。字間はとくにあげないで。

へあて先 〒162-0815 新宿区筑土八幡町一―二―二〇一

わいふ編集部

投稿のきまり

編一集一だ二より

◆二八二号に掲載する座談会「パソコンと私」は、近來にない人気で、大勢のお申し込みがありました。

しかし座談会の人数には限りがあつて、三、四人だとして話がまとまります。多くても五人までですから、お断りした方もありました。いつも応募が少なく困つてゐるのに、残念です。

これで見るとやはりテーマが大事なのですね。二八〇号の編集だよりでもお願いしましたが、皆さんぜひ「こんなことを取り上げて欲しい」と、テーマをご提案ください。お待ちしております。

購読申込は……

ハガキか電話、ファクスでどうぞ。すぐに、本に郵便振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。限られた書店にしかおいてありませんので、直接お申し込みください。

購読中止は……

必ずお申し出ください。誌代が切れる際には、郵便振替用紙を同封していますが、送金をお忘れになる方があるため、誌代が切れても、引き続き送本しています。ご連絡がないと、お送りしてしまいますので、ぜひハガキかお電話を。

わいふ◆281 (隔月刊)

- 発行日 2000年1月1日
- 編集 わいふ編集部
- 定価 620円 (本体590円)
- 年間購読料 4224円 (送料共)
- 印刷 平河工業社
- 発行所 ㈱グループわいふ
〒162-0815
東京都新宿区筑土八幡町
1-3-201
電話(03)3260-4771
FAX (03)3260-4773
- 郵便振替 00150-3-110430
加入者名 わいふ編集部

◆ところで今号の特集には、編集長が「ぜひ書きたい」と、四十年ぶりのアメリカ再訪を書いています。日本人が皆アメリカに憧れていたころの話です。飛行機代が高く乗れず、船で行ったなんて今では信じられませんか。

◆田沢未実さんの「出会いと別れ——私の場合」が終了しました。妻にも子供にも、全く関心がないというか、妻は家庭の責任者、おれは責任ない、と知らん顔をきめこんでいる夫。何とか幸福な家庭を築こうと、一人相撲の果てに絶望して別れる妻。

形だけの家庭は、決してこの例に限ったことではないようです。

◆二八〇号七六ページ、「ゼッケンをつないだタペストリー」の写真のキャプション

が間違っていました。「ジューズ」とあるのは「シューズ」です。校正で気付かずまことに失礼しました。今号の「私もひとこと」に、筆者からの指摘が載っています。

◆二八二号から、グラビヤのテーマを変えたいと思います。

「わが家の歴史写真」。どこのご家庭にもある古い写真とその説明をお寄せください。「父・母を語る」「子育てのころ」など、テーマを一つにしほつて構成されてもよく、ただ古いお写真を並べて解説をつけられてもけっこうです。

◆年末なので締切りが早まります。ご投稿は十二月二十日必着でどうぞよろしく。

笑う不登校

●子どもと楽しむそれぞれの日々

『笑う不登校』編集委員会編

『不登校』から白山になって、さまざまな地域で、子育てを
楽しみ、自分を楽しむ20人の親の手記！ ☆1500円

＜推薦＞ 石川憲彦・内田良子・大田 堯・奥地圭子・落合
恵子・芹沢俊介・久田 恵・山下英三郎

なぜ学級は崩壊するのか

●子ども・教師・親 200人の体験と提言
朝日新聞社会部編 好評3刷☆1700円

ヘンテコおばさんと子どもたち

黒岩秩子●非常識のハーモニ

不登校児、障害児、その親たちとともに学び、歩んだ
道をふり返り、反省と新しい発見を綴る。 ☆1700円

宗教トラブルの予防・救済の手引

●宗教的活動にかかわる人権侵害についての判断基準
日本弁護士連合会消費問題対策委員会編 ☆1600円

戦争論と妄想論

●宮台真司・姜尚中・水木しげる・中西新太郎
若桑みどり・石坂啓・梅野正信・沢田竜夫

大好評続々増刷出来ノ

☆1800円

教育史料出版会

〒101-0065 東京都千代田区西神田2-4-6
☎03(5211)7175 FAX(5211)0099 ☆税別価

妻と夫が 定年後を 楽しく 暮らす本

グループわいふ・編著

●趣味だけでは人生を過ごす
支えにならない

●老後の資格、最も将来性あ
るのは……

●身体を動かす暮らしが老後
を支える

●「老後はボランティヤで」の
落とし穴

河出書房新社(☎03-3200-1101)

“主婦集団”が
足で集めた
エピソードの数々

◎本体1400円(税別)

毒の科学Q&A

水谷民雄著



多様な化学物質と隣り合わせの現代生活のなかでは化学物質とその毒性の基礎知識をもち、むやみに怖がらないことも自己防衛の一つ。本書は毒とは何かを一間一答すく説く。話題の毒物をわかりやすく解説した注目の書! 二二〇〇円

介護休業でいい仕事いい介護

沖藤典子著 ● 家庭も自分も大切にするために、自身が狭間に立って悩んだ著者が、介護と仕事の両立を探す人たちに捧げる意欲作。読んでわかる介護休業制度。 二二〇〇円

介護が変わるみんなでお変える

樋口恵子編 ● 女性が進める介護の社会化Ⅳ 高齢化を縦糸に男女共同参画社会の実現を横糸にして、介護保険施行前夜のいまを幅広い範囲の専門家が語り合う。 二〇〇〇円

住んでみた老人ホーム

安宅 温著 ● 上手な選び方暮らし方 いざとなる前に知っておきたい、自分にあつた老人ホームの選び方、住まい方を、入居してみた体験からお教えします。 一八〇〇円

今どき子育て事情

丹羽洋子著

過食・拒食の家族療法



福田俊一／増井昌美著 人生の節目に待ち受ける過食症・拒食症の落とし穴を、本人と家族が乗り越え、支えあう家族療法の実際を事例を通して紹介する。 二〇〇〇円

目不酔草紙

めざましそうし
フェミニストカウンセラーのみた女たち

河野貴代美著 女性の生き方を問い続ける著者の初エッセイ集。カウセンクの現場をとおして描いた現代の社会を生きる女性たちに捧げる「読むセラピー」。 一八〇〇円

現代日本女性の生き方

山縣喜代著

宗教的・倫理的価値意識と心情 宗教的・倫理的価値意識からその特色を描いた希少な研究書。 二八〇〇円

法律でみる女性の現在

高橋 保著

ライフサイクルと法 女性がより豊かに生きるために必要な法律を、家庭、職業、社会生活面から紹介。 三五〇〇円

ジェンダーの社会心理学

青野篤子／土肥伊都子／森永康子著 ● 「男」と「女」の思いこみを科学する 性別分業社会と人びとの意識。 Ⅱ 近刊 Ⅱ

● 二〇〇〇人の母親インタビューから 電話インタビューを通して得た子育て中の母親の声をまとめた。少子化、育児不安という言葉にゆれた90年代の親子の姿が浮かぶ。 二二〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1番地 宅配可・価格は税別
TEL.075-581-0296 FAX.075-581-0589 <http://www.minervashobo.co.jp/>